峰より峰に我等を促し立て、つひにいと高き頂きに到らしむるところの本性なり。

淑女よ、この事は我を誘ひ我を力づけ、我に明らかならぬ今一の眞實につきて、かしこまりつつも汝に問はしむ。

願はくは我に知らせよ、人は完からぬ誓のために、汝等の天秤にかけても輕からぬほど、他なる功德をもて汝等の處に賠ひをなし得るや否や。」

ベアトゥリイチェは愛の火花のみちみちたる、いとも聖なる目をもて我を見たりしかば、我が力は支へかねて逃げいだし、我は目を垂れつつも殆んど我を失へり。

第五歌

「よし我が、世に例なきほど愛の火をもて汝の上に燃え、汝の目の力に打ち克たむとも、そは觀照の進むにつれて、愈々觀照せられたる至善へ進みゆくところの完き觀照力より出づるなれば異むことなかれ。

我は明らかに見るなり、單だ見らるるのみにして常に愛の火を燃え立たしむる永遠なる光の、はやくも汝が理智のうちにかがやけることを。

若し、何等かの他なる物ありて汝等の愛を惑はさば、そは其處にさ

二〇、「アンニバアレ」――ハンニバル也。彼西方アルプス山を踰えて伊太利に侵入す（第二ポエニカ戰爭始まる）。猶地、三一の註二五參照。

二一、「亞剌比亞人等」――ダンテの時代にカルタゴは亞剌比亞人によりて占住せられたりき。ダンテが當時の居住者亞剌比亞人を以て古代カルタゴ人を意味せる此の時代錯誤的表現は押韻の都合に依りしものの如し。

二二、「スシピオネ」――大スキピオ（前二三四年頃―同一八三年頃）。地、三一の註二五參照。

二三、「ポムペオ」――大ポムペイウス。若冠にして武名赫々たり。羅馬がそのために凱旋式を擧げしは前八一年（彼廿五歳の時）なりき。

二四、「汝の鄕土の上なる山」――ダンテの生地フィレンツェの上なるフィエソレの山。名高き陰謀家カティリナの軍の根城なりしもその死後（前六二年羅馬人によりて破壞せられしと。

二五、この一節、――基督降誕に間もなき頃羅馬の民及び議會の意に從ひてジュリオ・チェエザレが此の旗章を手にとりたり。――ダンテの考へにては、帝國の建設は世界平和の黎明なり。故に、チェエザレは恰も洗禮者ヨハネの如く救世主のために道を備へしなり（「饗宴篇」四、五の一六以下）。

し入れるかの光の名殘の、見誤られたるにほかならじ。

汝が知らむとねがへるは、果されざりし誓をば、他の奉仕によりて償ひ、しかも魂をして訴訟よりまぬがれしむるを得べきや否やといふことなり。」

斯くベアトゥリイチェはこの歌章をうたひ出でたりしが、其言葉を斷たざる人のごとく、またその聖なる談義をつづけていふ。

「神がその創造にあたりて惠み與へたまへる物のうち、彼自らの至善に適ひ、また彼にいと貴く思はるる最大の賜は、すなはち意志の自由なりき。

理性をもてる生物等は、彼等ことごとく、また唯だ彼等のみ、むかしも今もこれを賦與せらる。

いま、汝若しこれより理を推しなば、誓ひが人の肯へるとき神もまた肯へるものなる限り、その價の貴きこと汝に明らかなるべし。

けだし、神と人との間に契約の成るにあたりては、わがいふところのこの寶は犧牲にされ、しかも寶自らによりて犧牲にさるるなり。

されば、何物かよくその償ひとなさるることを得む。

なんぢの捧げたる物を他の善き事に用ひむと思はば、汝は不義の所得をもて善業をなさむとねがふにひとし。

汝はすでに眼目を會得せり。されど聖教會は誓の事に於て免除をなし、わが汝にあらはしたる眞實に反くと思はるるなれば、汝は尙ほ少時がほどを食卓につきてあるべきなり。

二六、「ゾアロよりレエノにかけて」――前者は佛蘭西東南端の河の名、後者は名高きライン河――前者は古、外ガリアと內ガリアとの境をなし、後者は外ガリアとゼルマニアとの境をなしたり。

二七、「イサアラ」――佛蘭西なるイゼル河。

二八、「エエラ」――イサアラと同じくロオヌに注ぐ河の名。今はサオヌ河。――「センナ」――佛蘭西なるセエヌ河。

二九、この一節、――チェエザレがガルリア討伐の後ラヱンナより出でて內亂を鎭定せしこと（地、二八の註一二〇參照）。

三〇、「ドゥラッツオ」――アドリア海東岸なる希臘の町。チェエザレがポムペオに圍まれし地。

三一、「ファルサリア」――テッサリアの町。此の附近の野にてチェエザレ大いにポムペオを敗れり（前四八年）。

三二、「ニイロ」――ナイル河。――ファルサリアの戰埃及にまで波及して彼地の禍となりしことを指せり。――ポムペオは敗後彼地に遁れ國王トロムメオ十二世に身を寄せしも却つて彼のために殺されたり。

三三、「アンタンドロ」――エエネアの伊太利へ向けて船出せし處なり。

三四、「シモエンタ」――トロイア附近を流るゝ河

けだし、なんぢの取れる固き食物は、なんぢの消化す爲めに、尙ほいささかの助けを要すればなり。

汝の心を開きて、わが汝に示すところの物を受けいれ、これをその内に藏めよ。聞きたるを留めざるは、知識をうるの道にあらず。

そもそも二の物相結びてこの犧牲の心髓をなす。一は誓ひをなすにあたりて取り用ひらるるところの物、いま一は契約その事なり。

この後の者は果さるるにあらずば、消ゆることなし。但しこれに就きては、我さきに既に明らかに述べたりき。

乃ち、希伯來人にありては、汝の恐らくは知れるごとく、捧げらるる物は他の物に易ふるを得たりしかど、捧物をなすといふことのみは如何にとも避くるに道なかりき。

誓ひの料として汝に知らるる今一の物は、固より、何等かの他なる物に易へられしとも、罪過とならざることを得む。

されど、白きと黄なると二の鍵の廻るをまたずして、何人もその脊に負へる荷を、心の儘に取り換ふことのなかれかし。

又、取り上げらるる物にして、置かるる物を包容すること、六の四を包容するが如くならずば、いかなる取り換へも愚かしと彼の思へかし。

されば、凡そそれ自らの價値によりていと大なる重さを有ち、いかなる天秤をも引き下ぐるほどなる物にありては、他の費をもてこれを償ふこと能はず。

三五、「エットレ」――地、四の註三七參照。

三六、「トレムメオに禍しき」――チェエザレが埃及王トロムメオ（註三二參照）を廢してその姉妹クレオパトラを立てしことを指せり。

三七、「ジュウバ」――ヌミディア王イェムプサルの息子。ポムペオに與せしためチェエザレの憤るところとなり、攻められて後自殺せり。

三八、「ポムペオの喇叭」云々――ポンペオの二子並びにその黨與、尙勢力を恃みてチェエザレに逆ひしも西班牙のムンダ（「汝等の西」）の戰に敗れ（前四五年）此處に内亂平定せり。

三九、「次ぎにそれを持ちし者」――オッタギアアノ・アウグスト。煉、二九の註三一參照。

四〇、「ブルウト及びカッシオ」――チェエザレを暗殺し、アウグストのたにフィリップの戰に敗らる。尙、地、三四の註九、一〇參照。

四一、「モオデネ」――フィレンツェの北方約六十哩の地。オッタギアノ此の町の附近にてマルコ・アントニオを敗れり。

四二、「ペルウジア」――テエエレ河の上流なる伊太利中部の町。――前四一年、アントニオの兄弟ルチオ此處にてオッタギアアノのために虜へらる。

四三、「クレオパトラ」――地、五の註一四參照。

人々よ、誓ひを苟且事と思ひなすなかれ。これに忠實なるはよし。されどイェフテの其初めの供物に於けるごとく、輕々しく誓ひを立つることなかれ

彼は其誓を守りて更に惡しき事を爲さむよりも、寧ろ『われ過てり』と言ふべかりき。汝はまた希臘人等の大將の同じさまに愚かしきを見出づるならむ。

その愚かしさの故にイフィジェニアは彼女の妨きことをなげき、かくの如き祭式を傳へ聞ける、愚者智者いづれもをして彼女の爲めに泣かしめぬ。

クリスティアンよ、なんぢら身を動かすに愼重なることを加へよ。風の吹く度に舞ひ立つ羽のごとくならざれ。またいかなる水も汝を洗ふを得むと思はざれ。

汝等には舊約新約あり、汝等を導く教會の牧者あり。汝等これをもて汝等の救ひをうるに足れりとせよ。

よし惡しき貪慾の汝等に他なる物を呼び求めむとも、汝等愚かなる羊とならずして人間となれ。さらば汝等の中なる猶太人の汝等を笑ふことなからむ。

汝等は己が母の乳をすて去り、おろかしく又ほしいままに、意の儘に己自らと鬪ふ羔のごとく爲すなかれ。」

斯くベアトゥリイチェは、あだかも我が記すごとく我に言へりき、さて憧憬をもて彼女は、宇宙のいと多く生きたるかの處に再び向へり。

四四、「ジァアノの神殿」――ジァアノ（ヤヌス）神――古代羅馬人の祀りし神――の神殿の扉は平和の時にのみ鎖されき。そは、戰時にありては此の神が戰場に赴きて不在なりと思はれしため扉は開け放されしまゝなりしに由る。羅馬共和國時代にありてはその鎖されしことただ二回のみ。されどアウグストの治下には三度鎖され、その一つは「天上の擧りて世をそれ自らの如くのどけからしめむことを思ひし時」にて、そは基督降誕の時を指せるなり。その次は、「如何なる戰爭も、如何なる雄叫の聲も普く世界に聞えざりし時」なりき。

四五、「第三のチェエザレ」――皇帝ティベリオ（在位一四―三七年）。その治下に基督の磔刑行はれ、之に依りて贖罪の大業は成されたり。之に比すべき大業は後にも先にも絶えて無し。

四六、この一節、――神（「生ける正義」）はアダモの原罪に對する忿怒を和ぐる（基督の死）の名譽をば羅馬帝國の權威の下に行はしめ給ひき。

四七、「『復讐』に『復讐』を」――アダモの原罪に對する復讐は基督の磔殺によりて果さ、基督磔殺に對する猶太人への復讐は、羅馬の將軍ティトによりて成されたりとの意（煉、二一の註二二參照）。

その沈默と變貌[二]とは、はやくも新なる質疑を抱きゐたりし我が燥急り立つ心をしづまらしめき。

しかして弦のしづまるに先だちて的にあたる箭のごとく、その如く我等は第二の圏にいたれり。ここに我は見ぬ、かの天上の光に入りしとき、我が淑女のいたくも悅びて、爲めにかの遊星自らさへ愈々輝かしくなりしほどなるを。

さて、星さへ變りて微笑みたりしならば、本來いかさまにも變り得る此我の、如何なるものになれりしぞ。

靜かに清らけき池の中にして、魚のその餌と思ひなすもの外より來れば、その物に魚の寄り行くごとく、千にも餘る輝きの我等の方により來るを我は見ぬ。しかして其各の、「見よ、我等の愛を增し加ふべき者を[三]」と言へるを聞きぬ。

かくて各の我等に來りしとき、その魂が、それより出づる光のけざやかなるによりて、悅びに充ちみちたるを我は見ぬ。

讀者よ、ここにはじまれる物語の若し進まずば、汝がその先きを知らむとて如何ばかり苦み求むべきかを思へかし。

さらば汝自ら知るならむ、彼等の我が目に現れしや否や、彼等より彼等の情態をきかましと願ふ我が心の如何なるものなりしかを。

「嗚呼、幸多く生れて、戰ひのはつるに先きだち、永久なる凱旋の寶座を見ることをゆるさるる者よ、あまねく天上にひろごりゆく光もて我等は燃えたるなれば、なんぢ若し我等によりて汝自らを照らさむこ

四八、「ロンゴバルディ」――後にはロムバルドと呼ばる。六世紀の後半伊太利に侵入し其の北部に强國を建てしテウトン族。――「聖教會を嚙みし」とは教會に對する迫害を指せり。

四九、「カルロマアニョ」――フランク王ピピンの長子にして名高きシャアルマニュ（チャアレス）大帝。――七七四年法王アドリアアノ一世の懇請を容れてランゴバルディ王國を滅して自ら伊太利王となれり。その西羅馬皇帝となりしは漸く紀元八〇〇年の基督降誕祭の日なれば、ランゴバルディ王國に對する戰につきて、ダンテが此處に「かの旗章の下にかちいくさしつつ」と言へるは明かに時代錯誤なり（同樣の記事「帝政論」三の一」にも見えたり）

五〇、この一節、――佛蘭西（プウリア王カルロ二世）の勢威をかりて帝國に逆ふグェルフ黨も、私黨の利慾のために帝國を獨占せるギベリン黨も何れも非なり。――「黃なる百合」は佛蘭西王家の紋章。「公の旗章」は羅馬帝國全體の旗章なる「鷲」也。

五一、「新しきカルロ」――プウリア王カルロ二世（煉、二〇の註三一參照）。「新しき」と言へるはカルロ・マアニョに對してなり。次の「その爪」とは鷲の爪卽ち彼カルロよりも更に强き諸君主（獅子）を征服したる羅馬帝國の權力な

とをねがはば、心の儘に汝自らを飽き足らはせよ。」

それらの信心ぶかき魂等の一四人が斯く我に言へりしとき、ベアトゥリイチェは、「物言へ、安んじて物言へ、しかして神々を疑はざるが如く疑はざれ」といふ。

「我は、汝が汝自らの光の中に巢ごもれること、又汝の目よりそれを引き出すことを明らかに見る。汝の微笑むとき汝の目のきらめくによりてなり。

されど、嗚呼貴き魂よ、我は汝の誰なるやを知らず。又、他の光に覆はれて人間の目に見えざる、この高き天上の位を、何故なんぢが占むるやをも知らざるなり。」

さきに我に物言へりし光にむかひて、かく我はいへりき。これを聞きてその光は、前よりも遙かに輝かしくなりにき。

あだかも、濃き水氣のとざしたるを熱の食ひ盡したるとき、太陽が强きにすぐる光もて自らを包むがごとく、增し加はれる悅びの故に、かの聖なる姿はそれ自らの輝きの內に我よりかくれき。

さて斯く閉ぢこもりつつ、次ぎの章にてうたはるる如く我に答へき。

第六歌

「ラヂイナを娶れる古人につきて、かの鷲の從ひゆきたりし途なる天

五二、「眞實なる愛」――神に對する愛。

五三、「眞珠」――水星。先きには月をも斯く呼びたり（天、三五九頁一六行參照）。

五四、「ロメオ」――ジョヴンニ・ギルラニの傳記に從へば、一人のロメオと呼ばるゝ羅馬への巡禮者（之よりしてその名稱は出でしならむ）がプロヴンスの伯爵ライモンド・ベリンギエエリ四世の宮廷に來り、その寵を得て厚く之に仕へ、その財政を整理して大いに之を殖やし、また伯の四人の娘を夫々に王妃となしめたり。卽ち、長女マルゲリイタは佛王ルイ九世に、次女エレオノオラは英王ヘンリイ三世に、三女サンツィアは右ヘンリイ三世の弟なるリチャアドに、末女ベアトゥリイチェはプウリア王カルロ・ダンジオ一世に嫁したりき。然るに後貴族等の讒に遭ひしため漂然として伯の許を去りしが、その行方を知れる者無しと。

五五、「彼を讃めたることなるべし」――逆境にありて、尙志を渝へざるその不撓不屈の精神に對して也。ダンテは、此處にジュスティニアノの口を藉りて、自己の感慨を吐露せるなるべし。

第七歌

（第二天（水星）。基督の罪を求めし者、その三。基督の死及び贖罪、靈魂不滅。）

體の運行に逆ひ、コンスタンティノ[一]がかの鷲をむかはしめてよりこのかた、二百餘年[二]の間、神の鳥はそがはじめて出で來りし處の山々に近き、歐羅巴のはてにとどまり、かしここにて其神聖なる翼をかざして、手より手にと世を治めつぎ、さて斯く遷り變りつつ我が手にくだり來ぬ。

我は皇帝[三]なりき。我はジュスティニアアノ[四]なり。我がおぼゆる第一の愛の聖旨によりて、諸の律法の間より徒らに剩れるを取り除けり。

わが此業に心を向けざりし內は、我は基督に單だ一の性のみあることを信じ、又かかる信仰に滿ち足らへりき。

されど至上の牧者、祝福されたるアガピイト[六]はその言葉をもて我を純正なる信仰にむかはしめき。

我は彼を信じたりき。しかして彼の信じたりしところのものを、今わが明らかに見ること、あだかも汝があらゆる矛盾の眞實と虛妄となるを見るごとし。

わが教會と步調を一にして進むや否や、神は恩寵によりて此高き業を我に思ひ立たすことをよろこびたまひ、我は我自らをあげてこれに當りき。

さて我はわが武器をわがベルリサアリオ[七]に委ねしが、天上の右の手は彼に加はりて、わが自らを休むべきことの標徵となりにき。

今、第一の問へのわが答はこれにて終りぬ。されど其答の行きがかりは我を强ひて言葉をそれに附け加へしむ。

一、この一節、――原文は羅甸語。「オザンナ」は神を讃美する言葉なり。「惠まれたる火」とは諸天使及び諸聖徒なり。

二、「二重の光に纏はれたかの靈」――皇帝ジュスティニアアノの靈。――「二重の光」と言へるに就きては、多く彼の皇帝及び立法者としての二重の光榮を示すと稱せらるゝも、此歌一―二行の頌歌中に見ゆる神の光とおのが光との重れるなりと見る說もあり。

三、「『ベ』と『イイチェ』とのみにても」――ベアトゥリイチェの名前の一部を聞くにさへ畏敬の念抑へ難きを以て敢て彼女に問ふこと能はず。――一說に、現今にても「ビイチェ」はベアトゥリイチェの略稱なりといふ。

四、「正しき復讐の」云々――天、三八三頁七―九行並註四六、四七參照。

五、「人より生れしにあらぬかの人」――直接神の創造を受けし者、始祖アダモ。

六、「幾世紀の間」――煉、三三の註一六參照。

七、「『神の言葉』」――名高き約翰專冒頭の句（一―五）より取られたり、「太初に道あり道は神と偕にあり道は卽ち神なり」云々。――此處、ては基督が世の常ならぬ道を經て人の世に生れしことを述べたり。

八、この一節、――基督罪に隸屬せる人間の性

そは、かの神聖なる旗章を我が物顏なる者も、それに逆ふ者[八]も、いかに多くの理由によりてそれに反けるやを、汝が見ることを得むためなり。

見よ、いかに大なる德の、それを崇むるに足るものとなしたるかを。」かくて彼はパルランテ[九]がそれに一の國を與へむとて死にしときより說きはじめぬ。

「汝は知れり。かの旗章が三百餘年に亙りてアルバ[一〇]にとどまり、つひに三人の三人と、その爲めに復もや戰ひしときにまで及べることを。

又汝は知れり。サビイニ[一一]の婦等の禍よりルクレエティア[一二]の哀みに至るまで七王の間に、かの旗章の隣れる諸の民を打ちしたがへて、いかなる事を成したりしかを。

汝は知れり。卓れたる羅馬人等に押し立てられて、かの旗章がブレンノ[一三]と戰ひ、ピルロ[一四]と戰ひ、またその他なる君主等及び市々と戰ひて如何なる事を成したりしかを。

これらの戰にトルクァト[一五]と、その頭髮のおどろおどろしきに因みて名を呼ばれたるクィンティオ[一六]と、デエチ家[一七]及びファビ家[一八]とは、わが好びてたたふる譽を得たりき。

アンニバアレ[一九]に從ひて、ポオよ、汝に源をなすアルペの岩を越えし、かの亞剌比亞人[二〇]等の誇を打ち挫きたりしもかの旗章なり。

かの旗章の下に、スシピオネ[二一]とポムペオ[二二]とは年若うして凱旋しき。また汝の鄕土の上なる山[二三]に、こは酷く見えたりし物なり。

質をばその身に引受け斯くて人性を賦與せられし者として受くべき罰をその身に受けたり。

九、「刑を受けし者」――基督の神性。〔實に、基督の中なる人性は罰すべきも神性は決して犯すべからず〕

一〇、「ひとつの正しき審判」――ティトのこと。イェルサレムを毀ちて猶太人に復讐せしを以てかく言へり（天、六の註四七參照）。

一一、「『神の至善』」――プラトオの「ティメウス」二九に曰く「神は善なりき。此く善にして如何なるものに對しても憎惡を起すことなし」と。

一二、「直接に滴りいづるもの」――直接神に造られしもの、卽ち、天使又は人の靈魂也。

一三、「新しき物」――第一原因たる神に對して第二原因を指せり。「新しき」と言へるは變化するがため也。

一四、「これらの總ての物」――不死、自由、及び神に似たること。

一五、「種子」――祖先、卽ち始祖アダモ也。

一六、「淺瀨」――罪を脫し神恩に復歸するの道。

一七、「叛逆して上らむと企てたりしほど」――人間が神の如くならむとて神命に背きし程に（創世記、三の五）。〔かく神命に背きしは無限の僭越なり、無限の僭越はたゞ無限の謙遜に

後、天上の擧りて世をそれ自らの如くのどけくあらしめむことを思ひし時に近く、羅馬の意志によりてチェザレはかの旗章を取りき。

さてヴァロよりレエノにかけて、かの旗章の何をなしたりしかを、イサアラもエエラもセンナも見き。ロオダノに流れ落つる總ての谷々も見き。

ラゼンナを出で、ルビコネを跳び越えし後、かの旗章のなしし事は、言葉も筆も伴ひがたきほどに神速を極めたり。

そは西班牙のかたへ其軍勢を回はせ、次ぎにドゥラッツォのかたへ向はせ、またファルサアリアを擊ちて、暑さニイロにも痛みを覺えしめき。

そが出で立ちたりし處なるアンタンドロとシモエンタと、またかのエットレの臥したる處を再び見、さて奮進みてトレムメオに禍しき。

そこよりジュウバの上に閃き落ち、やがて又汝等の西に鳴りてかしこにボムペオの喇叭を聞きぬ。

かの旗章が次ぎにそれを持ちし者によりて爲ししことの故に、ブルウト及びカッシオは地獄にありて號泣せり。またそはモオデネとペルウジアとをして嘆かしめき。

かの旗章の故に哀しきクレオパトラは今尙ほ泣きたり。その前より逃げて彼女は、蛇によりて俄なる黑き死を遂げしなり。

かの旗手と共にかの旗章は遠く紅海の邊までも走りゆき、かの旗手と共に、ジァアノの神殿のとささるほどに世界を泰らかにしき。

依りてのみ贖はる、然るに人間は有限にして而も不完全なれば如何なる方法を以てするも到底自らその罪を贖ふに由なし」

一八、「そのいづれもをもて」――慈悲（善）と正義（眞理）とこそはそのいづれも也。詩篇二五の一〇に曰く、「エホバのもろもろの道はそのけいやくと證詞とをまもるものには仁慈なり眞理なり」

一九、「諸の聖なる光の輝きと動きと」――星辰の輝きと動きとは、それ自體不滅の物質より創られたる諸元素及びそれ等の適當なる結合よりして各々の動物及び植物の靈魂をば引き出すなり。

二〇、「至上の慈愛は中介なく」云々――神は人間の靈魂をば直接に創り給ふ也。

二一、「第一の父母ともに造られし」――アダモとエヴの生れしは直接なる神の創造に依りて也（而して以上の所說の如く神より直接に生れ出づるものは不滅也との原理よりしてやがて贖罪の大業完成すべき最終審判の時至れば、肉體が魂と再び結合してその本來の尊嚴を回復すべきことは容易に推論し得べしとなり）

されどわが話柄なるこの旗章が、その下なる人の世の全土に亙りて、さきに爲したりし事も、後に爲すべかりし事も、若しそが第三のチェエザレの手の中にあるところを、明らかなる目と清らかなる感情とによりて見られなば、ささやかに且つ朧げに見ゆるにいたるべし。

そは我をはげます『生ける正義』は、それ自らの忍怒に報ゆるの譽を、今いへるチェエザレの手の中なる、かの旗章にゆるし與へたればなり。

今ここに汝は我が二重の言葉遣ひを異しとせよかし。即ち此後かの旗章はティトと共に、古の罪の『復讐』に『復讐』をなさむ爲め駈けつけき。

またロンゴバルディの齒が聖教會を嚙みしとき、かの旗章の下にかちいくさしつつ、カルロマアニヨは聖教會を救ひき。

今汝は、わがさきに難めし如き人々と、あらゆる汝等の禍の源なる彼等の罪過とを審くことを得む。

かれは黃なる百合を公の旗章に逆はしめ、これは公の旗章を私して一黨派のものとなす。いづれの罪かまされるやを知りがたし。

ギベルリンをして行はしめよ、他なる旗章の下に彼等の術を行はしめよ。そはこの旗章と正義とを分つものは、つひにこれに從ふことを得ざればなり。

またこの新しきカルロをして彼のグェルヒと共にそれを打ち倒さしめざれ。むしろ彼をして、彼よりも高き獅子よりその生皮を剝ぎたるその爪を恐れしめよ。

第八歌

（第三天（金星天）。戀に慾えし者。カルロ・マルテロ。人間性情不一のこと。）

一、「その危きが中にありしうち」――異教時代のこと、即ちその迷信によりて永遠の刑罰に陷るの惧れありし頃。

二、「チプリイニア」――戀の女神ゼエネレ。チプロ島に生れし故に此の名あり。

三、「第三の外擺圓」――「外擺圓」とは他の圓周上に中心を有する小圓也。プトレメウスは諸遊星の外觀上の運動を測らむがため、各遊星は地球をめぐる諸天の大圓周上にて擺圓をなして運行すとの假定を立てたり。――此處に「第三の」と言へるは月より數へて第三の即ち金星天のそれを指せる也。

四、「ディオネ」――オケアヌスとテエティスとの娘にしてゼエネレ女神の母なり。次の「クウピド」はゼエネレの子にして戀の神なり。

五、「ディドネ」――地、五の註一三參照。――ゼエネレは女王ディドネの胸にエエネアに對する戀情を燃え立たせむがため、先づクウピドをば女王の子アスカアニオの姿に變へて彼女に抱かしめたりといふ（「エエネアの歌」一の六五七以下。

六、「時に後より、時に前より」――或は宵の明

子等が其父の罪ゆゑに泣きしことこれまでにも屢々あり。彼をして、彼の百合の爲め神々の紋章を改めたまふべしと信ぜしめざれ。
譽とよき名との從ひ來らむことの爲め動きたる、諸の善き靈をもてこの小さき星は飾られたり。
しかして諸の願望の斯く逸れてかなたに上れば、眞實なる愛の光は弱まりてのぼりゆかざるを得ず。
さあれ、我等の報酬と功績との量をひとしうするは我等の悅びなり。我等はいづれの優りて多きをも少きをも見ざればなり。
『生くる正義』はこれによりて我等の衷なる感情をうるはしうするが故に、そはいかなる不正にも逸れゆくことを得ず。
さまざまなる人間の聲はめでたき旋律を成す。かくの如く我等の世にありても、さまざまなる座席はこれらの天輪の間にめでたき和聲をととなふ。
また此眞珠の內にロメオの光はかがやけり。彼の美しく偉なる業を報はれざりしかど、彼を陷れしプロヴェンツァ人等は笑ふことを得ざりき。
げにも、他人の善き行を己自らの禍となすところの者は、邪なる道をゆくものなるかな。
ライモンド・ベルリンギェエリには四人の女ありて、いづれも皆王妃となりき。しかも、賤しき者にして巡禮者なるロメオこそ、彼の爲めにこの事をなししなれ。

星として、或は曉の明星として。
七、「見ゆる風」――電光なり（煉、二一の註一二參照）。
八、「セラフィイム」――天、四の註四參照。――「輪舞をすてて」とはエムピレオの天にてセラフィイムと共に輪をなしてめぐれる諸靈が今やダンテに現はれんとて降り來れるなり。
九、「其一」――カルロ・マルテルロ。――ナポリ王カルロ二世の長子。多分一二七一年に生れ一二九〇年匈牙利の王位に卽き、一二九一年に皇帝ロドルフォ一世（煉、七の註一三參照）の娘クレメンツァと婚す。一二九五年死。彼は一二九四年の初め暫くフィレンツェに滯在せしがその時ダンテとも相識りしなるべく、またギルランニによればフィレンツェ人の非常なる尊崇を受け且つ彼も亦フィレンツェ人を大いに愛したりきといふ。
一〇、「天上の君達」――天使等の組分けられたる九つの合唱團の中「天上の君達」（此の名は「以弗所書」一の二一、「哥羅西書」一の一六等より採られし也）は第三階級に在り（天、二八の註二五參照）。ダンテは天使の合唱團をば諸天を動かす力卽ち諸の靈智（天、二の註一四參照）と同一なりと見做せり。故に第三天たる金星天を司れるは「天使の君達」なり。天使の合唱團（階級）全體につきては天、四九七頁一六行以下參照。――「圓環を一にし」云々と言へる意味は、空間上の圓環を共にし、時間上の廻轉を共にし、見神の渴望を共にしつゝの意なり。
二、「汝等睿智をもて第三の天を動かす者よ」――金星天を司れる天使。――こは「饗宴篇」第一カンツォオネの第一句にして、ダンテは此處にては「寶座」の天使合唱團をば金星天に在りとせり（天、二八の註二五參照）。
三、「更に久しかりしならば」云々――思ふに次の事實を指せるなるべし、卽ち、一三〇九年にカルロ二世の死するやカルロ・マルテルロが繼承すべかりしナポリ王國が、彼の息子のカルロ・ロベルトを排斥してその兄弟なるロベルトの手中にをさめられしため、彼に依り數多の災禍此の國に起りし也（三九三頁一〇―一七行參照）。
三、「左の岸」――プロヴァンス。ロオダノ（ロオヌ）河の東方なる伯爵領。――ソルガ（ソルグ）河はアヴィニョンの近くにてロオヌ河に合す。〔プロヴァンスはカルロ一世の時ナポリ王國の所領となりしを以てカルロ二世の死後には當然我が（カルロ・マルテルロ）が手中に歸すべかりしとなり。煉、二〇の註二一、天、六の註五四參照〕

しかるに其後、讒言に動かされて彼は、十にて七と五とをえさせたりし此直き人に淸算することをもとめき。
乃ち、彼は貧しく且つ老いたる身をもて去りゆきぬ。世にして若し、一片づつその食を乞ひ求めつつも、彼のいかなる心を抱きたりしかをだに知りなば、いま讃めたるにもまさりて、彼を讃めたることとなるべし。」

第七歌

「オザンナ、萬軍の聖なる神、おのが光をもてこれらの國の惠まれたる火を上より照らしたまふ者。」
二重の光に纏はれたるかの靈が、それ自らの旋律に合せてめぐりつつ斯く歌へるを我は見き。
しかしてこれと他の諸の光と共に舞ひ出で、いと速き火花の如く、忽ち距りて我が目にかくれぬ。
我は疑に囚はれて、心の中に言へりき、「彼女に言へ、彼女に言へ。その甘き雫をもて我が渴きをとどむる我が淑女に言へ。」
されど單だ『ベ』と『イイチェ』とのみにても悉く我が主となるところのかの畏敬は、再び我をして睡氣ざしたる人のごとく頭を垂れしめぬ。

ベアトゥリイチェは少時我を斯くあらしめし後、人をして火の中にさへ福ならしむるごとき微笑をもて我を照らしつつ言ふ。

「わが誤ることのなき推測によれば、正しき復讐の如何にして正しく復讐されうるやを汝は思へり。

さあれ、我は速かに汝の心を繹き放たむ。乃ち汝聽け。そはわが言葉は大なる教の賜物をなんぢにあたふべければなり。

人より生れしにあらぬかの人は、彼自らの利益のためにとて、その意志力の上に置かれたる衡に堪へかねて、彼自らを罪に墮し、彼の子孫悉くをも罪に墮せり。

ここに於てか人類は、大なる誤を病みて、幾世紀の間をかしこに臥したりしかば、『神の言葉』はつひに自らすすみて世に降りたまひ、『彼』の永遠なる愛の作用のみによりてかしこに『彼』は、その造主よりはなれたりし性を、『彼』自らの中に結び合せたまへり。

さて、今我が言ふところの事に汝の目をむけよ。斯く其造主と結び合はされたる此性は、そが造られし時のままに純善なりき。されど、眞實の道より、またそれ自らの生命より離れ去りたれば、われからとかの樂園を逐はれたりき。

乃ち、基督のとりたまへる性より量り見れば、十字架の與へたる刑罰ほどに正しく行はれたるものかつてなし。

しかも尙ほ、かかる人間の性と結び合はされて、かの刑を受けし者の事を思はば、これほどにも正しからざるもの曾つてなし。

一四、「アウソニアの角」――ナポリ王國を指せり「アウソニア」はウリッセの子アウソネに因みて（但し、一說には由來不明）詩人等の呼び用ゐし伊太利の古名。――その「外圍」となれる「バアリ」はアドリア海邊の町、「ガエタ」はチルレエノ海邊の町（地、二六の註二四參照）、「カアトナ」はカラブリア州南端の小村にして、「トゥロント」は中央伊太利を東に流れてアドリア海に入る河の名、「ゼルデ」につきては煉、三の註一八參照。

一五、「かの國」――匈牙利（註九參照）。

一六、「エウロよりいと大なる煩ひをうくる灣」――カタアニア灣。此の地東風（エウロ）を受くること最も多く、ためにエトナの煙にくもらさるること屢〻なりと。

一七、「パキイノとペロロと」――前者はシチイリア島東南端の岬（現今のカアポ・パッザアロ）、後者は同東北端の岬（現今のカアポ、ンファアロ）也。

一八、「ティフェオ」――地、三一の註三一參照。――ジョオゼ神のため電光にて擊殺せられし後シチイリアに葬らる。その頭エトゥナ山底にありてその口より焰を吐けりといふ。

一九、「トゥリナクリア」――Trinacria（希臘語にて三角の義）シチイリア島に對するギルジリ

されば同一の行より異れる事は出で來ぬ。一の死は神によろこばるると共に猶太人にもよろこばれたればなり。この死の爲めに、地は震ひ天は開けぬ。

今や汝もはやさとりがたしと思はざるべし。一の正しき復讐の、その後ひとつの正しき審判によりて復讐されきと言はるるを。

さあれ、今我は汝の心が、思ひより思ひに絡みゆきて一の結ぼれをなし、それより繹き放たれむことを切に待ち願へるを見るなり。

汝は謂ふ、『我はわが聞くところのものを明らかにせり。されど、いかなれば神が我等を贖はむため、この方法をのみ選みたまひしやは我に知られず』と。

兄弟よ、何人の理智も愛の焰の中に圓熟せざれば、この定は彼の目に蔽はれたるべし。

さあれ、この標徵は見らるること多く、さとらるること少きものなれば、何故に斯かる手段のいとふさはしかりしやを我は告ぐべし。

己目らより總ての憎みを逐ひ斥くる『神の至善』は、己目らの中に燃えかがやきて、永久なる美を顯はし示す。

これより直接に滴りいづるものは、その後つくることなし。そがその印を捺すとき、捺されたる迹はつひに消さるることを得ざればなり。

これより直接に雨りくだるものは全く自由なり。そは新しき物の力に屬き從ふことなければなり。

オその他羅甸詩人の呼び方。その所以は島の形三角なればなり。三角の中二つは前註一七の兩岬、第三のものは西方なる現今のカアポ・マルサアラなり。

二〇、「カルロとロドルフォの裔の」云々――祖父カルロ・ダンジオ、父カルロ第二世、妻の父皇帝ロドルフォの子孫等我より生れての意（註九參照）。

二一、「惡政」――アンジュウ家の。

二二、「パレルモを動かして」――一二八二年三月三十日晩鐘（地、三四の註一六參照）を合圖に一齊に行はれしシチイリア島に於ける佛人大虐殺のこと。――これによりて同島はアンジュウ家より離れてアラアゴナ家に屬するに至れり。――「死ね、死ね」とは、群衆の佛人に對する叫喚なりき。

二三、「我が兄弟」――カルロ・マルテルロの弟ロベルト也（一三〇九年ナポリ國王となる）。一二八八―九五年の間その父釋放のための人質として兄弟ルドヰイゴ及びジョヴンニと共にアラアゴナ方に幽囚の身たりき（煉、二〇の註三一參照）。後に歸國して王位に卽くに及びその幽囚中に親しくせしカタロオニア人を多數重用せしが、その虐政のため民心アンジュウ家を離るゝに至りき。

かかるものは、『至善』にふさはしきことといと多く、この故に『至善』によろこばるることもいと多し。萬の物を照らす聖なる光熟は、それ自らに似ることのいと多き物の中にありて、いとかがやかに燃えさかればなり。

これらの總ての物[一四]は人皆の享くる特權にして、その一にても缺げたる者は、その尊さを失はざるを得ず。

ただ罪のみ、人間の特權を剝ぎ、彼をして至上の善に似ざらしめ、從つてその光に浴すること少からしむ。

しかして不善の悅びに逆へる正しき刑をもて、罪過の空しうせる處を補ひ充たすにあらずば、人つひに其尊嚴に歸ることなし。

汝等の忤は、その種子に於て全く罪あるものになりたれば、樂園より遠ざけらるると共に、これらの尊嚴よりも遠ざけられき。

又、汝もし精に思ひめぐらさば覺るべし、淺瀨[一六]の一をわたらずしては、いかなる道によりてもそが、それらの物を取りかへし得ざりしことを。

淺瀨とは、神が一に彼の慈愛によりて赦したまふか、人自ら彼の愚かさに贖ひをなすか、卽ちこれなり。

いま汝力の限り、我が言葉に近く寄せつつ、なんぢの目を永久なる聖旨の奧底へとめよかし。

人は彼自らの限られたるによりて、つひに贖ひをなし得ざりき。それは後日の服從謙虛に於て下らむとするも、さきに叛逆して上らむと企てたりしほどの高さに及ぶべくもなければなり。[一七]

これ、人が自ら贖をなすことの力をもたざりし所以なり。この故に、神は彼自らの道をもて、精しくはその一をもて、またはそのいづれもをもて、人をその完き生命に復したまふのほかなかりき。[一八]

されど行ふ者の行は、その源なる心情の善きをあらはすにつれて、いよいよ貴く思はるるものなれば、宇宙にその印を捺す神の至善は、汝等をふたたび引き上ぐるにその總ての道を盡すことを好びたまへり。

又、最終の夜と最初の晝との間に、このいづれの道によりても、かく高く、かく偉なる業の曾つてなされたることもなく、この後なさるることもなかるべし。

そは、神は人をして自らを引き上ぐるに足らはしめむ爲め、『彼』自らを與へたまひ、單だ『彼』自らの免すことにまされる、ふかき慈みを示したまひたればなり。

神の子の若し、自らを卑うして肉體をとりたまはざりしならば、ほかのあらゆる方法も正義の贖ひにつきて事足らざりしなるべし。

今、あらゆる顧望を汝が充たすを得むことの爲め、一の箇處に引き返して我は說き明し、汝をしてわが見るごとく見るを得しめむ。

汝は謂ふ、『我は水を見る。我は火と、空氣と土とを見る。しかしてそれらの混り合へる物は悉く朽ちゆき、久しく保つことなし。しかしかも尙ほ此等の物は造られたる物なり。

二四、「既に荷の重きその船に」云々――既に惡政に惱めるその國家が更に重稅によりて苦しめられざるやうに。

二五、以下一二行、――神は星辰に依りて自然及び其生成發展に作用を及ぼす。發生々起する所の一切の事物は神によりて豫知せられ且つ意欲せられたる也。實に、世界秩序は精密なる熟考の後定められたる也。

二六、以下次頁八行迄、――神の攝理が人間の幸福と一致するといふこと、卽ち、人間はすべて社會の一員なるを以て各自がその性向及び才分を異にし從つて各々職務を異にすることを論じたり。〔此處の論議の根柢には、アリストテレエスの、次の三つの重要なる說が横はれり――一、自然の作り成すところには過不及なし。二、人間は社會的存在なり。三、一の共同團體は同等の地位に在る者よりは成立せず。〕

二七、以下二節の意味、――この故に或る者はソロネ（希臘七賢人の一人にして、雅典の立法家として名高し。前七世紀の人）として生れ、他の者はセルゼ（戰士たる波斯のクセルクセス大王。煉、二八の註一五參照）として生れ、また一人はメルキゼデク（舊約時代に於ける祭司の典型と呼ばるゝ者。創世記一四の一八及び希伯來書七の一以下參照）として生れ、更に他の一人はデエダロ（工匠の典型。地、一七の註二四參照）として生れ、かくて人界には樣々の性向を生ずれども種族家系等の區別を立てざるを以て父子と雖も性情同一ならざることあり、之悉く神の攝理に基けるがため也。

二八、「エサウはジャコッペと」――共にイサクの子にして双生兒なりしがその生來の性質（種）は同じからず、「玆に童子人となりしがエサウは巧みなる獵人にして野の人となりヤコブ（ジャコッペ）は質朴なる人にして天幕に居るものとなれり」と（創世記二五の二一以下參照）。

二九、「クィリイノ」――傳說上の羅馬市の建設者ロモオロが神に祭られし後の別名（槍を携ふる者或は勇士の義也）。その母は暴行を受けて孕み、その父は身分賤しかりしため、後の人人彼を重んじて軍神マルテの子なりと稱するに至れりと。

三〇、以下終りまで――此處にマルテルロは前節の例證として己が家族内の實例を述べたるものゝ如し。卽ち、劍を帶ぶべき生れなるに强ひて僧門に入れられし者は彼の兄弟ルドギイゴ（註二三參照）にして、彼はアラアゴナよりの釋放後トロサの僧正とせられしなり。また、

すなはち、我が言へることの眞實ならば、それらの物に朽つることの患あるべからずとなり。』

兄弟よ、天使等と汝が在る處の純なる國とは、あだかも在るがごとく、その完き情態にて造られたりといふを得む。

されど、汝の擧げたる諸の元素及び、それより成れるそれらの物は、造られし能の形成するところなり。

造られしはかれらの資料をなせる物質なり。造られしは、かれらをめぐれる此等の星の形成力なり。

諸の聖なる光の輝きと動きとは、あらゆる禽獸草木の魂を、それになり得べき諸元素よりひき出すなれど、至上の慈愛は中介なく汝等の命を吹き入れ、且つ『それ』己自らを愛でしむるによりて、汝等の命はその後つねに『それ』を慕ひもとむるなり。

又この理より推し及ぼして、汝は更に汝等の更生を知ることを得む。若し、第一の父母ともに造られしとき、人の肉體のいかに造られしやをかへりみなば。」

第八歌

この世はその危きが中にありしうちは、美しきチブリイニアが第三の外擺圓をめぐりつつ、戀情の光を發つと信ずる慣ひなりき。

教を說くべきに王となりたる者はその兄弟ロベルト（註一三參照）なり。ギルラニの傳ふるところに依れば彼は大いなる神學者にして且つ傑れたる哲學者なりきといふ。

されば、古の人はその古の迷より、犧牲を供へ誓をささげて、單だに彼女をあがめしのみならず、ディオネとクウピドをもあがめて、一人を彼女の母、今ひとりを彼女の子となし、また、この子がディドネの膝に抱かれたりしことを言へり。

彼等は又、時に後より、時に前より太陽に言ひ寄る星の名を、我がこの章のはじめに歌へるかの女に取れり。

かの星に登れることを我は心附かざりき。されど愈々美しくなれる我が淑女を見て、我はその中にあることを確く信じたり。

しかして、火花が焰の内に見らるる如く、一の聲の搖がず、今ひとつの聲の往きつもどりつするとき、一のうちに今ひとつの聞き分けらるる如く、我はかの光の内に、一の輪をなしてめぐれる他の多くの光を見き。その速さの優れると劣れるとは、彼等の不朽なる正覺の度合によるものなるべし。

見ゆる風と見えざる風とを問はず、その冷き雲より降り來ることのいと速きも、これらの聖なる光が尊きセラフィイムに先づ始まれりし輪舞をすてて、我等に來るを見たらむ人には、なかなか暇どりて遲しと思はるるなるべし。

さて最先に現れたる者等の内に聞えしオザンナは、その後わが再び聞かむとの願ひを、つひに忘れ得ざるほどのものなりき。

かくて其一は我等に近づき、ただひとりにしていふ、「我等は皆、汝が我等によりて悅樂せむことの爲め、汝の意のままをなさむとす。

第九歌

（第三天（一星天）で戀に燃えし者、その二。クニッツア。フォルコ。）

一、「クレメンツァ」――カルロ・マルテルロの妻クレメンツァなりといふ。一二九五年には既に死せりき。かく、神曲示現の年には最早生者にあらざるの故を以て多くの註釋者等は、彼女をば、一二九〇年の頃生れて一三一五年佛王ルイ十世の後妻となりし同名のかの娘なりとなす。これは一三二八年まで存命せしといふ。（此の兩說に就き前者を採る者にノオトン、ギイゼ、カルル・アイトネル、バッセルマン等あり。就中バッセルマンは附錄に於て詳細なる論證を試みたり。後者を採る者にはケエリイ、トインビイ（「ダンテ小辭典」）、ジウセッペ・マッツィニ、ツォオツマン、カルネリイ等あり。）――「彼の子孫の遺はざるを得ざる欺罔」とはマルテルロの子カルロ・ロベルトがその叔父カラブリア公ロベルトのためにナポリ王位繼承權を簒奪せられしことを指せり（天、三九二頁一二―一四行參照）。

二、「汝等の禍」――汝等カルロ・マルテルロの子孫等のうくべき禍。右の如きカルロ・ロベルトの受くる暴虐はそのまゝその姉妹にとりても禍なればかく言ひしなり。――「正しき嘆

天上の君達[一]と圓環を一にし、廻轉を一にし、渴望を一にしつつ我等はめぐれり。なんぢ曾つて世にありてかの君達に言へりき、『汝等睿智をもて第三の天を動かす者[二]よ』と。

我等には愛の滿ちみちたれば、汝をよろこばせむ爲め少時しづまるとも、我等にめでたきものの減ることあらざるべし。

我が目のうやうやしく我が淑女に注がれ、又彼女によりて滿足と確信とを得たりし後、復びそは、かのいと多くを約したりし光に向へり。

しかして大なる愛着を言葉にこめつつ我は、「汝等の誰なるかを告げよ」といふ。

わがいへるとき、その悅ばしさに加へられたる新なる悅ばしさにより、かの光の嗚呼、如何ばかり其大きさと輝かしさとを增したりしぞ。

斯くなりてそは我にいふ、「下なる世はただ少時[三]我をとどめき。我がとどまることの更に久しかりしならば、來るべき多くの禍は防がれたりしなるべし。

我がまはりに輝ける我が悅びは、我を汝に見えざらしめ、己自らの絹に包まれたる蟲の如くにも我をかくすなり。

多く汝は我を愛しき。しかもそはゆゑあることなり。我もし下界にとどまりたらば、ただに葉ばかりならぬ愛を汝に示したるべし。

ロオダノがソルガと一になりて後に洗ふ左の岸は、時到りて我がその君となることを待ちき。

バアリとガエタとカアトナとを外圍[四]になし、またトゥロント及びエルデの流れて海に入る處なるアウソオニアの角[五]も同じく待ちき。

ダニュウブがその獨逸の岸をすてて後みづそそぐかの國[六]の王冠も、はや我が額に輝きたりき。

又、エウロよりいと大なる煩ひをうくる灣[七]に近く、バキイノとペロロとの間にして、ティフェオ[八]の爲めならず、生りいづる硫黃の爲めにくもれる住きトゥリナクリア[九]は、カルロとロドルフォの裔[一〇]の我よりいでて[一一]其王となるを今も尙ほ待ちたるべし。つねに民の心を荒ましむる惡政にして若し、バレルモを動かして[一二]『死ね、死ね』と呼ばはらしむるにあらざりしならば。

又、我が兄弟[一三]にして豫めこの事を見たりしならば、カタロオニアの貪慾なる貧しさより屎くも遠ざかりて、その禍を被るにいたらざりしなるべし。

そはげに、彼にてもあれ他の者にてもあれ、既[一四]に荷の重きその船に、更に荷の積まるることなからむ爲め、備へを爲さざるを得ざればなり。

物惜みせぬ性より吝に生れいでたる彼自らの性は、財を蓄ふるに專心せざるごとき部下を要したるべし。

「わが主よ、汝の言葉の我にそそぎ入るる深き悅が、あらゆる善きものに終りをも始めをもなすところにて、あだかも我の見るごとく汝に見らるるを我は信ずる故、愈々我によろこばし。我はまた、神を見守りて汝がこれを覺るをも愛でたき事に思ひなすなり。

の」云々とは、やがて正しき罰（アンジュウ家の衰運）を受くべしとの意。

三、「かの聖なる光の命」――カルロ・マルテルロの靈。

四、「汝に映りて見ゆる」――神の御心に眺め入りて其處に反射されたる我が思ひを見よ。すなはち、我が質問を待たずして答へ給へとの意。

五、以下五行の大意、――マルカ・トリギジアアナに生れて我（クニッツァ）は多情なりきとなり。――「邪なる伊太利の一部」とは右のマルカ・トリギジアアナ。「リアルト」は元ゼネエチア市の一部をなせし島の名にして此處にては同市全體を代表せり。「ブレンタ」は河名、地、一五の註三參照。「ピアアヱ」同じく北部伊太利の河の名。ゼネエチアの東北凡そ二〇哩の處にて海に注ぐ。――マルカ・トリギジアアナは南ゼネエチアと北アルプス連峯との間に在る也。――「一の山」とはロオマアノ山にして、その上にエッツェリイニ家の城砦ありき。「一の炬火」とはエッツェリイノ（又はアッツオリイノ）ダ・ロオマアノ三世（地一二の註一九參照）のことにして、傳說によればその母夢にマルカ・トリギジアアナの全部を燒拂ひし一大炬火を生むと見て彼を生みしも也といへればなり。――「クニッツァ」は彼の妹にして、その多情によりて、然し乍ら又その慈善行爲によりて當代に著名なりき。

六、「珠」――マルセイユ出身の戀愛詩人のフォルコ。

七、「第百年は」云々――定數を以て不定數に代へ、多年の意なりとの說一般に行はる。――但し、バッセルマンは此處にても異說を立て、之を定數五百年となせり。そはダンテの考へにては第一の世界はその創造の日より七〇〇〇年を以て終りを告ぐとなされたるに、神曲示現の時は計算の結果アダモの生れしより六五〇〇年目にあたれり。故に、此處の五〇〇年は世界最終の日までの時間なりと。

八、「タアリアメントとアディイゼ」――共に河の名。前者はマルカ・トリギジアアナの東境に、後者はその西境にあり。

九、以下一二行、――クニッツァの自己の鄕里に對する豫言。

一〇、「バアドヴ」――ダンテが之等の詩作に從事せし當時（一三一四年頃）、バアドヴのグェルフ黨が彼等の義務を負ふべかりし皇帝に反抗して皇帝の代理人たるカン・グランデのために、ギチェンツァ附近にて一再ならず擊破せられ、彼等の血を以てバッキリオ オネ河がゼロナの

汝は我を悅ばしめぬ。されば今汝は我に明らかならしめよ。汝は語りて我に疑を起さしめたればなり。そもそも、甘き種より如何にして苦き物は出で來るや。」

斯く我が彼に問へば、彼は我にいふ、「われ若し、一の眞實を汝にあかすを得ば、汝は汝の問ふところの物に面をむくること、今背をむくるが如くなるべし。

なんぢの登りゆける國をあまねく廻り動かせ滿ち足らはすところの至善は、其攝理をこれらの大なる物體の中に力となりて働かしむ。

それ自ら完全なる御心の中に豫定せらるるは、ただに諸の自然のみならず。かれらと共にかれらの安泰なるべきことも亦豫定せらる。

されば、苟くも此弓もて射發たるほどのものは、悉く皆その豫めの定められたる處に向ひて下り、あだかも狙ひをあやまたずして飛びゆく物のごとし。

もし此事なかりせば、汝のめぐりゆける天は、その影響の果を工作に結ぶよりも寧ろ破壞にむすびたるべし。

しかも、これらの星を動かす諸の睿智の缺げたるにあらずば、また第一の睿智に缺げたるところありて、それらのものを完く作り成さざりしにあらずば、右の如き事はあり得べきにあらず。

汝は此眞實の尙ほも汝に明らかになされむことをねがふや。」我はいふ、「否、しからず。我は『自然』が必要の事にあたりて疲るることの、つひにあり得べからざるを知ればなり。」

近くにてつくる沼の水をば紅に染めしことあるを指せり。

二、「シイレとカニアアノの落ち合へる處」――トレギイゾ也（カニアアノ河は今はボッテニガと呼ばる）。――「これを治むる者」とはリッカルド・ダ・カアミノ。彼は善きゲラルド（煉、一六の註二八參照）の子にしてニイノ・ギスコンテの娘ジョヴンナ（煉、八の註一四參照）の夫なり、一三一二年不意に暗殺せられしといふ。

三、「其不信心なる牧者」――フェルトゥロの僧正アレッサンドロ・ノヱルロを指せり。彼は一三一四年にフェルラアラの代官ビイノ・デルラ・トオザの請に應じて、フェルラアラより逃れて彼の許に身を寄せたりし三十人のギベリン黨員をば彼に引渡せしため、遂ひに悉く首を刎ねられたり。――次の「マルタ」は僧侶を罰するために設けられしボルセエナ湖畔の一牢獄也。

一三、「鏡」――九つの合唱團に分れて神の本體をば種々樣々に反映せる諸天使のこと也。之等の合唱團の一つは「寶座」と呼ばる（天、八の註一一、同、二八の及註一八並その別言參照）。聖グレゴリオは正義に關する神の直觀は寶座の司るところとなせり。――かく、神の審判はすべて此の寶座を通じて我等に啓示せらるる

ここに於てか彼は復びいふ、「今、言へ、地上の人にして市民たらざるは、彼にとりて惡しき事ならむか。」

我は答へていふ、「然り。しかして我はここに其理由を問はじ。」

「偖てかの下界にありて彼は、さまざまに生き、さまざまの務めをなすにあらずして、よく市民たることを得べきか。汝等の師のこれに就きて記すところ正しくば然らず。」

斯く彼は論ひ來りて、さて言をむすびていふ、「されば汝等の業の根もさまざまならざるを得ず。

この故に一人はソロネに生れ、いま一人はセルゼに生れ、いま一人はメルキゼデクに生れ、いま一人は空を翔びつつ其子を失ひし者に生るるなり。

蠟に押すごとく人に印を押すなる天體は、善くその術を行へども、家と家とに差別を立つることなし。

乃ち、エサウはジァコッペと種を異にし、またクィリイノはつひにマルテの子と言はるるほどに、いと賤しき父より出で來る所以なり。

若し、神の攝理にして勝らずば、生まれたる性は生みたる性とつねに其軌を一にするならむ。

汝の後にありしもの今汝の前にあり。されど我が汝をよろこべることを汝に知らせむ爲め、我は更に一の事を言ひ添へて汝の外衣となさしめむ。

一の性は、命運のこれにふさはしきものならば、あだかもその土にるが故に我が（クニッツァの）此の豫言も亦眞實なりとの意なり。

一四、「他なる歡喜」――フォルコの靈（ダンテが三九七頁一六行以下クニッツァの言にて知る）。

一五、「火」――セラフィイム（天、三九一頁一四行以下參照）。火といへるはその光り輝くがためなり。六つの翼を有せりといふこと「以賽亞書」六の二に見ゆ。

一六、「地をとりまけるかの海」――地中海。

一七、「地平の涯」云々――西端がアデより見て地平の涯となれる天圈は東端ゼルサレムメより見れば天心なり、卽ち此の兩地の距離九〇度をなせりとの當時の謬見也。實際は凡そ四一度也。

一八、「マアグラとエブロ」――伊太利ルウニジアアナ州なるマアグラ河と西班牙のエブロ河。――フルコ鄕里マルセイユは此中間に在り。

一九、「我が故鄕の市」――右のマルセイユ。――「己が血をもて」云々と言へるけ、ブルウト（ブルウトゥス）がチェエザレの命によりて此の港にポムペオの軍を擊破し大いに殺戮を行ひし時（前四九年）のことを指せる也。

二〇、「ブジイア」――亞弗利加の北岸にありて中世に於ける重要なる商港なりき。――マルセイユと略〻その經度を同じくせり。

合はざるすべての種のごとく、その終りをよくすること斷えてなし。
しかして、かの下界にして若し、『自然』の置くなる礎に心をとめ、これに從ひゆかむには、その民をよきものとなすなるべし。
然るに汝等は、劍を帶びむため生れたるべき者を強ひて僧門に入れ、教を說くべき者を王となす。かくて汝等の道は行くべき道の外に出づるなり。」

第九歌

嗚呼うるはしきクレメンツァよ、汝のカルロは我が疑の雲を拂ひし後、彼の子孫の遭はざるを得ざる欺罔の事を我に告げき。
されど彼の「口をつぐみて年月の移るにまかせよ」と言ひしかば、我は汝等の禍のあとに正しき嘆きの到らむといふことのほか、何とも言ふを得ざるなり。
さて今、かの聖なる光の命は、萬の物を足らはす至善の如くそれを充たす、かの太陽にふたたび向ひゐたりき。
嗚呼、惑へる魂等よ、かかる至善より汝等の胸をそむけて、空しき物に額をむくる不信心なる被造物等よ。
さて見よ、それらの光のいま一は我が方へ寄り來り、外面を明るくしつつ、我をよろこばせむとの意を表はしたり。

三、「フォルコ」――（佛蘭西名フォオクェ）十二世紀の後半に名高かかりしマルセイユの戀愛詩人、一一九五年にシトオ教團に入り一二〇五年にはトロサの僧正となれり。彼はアルビジオワ派（十二世紀乃至十四世紀に於ける南佛の一異教派にして僧侶の墮落を攻擊せり）に對して痛烈なる迫害を加へしが一二三一年に死せり。

三、「ベロの女」――ディドネ（地、五の註一三參照）。エエネアを戀するの餘りその亡夫シケオ及びエエネアの亡妻クレウサの靈を虐げき。

三、「ロドペエア」――トラアチア王シトネの娘フイリスのこと。トラアチアなるロドペ山の近くに住みしため此の異名（ロドペの女の義）あり。傳へによれば、テセオの子デモフォオンテが婚約を破棄せしものと思ひて後に縊死せしといふ。

三、「イオレ」――テッサリアなるオェカリアの王エウリトの娘。

三、「アルチイデ」――エルコレ（ヘラクレス）の異名。彼がイオレを愛せしためその妻ディアニイラの烈しき嫉妬に遭ひ圖らずもネッソの奸計に陷りて悶死せり（地、一二の註一三參照）。

三、「下界を天上界に」云々――神慮によりて地上の愛は天上の愛へと淨化せらるる也。

前のごとく、我を見守れるベアトゥリイチェの目は、いしくも我が願ひを答れたることを我に知りたしかめしめき。
我は言ふ、「福なる靈よ、願はくは速かに我が願ひをかなへさせ、また我が思ふところのよく、汝に映りて見ゆるといふことの證をわれに得させよ。」
ここに於てか尙ほ我に新なりしかの光は、前に歌ひゐたりし處なる其深みより、善き事を行ひて悅ぶ人の如く言ひつげり。
「邪なる伊太利の一部にして、リアルトとブレンタ、ピアアヱとの間なるところに、あまり高からぬ一の山ありて立てり。かつて一の炬火はここより下りて、いたくかの地方を荒らしたりき。
一の根より我とそれとは生れたり。我はクニッツァと呼ばれき。わが此處に燦爛たるはこの星の光の我に打ち克ちたればなり。
されどわが命運の起りにつきては、我は悅びて我自らをゆるし、それに惱まさるることなし。こは思ふに汝等の世俗にとりて解しがたき言葉としも見ゆるなるべし。
我等の國のこの輝ける貴き珠の、我にいと近きかの珠の大なる名聲は、今も地上に殘りたり。またそが滅び失するに先ちて此第百年は更に五度も重ならむ。人たる者自らを勝れたるものになし、第一の命のあとにいま一の命を殘すべきにあらざるや否やを思へ。
然るに、タアリアメントとアディイゼに圍まれたる現在の群衆はこの事をかへりみず。苛責せらるれども尙ほ悔ゆることなし。

七、「ラアブ」――エリコの遊女ラハブ。ヨシュアの遣はせし二人の間者を匿まひし德によりてその一家災禍を免れしといふ（約書亞記二、同六の一七、希伯來書一一の三一、雅各書二の二五參照）。

六、「陰影に尖端をなす」――中世の天文觀に從へば地球の投ずる圓錐形の陰形は金星天にまで及べる也。――その寓意は、天國の下部に位せる月、水、金の三天にありては諸靈が猶未だ世に屬せる諸種の汚點（弱行、野心、溺愛）をその生涯にとゞめたることにありと。

九、「右左の掌」――十字架に釘られし基督の聖手。

〇、「法王」――ボニファチオ八世。――彼が「聖地」（パレスティナ）をサラセン人の手中に委ねて顧みざりしことを諷したり（地、二七の註二五參照）。

一、「ジョスエがその最初の榮光を」云々――ヨシュア（ジョスエ）の最初の榮光とはすなはちエリコの攻略なり。而してそはラハブの扶助に依れり（註二七參照）。――ヨシュアは屢中世の聖書解說者等によりて救世の表象とせられ、ラハブは基督の血によりて贖はれし教會の表象、彼女が窓に結びし赤き紐は基督の血の表象とせられたりき。

されどパアドヴ[九]は、その民の頑にして爲すべきをなさざるにより、程なくかの沼のほとりにして、ギチェンツァを洗ふ水の流を變ふること あらむ。

又シイレとカニァアノの落ち合へる處[一〇]は、これを治むる者、頭を高うして行けれども、彼を捕へむ爲めの網は既に作られたり。

フェルトゥロも尚ほ其不信心なる牧者[一一]の犯せる罪をなげくべく、しかもその罪の無慚[一二]なる、かくの如きを犯してマルタに入りしものかつてなかりしほどなるべし。

この懇[一三]なる僧の己が黨派に忠なることをあらはさむとて贈るフェルラアラ人の血は、げにも大なる桶ならではこれを容るるを得ざるべく一オンチァ宛これを秤りなば、はかる者疲るべし。しかも斯かる贈物は、土地の慣ひにふさはしきものならむ。

上方[一四]に鏡ありて、汝等はそれらを寶座と呼ぶ。審判の神はそこより我等を照らしたまふなれば、これらの言葉も我等に善しと思はるるなり。」

言ひ來りて此處に彼女は默[一五]し、前のごとく輪に加はり、心をほかにむくるが如く我に見えたりき。

名高き物とはや我に知られたる他なる歡喜[一六]は、日の光のあたれる佳き紅玉のごとくわが目に見えたり。

高きにありては、喜びによりて輝きの加はるは、地上にして微笑[一七]のあるごとし。

三三、「汝の市」――フィレンツェ。――貪婪嫉妬等の惡德の充ちし處（地、二九頁二―三行、同一五の註一四參照）なれば惡魔（「あれほどにも嘆きのたねをまきし者」―地、一五頁七―九行並註三一參照）の建てし市と言へり。――次の「咀はしき花」とは、フィレンツェの金貨（地、三〇の註二二參照）。――「羊、羔」とは老若を問はず總ての信徒等を指せり、「牧する者を狼となし」たりとは僧侶等貪婪となりたるの義なり。

三三、「教會の法規のみ」云々――僧侶等之のみを學ぶはそれによりて名譽地位及び財貨を儲け得むがためなり。そはその繁き餘白の書入れに徴して明かなりとの意。

三四、「ナッァレテ」――ナザレ。天使ガブリエエレが受胎告知のために降りし處（路加傳一の二六以下）。――此處にては「聖地」パレスティナを代表せり。

三五、「ヴァティカアノ」――羅馬の一丘にして聖ペテロ教會と法王の宮殿と此の上に在り。此處は聖ペテロを初め初代基督教徒等多數殉教の地として尊崇せられたりき。

三六、「戰士等」――殉教者等。

三七、「此のごとき汚辱より釋き放たるべし」――此の釋き放ちに就きては古來種々の說あり

されど地下にては、心の悲しきにつれて、魂の外の暗くなり來るなり。

我は言へりき、「福なる靈[一]よ、神は萬の物を見たまひ、汝の視力は彼のうちにあるなれば、いかなる願ひも汝にかくること能はず。[一五]

然らば、六の翼を自らの僧衣になせる、それらの信心ふかき火の歌と共に、とこしへに諸の天を樂ます汝の聲は、何故我が願望を滿ち足らはさざるや。

若しわが汝に入ること、汝のわれに入るごとくならば、必ずや我は汝の問ひ求むるを待たざりしなるべし。」

この時彼は口を開きていふ、「地をとりまけるかの海[二六]をほかにして、水のひろごれるいと大なる溪は、その相容れざる岸の間を日に逆らひて遠く延びゆき、さきに地平の涯[二七]となれりしところを子午線となすにいたる。

かの溪のほとりに我は、かの短き流れもてゼエノヴ人をトスカナ人より別つマアグラと、エブロとの間に住みたりき。[二八]

そのかみ己が血をもて其港をあたためし我が故鄉の市[二九]は、ブジイア[三〇]と殆んど日出日沒を同じうする處にあり。

わが名を知れる人々は我をフォルコ[三一]と呼びき。しかして此天の印[三二]を我に捺したりし如く、今我はこの天に捺したり。

そは、シケオとクレウサとのふたりを虐げしベロの女も、デモフォオンテに欺かれたるロドペエア[三三]も、またイオレをその胸に包みたりし頃

て、或は一三〇五年に於ける法王廳のアギニョン移轉なりとなし、或は法王ボニファチオ八世の死（一三〇三年）なりとなせども、思ふに神の遣はし給ふべき救濟者、神祕なる世界皇帝に依る教會の廓清に對する期待なるべし。

のアルチイデも、わが頭髪にふさはしき限りわが燃え立ちしにまさりて、燃え立ちしものにはあらざればなり。

さあれ、ここに我等は悔いずして、むしろ微笑めり。しかもそは、罪過の思ひ起されざる爲めならで、且つ定め且つ備へたまふ『力』の爲めなり。

ここに我等はかくも大なる業を飾る巧を視、また下界を天上界に向はしむる至善を辨ふ。

されど、此天球の中に生れたる汝の願望を、汝か悉く充たさるるを得むことの爲め、我は尙ほ言をつづけざるを得ず。

あだかも清らかなる水に映つる日光の如く、このわが側に閃ける此光の中に、何者のあるやを汝は知らむと願へり。

乃ち知るべし、その中にラアブの休らへることを。彼女は我等の一團に加はりて、彼女の印をこれに捺すこと比類なし。

汝等の世界の投ぐる陰影に尖端をなす處なる此天は、督脊の凱旋に加はれる他のいづれの魂よりも、彼女をさきに迎へ入れたり。

右左の掌もて獲られたる高き勝利の標徴として、彼女を天のひとつに置くは誠にふさはしき事なりき。

そは、いまや法王の殆んど念頭に置かざる『聖地』にて、彼女はジョスエがその最初の榮光をうるを扶けたればなり。

はじめて己が造主に背をむけ、又鋏によりてあれほどにも嘆きのたねをまきし者の建てたりし汝の市は、咀はしき花を作りて撒きちらし、

第十歌

一、「言語を絶したる」云々――父なる神（第一の「力」）および基督（「彼」の子）よりして聖靈（ふたりの永久に息吹くなる愛）は出でたり。

〔こは神學上重要なる論爭點にして、一〇五四年東西兩教會の分裂を起すに至りしものなり。ダンテは此處にアクィイノ等所謂正統派の說に從へるなり。――以下、三位一體に關して語られるところ多し〕

二、「心意の中をめぐり窩の中をめぐれる總ての物」――精神的並びに物質的事物の一切。

三、「運行と運行との相交るところ」――天、一の註九參照――晝夜平分とにありては、太陽は赤道と相交叉す。此のことには九天の共通なる運行は太陽の特殊なる運行と合致するなり。

四、以下二節の意味、――黃道若し赤道と一致したらば季節の區別全く無かるべく、黃道の傾斜更に大なりせば氣候の分布は今と異りたるべく、諸星常に赤道の上部のみにて運行せばそれ等の影響を多樣ならしむこと得ざるべし。

五、この三行、――太陽のことを述べたる也。

羊、羔をさまよはしめぬ。そは、牧する者を狼となしたればなり。

かの花の故に福音と大なる學匠等とは棄てられ、ただ教會の法規のみ學ばるるを、それらの法規の餘白に徵して知るべし。

かの花に法王もカルディナレも心をとめたり。彼等の思はガブリエレがその翼をひろげし處なるナツァレテに向ふことなし。

されどヴティカアノ、及び羅馬の中の選ばれたる土地にして、ピエトロに從ひし戰士等の墳墓となれるは皆、間もなく此のごとき汚辱より釋き放たるべし。」

第十歌

言語を絶したる第一の『力』は、『彼』の子を、ふたりの永久に息吹くなる愛もて打ち守りつつ、心意の中をめぐり窩の中をめぐれる總ての物を造り、覩る者『彼』を味はざるを得ざるほどの秩序をそれに與へたまへり。

讀者よ、されば汝の目をあげて、我と共に諸の天球にむかひ、運行と運行との相交るところを望み、さてかしこにかの名工の巧を樂みみることをはじめよ。彼は彼自らの衷に深くこれを愛でて、彼の目をこれより離すことなし。

諸の遊星を運べる斜なる環が、それらの遊星を呼べる世界を滿ち足

――中世の天文學に從へば、太陽は、諸々の恒星にも、その光と熱とをわかち與へしなりき。又、プトレメウスの學說は地球をめぐる太陽の運行をば螺旋狀なりとし、かくて太陽は螺旋を描きつゝ兩回歸線間を上下すとなせり。

六、「其物」――太陽天に於てダンテに現はるる哲人賢者の諸靈。

七、「天使等の『太陽』」――神。

八、此の一節、――月の周圍に月暈のあらはるる樣亦斯の如し。――「ラアトナの女」といへるにつきては煉、二〇の註四九參照。

九、「かの國より齎らすを得ざる寶玉」――その筆舌にてよく傳へ得ざること恰も國外輸出を禁ぜられたるため實物を閲覽に供する能はざる一國の國寶に於けるが如しとなり。

一〇、「ドメエニコに導かれてゆき」――我は聖ドメエニコ派の僧侶なりき。

一一、「コロオニアのアルベルト」――Albertus Magnus（大アルベルトゥス）の名を以て世に聞えたる中世最大の哲學者兼神學者の一人也。その博學のゆゑに Doctor Universalis（百學の師）と稱せられたり。一一九三年貴族の家に生れパアドヴァ及び巴里に遊學せし後一二二二年の頃ドメエニコ派教團に入り、一二六〇年レエ

らはさむとて、かしこより岐れゆくありさまを見よ。
四彼星の道にして傾きたらずば、天界に於ける多くの能はむなしかるべく、この下界なる活動も殆んど皆死ぬなるべし。
又、直線よりの其距りにして若し、これより多く或は少くば、宇宙の秩序は下にも上にも、缺ぐるところ多かるべし。
いま讀者よ、汝若し疲れざるうちに悅ばむことをねがはば、なんぢの腰掛にゐのこりて、ただ味ひ試されしばかりなる事を思ひ究めよ。
我は汝の前に置きたり。今より汝はなんぢ自ら食へ。わが欲ひ來れる題目は、我をして心遣ひのすべてをそれにささげしむればなり。
五自然のいと大なる司にして、諸天の力を世界に印象し、また己が光をもて我等の爲めに時を測る者は、わが前にいへる處と一になりて、その日增しに早く現はるるなるかの螺旋をつたひめぐりたり。
しかして我は彼と共にありき。されどその登りを知らざるは、あだかも思ひ浮べたる物にさきだちて、その思ひ浮べられたる次第を知らざる人のごとくなりき。
斯く善よりして優れる善に導き、その業の瞬く間もなきほどにはやきはベアトゥリイチェなり。
わが入れりし太陽の內にして、色によらで光によりて知らるるとは、ああ其物六自らのいかに赫々たらざるを得ざりしかな。
よし我、天賦の才と、技巧と、練熟に訴ふるとも、いかでかこれを語りて、よくこれを想見せしむることを得む。むしろ人はこれを信ぜ

ゲンスブルクの僧正に任ぜられ、一二八〇年に死せり。彼は初めてアリストテレエスの哲學と基督教とを調和せしめ且つトムマアゾ・ダクィイノに影響を與へたりき。

三、「アクィイノのトムマアゾ」――羅馬とナポリとの中間カッシイノ山の附近なるアクィイノと呼べる町の伯爵家の息。一二二五年の頃所領ロッカセッカの城に生る。初めナポリの大學に遊び、一二四三年ドメニコ派教團に入り後に前記アルベルトに師事して神學の薀奧を究め、コロオニア、巴里、ナポリ等にて其教を授けしが、一二七四年リオンの宗教會議に赴かんとする途上にて死せり（煉二〇の註二八參照）。――彼は世に Doctor Angelica（天使先生）と稱せられ、その著 Summa Theologiae（神學綱要）はダンテの神學說に最も著しき影響を與へしものにて、今にても羅馬教會の寶典たり。

三、「グラティアアノ」――伊太利なるベネディット派の修道僧（十二世紀の人なり）。名高き Decretum Gratiani（「グラティアアノの寺院法」）を編纂して、聖書、教會の法規、法王の令旨、諸教父等の拔萃文を蒐錄し、以て僧俗二法の調和を圖らむとせり。

四、「ピエエトゥロ」――ピエエトゥロ・ロムバルド。十二世紀の神學者。教法先生（Magister Sententiarum）の名を以て名高く、その著作中「教法集」四部（Sententiarum Libri IV.）は教會の寶ともいふべきものなりと。一一五九年に巴里の僧正となり、遲くも一一六四年には死したりき。

よかし。また彼をして、まのあたり見むことを願はしめよ。
又、われらの想像の斯かる高さに及びがたくとも、聊かも異むべきにはあらず。そは、太陽のかなたに目の行きしことあらざればなり。
天上なる父の第四の族はかくの如くして此處にありき。『彼』は如何に息吹き、如何に生むかを示しつつ、つねに彼等を滿ち足らはせたまふ。
さてベアトゥリイチェは口を開きていふ、「謝せよ、恩寵によりて汝を、この見ゆる太陽にまであげたまへる、かの天使等の『太陽』に感謝せよ。」
人間の情のいかにかしこまり、いかに進みて神に歸依せむとすとも、我がそれらの言葉をきける時のさまには及ばじ。我が愛の悉くは『彼』にそそがれて、爲めにベアトゥリイチェは日月の蝕するが如く忘られたりき。
この事を彼女は憤らで、その微笑める目の輝きの、一に成れりし我が心を、多くの物に分れて向はせしほどに微笑みぬ。
我は數多の生きたる、卓れたる光明の、我等を一の中心になし、彼等自らを一の環になせるを見ぬ。その聲のうるはしきは、麥の照りはゆるにもまさりたり。
八水氣の空に充ちわたりて、帶になるべき光の絲の備はれば、ラアトナの女の屢々また此の如く卷かるるを我等は見る。
我が行きて見し處なる天上の宮居には、いと貴く美しくして、かの

一五、「第五の光」――ソロモン。ダヴイデ王の子にしてイスラエルの明君として名高し（列王紀略上、一以下）。――その魂の救はれしや否や（列王紀略上一一の一以下）に就きては當時神學者等の間に種々の議論ありしを以て此處に「其滯息を飢ゑ求む」と言ひし也。

一六、「蠟燭の光」――ディオニイジ（アレオ山の裁判人デオヌシオ。使徒行傳、一七の三四）。使徒パオロの教によりて基督教徒となりし者。當時名高き「諸天使階級論」（De coelesti Hierarchia）の著者が此のディオニイジなりと考へられしため此處に「天使の性とその任とを」云々と述べし也（實際は後代の作なりしなり）。

一七、「小さき光」――パオロ・オロオシオ（四五世紀頃の西班牙の高僧）。聖アアゴスティイノ（アウグスティヌス。天、三二の註一三參照）の勸めによりて排異教徒史七卷を著述し、羅馬帝國の蒙りし災禍が基督教に因れりとの異教徒の非難を駁せり。この書は聖アウグスティヌ

國より齎らすを得ざる寶玉あまたあり。
それらの光明のうたへる歌もその一なりき。猶ありてかしこに翔び登るを得ざる者は、かなたの消息を啞者に待ちのぞめよ。
その如く歌ひつつ、それらの燃え立てる太陽は、動かざるこの極に近き星のごとく、三度われらの周圍をめぐりし後、あだかも踊りのすまぬ婦人等の、新しき節の聞かるるまで耳すましつつ、しづかにとどまるがごとく見えたりき。
かくて、それらの一の内に言ひ出づる者あるを我はきく、「眞實の愛を燃え立たすところの、又つぎに愛することによりて增し加はるところの恩寵の光は、汝の上に照り渡りて、苟くも後程ふたたび昇らざるほどの者の降ることなかるべき、かの階段を上に汝を導くなれば、人その瓶の酒をもて、汝の渴きをいやすことを拒まむとするは、水の海に降りゆかざらむとするよりも、更に心にまかせぬ事なるべし。
汝を力づけて天上にのぼらしめたる美しき淑女を、取りかこみつつも樂しげに見入れるもの、この花環の如何なる草木の花をもてあまれたるやを、汝は知らむことを願へるなり。
我はドメエニコに導かれてゆき、もし迷はずばよく肥ゆる處なる道を歩む、かの聖なる羔の群の一人なりき。
我にいと近く右側なるは我が兄弟にしてまた師たりしもの。彼はコロオニアのアルベルト、我はアクィイノのトムマアゾなりき。
斯く他の者すべてにつきても汝知らむことをねがはば、いざ、我が

スの「神の都」(De Civitate Dei) の補遺とも見做さるべし。

一八、「聖なる魂」――ボエエティオ(ボエティウス)羅馬の政治家兼哲學者。久しき間ゴオト人の王テオドリイコの寵を受けしも、後に皇帝ユスティニアヌスに内通せりとの嫌疑を受けて五二五年パヴィアに於て死刑に處せらる。その獄中にて彼は名高き「哲學慰安論」(De consolatione philosophiae) を著せり。こはダンテの最も愛讀せしものの一なり(「饗宴篇」二の一三及一六參照)。

一九、「イシドロ」――西班牙シヴィリアの僧正。六三六年死。一種の百科全書 Etymologiarum の著就中あらはる。

二〇、「ベエダ」――英國の高僧にして教會史家(六七四―七三五年)。その著作中「英國教會史」五卷最もあらはる。

二一、「リッカルド」――蘇格蘭人にして巴里の聖ヴィクトル僧院の長。十二世紀のすぐれたる一神祕主義者。一一七三年死。

二二、「シゼエリ」――シゼエリ・ディ・ブラバンテ。一二七〇年の頃には巴里大學の哲學教授にて「藁の街」(學生が椅子の代りに藁を敷しため此の名ありといふ)に講筵を開けり。彼はアヴェルロイス(地、四の註七〇、煉、二五の註一五參照)の說を代表せる有力者なりしが、その說は巴里の僧正ステファン・テムピエエルのために有罪の宣告を下されたり。彼は一二八二年ウルビノなる法王マルティノ四世の邸内にて暗殺せられき。

言葉に從ひながら、この福なる花環にそひて汝の目をめぐらしゆけよ。
かの次ぎなる焰はグラティアアノの微笑より出づ。彼は天國にて嘉せらるるほどに、僧俗の二法を扶けしなり。
彼の傍にありて我等の隊を飾れる次ぎなる焰は、かの貧しき女にならひて、彼の財を聖教會にささげしピエエトロなりき。
我等の間にいと美しきものなる第五の光は、下界のこぞりて其消息を飢ゑ求むるほどなる愛の息くところなり。
その内には、いと深き智慧を授かりたる高き心あり。かの『眞實』にして眞實ならば、かくも多くを見しものの、其後ふたたび起ちあらはれたることあらじ。
その傍にしてかの蠟燭の光を見よ。そは下界なる肉體のうちにありて、天使の性とその任とをいと奥ぶかく見し者なりき。
次ぎなる小さき光の中には、アアゴスティイノに役立ちし物を書きたる、『基督教時代の擁護者』は微笑めり。
さて、汝若し我が讃美の詞を追ひつつ、心の目を光より光につれゆかば、汝は既に第八の光に渴きてあるならむ。
その内には、己が說くところを善く聽く者に、謬れる世をあらはし示す聖なる魂は、いかなる善をも見るによりて悅び樂めり。
この魂の逐はれて出でし肉體は、下界にしてチェルダウロに臥したり。しかもそは、殉教と流竄とよりこの安息に來るなり。

かなたに、イシドロ[一九]の、ベエダ[二〇]の、また人智の及ばざるところにまで思ひ沈めりしリッカルド[二一]の熱き息の、焔となりてもゆるを見よ。

汝の目のわが方に引きかへして見るは、その聲肅の思想の中に、死の到ることを遲しと見たりし一の靈の光なり。

こは『栗の衔』にて教へつつ、嫉みをうくべき眞實を論證したるシゼエリ[二二]の不朽なる光なり。」

かくて、あだかも神の新婦が、曉の唄を新郎にうたひきかせて、その愛を獲む爲め起つ時しも、我等に呼びかくる一の時辰儀の、且つ押し且つ曳くその機構によりて、りんり、りんりと面白き音に鳴り渡り、こころざまの宜しき靈を愛もてあふれしむるが如くにも、今かの榮光の環のめぐりゆきつつ、悅びの盡きせざる處にのみよく知らるべき、調和のうちに、まためでたさの中に、その歌聲をあはせたるを我は見き。

第十一歌

嗚呼、人間の心遣ひの痴しさよ。汝をして翔びくだらしむるそれらの論理の如何に完からざるかな。

ある者は法學に、ある者は醫術に志し、ある者は僧職を追ひもとめ、ある者は暴力により又は詭辯によりて治めむとし、ある者は奪ひとら

第十一歌

（第四天（太陽天）。賢哲及び善智識、その一。トムマゾの聖フランチエスコ物語。）

一、「今しも我が」云々――天、四〇四頁一一七―一八行を見よ。――次に「また『其後ふたたび』云々」と言へるに就きては天、四〇五頁一一行を見よ。

二、「『彼』の新婦」――教會。――「彼女を娶りし者」とは基督なり。

三、「聲高に呼ばはりつつ」――十字架の上にて――馬太傳の二七の四六に曰く、「三時ごろイエス大聲にエリエリラマサバクタニと呼ばはりぬ之を譯けば吾神わが神なんぞ我を遺てたまふ乎と云へる也」又、同、五〇に曰く、「イエスまた大聲に呼ばはりて氣絶たり。」

四、「右左の導者」――一人は愛を以て導き、他の一人は智を以て導く。――次の註を見よ。

五、この一節の大意、――聖フランチェスコは愛の天使セラフィイノの愛の焰（天、九の註一五參照）を授かり、聖ドメエニコは智の天使ケルビイノの智慧を受けたり。

六、「その一人」――聖フランチェスコ。一一八二年アッシイジの富裕なる商人ピエエトロ・ベルナルドオネの息子として生る　青年の頃少時放逸の生活に身を委ねたりしも常に慈惠の

むとし、ある者は公役に就かむとし、ある者は肉の悅びにふけりて疲れ、またある者は安佚に身をゆだねたり。

この間に我は、あらゆる此等の物より釋き放たれて、ベアトゥリイチェと共に、かくもはなばなしく天上に迎へられたりき。

かの環の中なるいづれもは、その前にありし處へ引きかへしたりし後、燭臺に立ちたる螺燭のごとく靜かにとどまりぬ。

さて、さきに我に物言へりし光の、愈々明らかになりまさりつつ、微笑みて內より言ひ出づるを我は聞く。

「あだかも永遠なる光をあびて我が輝ける如く、かの光を見入りて我は、汝の思ひの出で來れる源を知る。

今しも我が、『よく肥ゆる處』と言ひ、また『其後ふたたび起ちあらはれたることあらじ』と言へるを汝は訝り、その我が言の、汝にたやすくさとらるるほどなる、飾りけなく精しき詞もて說きあかされむことを願へり。しかして、このところに良くよく辨へ知らるべき事あるなり。

あらゆる造られし物の屆かぬほどに、いと深き量らひをもて宇宙を治めたまふ『攝理』は、『彼の新婦』すなはち、聲高に呼ばはりつつ彼の禍なる血をもて彼女を娶りし者の新婦が、彼女自ら危ぶむところなく、また彼に愈々忠實にして、愛する彼の處へ行くことを得む爲め、その右左の導者[四]となるべき二人の君達を立てさだめて彼女にめぐみたまへり。

心强く、二十五歲の頃大病に罹りしを機緣に發心して宗教生活に入り、索を帶とし、徒跣にて歩み、專ら愛、淸貧、勞働の修行につとめ、遂にフランチェスコ教團を起すに至れり。一二二六年に死し、同二八年に法王グレゴリオ九世によりて聖列に加へられたり。

七、以下五行、――先づフランチェスコの生地アッシイジの地勢を述ぶ。（「トゥピイノ」――アペニン山脈より出でアッシイジの南を流れキアアシオ河と合してテエエレ（ティベル）に加はる川の名。――「禍なるウバルド」――聖ウバルド（一一六〇年死）ゲッビオの僧正。――「選ばれし丘」――彼が晩年隱遁の地に選びしもその意を果さざりしグッビオ連山中の一。其處より「下る水」とは、キアアシオ川。アッシイジの西を流れて前記トゥピイノに合す。――「高き山」――アペニンの支脈なるスバアシオ山。アッシイジは此の山の西側の山腹に在り。――「肥沃なる」と言へるは、葡萄、橄欖等の產地なればなり。（以上四〇八頁六―七行）

「ペルウジア」――アッシイジの西北凡そ十五哩の地にある町。――「ポルタ・ソレ」（太陽の門）とは、ペルウジアのアッシイジに面したる側（東）の門の名。東向きなるためアッシイジの橫はれるスバアシオ山より寒暑兩樣の風

五 その一人はまたくセラフィイノのごとき愛に燃え、一人は智慧によりて地上にケルビイノの光なりき。

我はその一人の事を語らむ。そは、彼等の業のめざすところ一なるにより、いづれの一を取りて讃むるとも、ふたりを讃むることにほかならざればなり。

六 トゥビイノと、七 羅なるウバルドに選ばれし丘より下る水との間に、ある高き山の肥沃なる斜面あり。

ペルウジアはポルタ・ソレにてかの山よりの暑さ寒さを感知り、ノチェエラとグアルトとは、かの山の背にして彼等の重き軛のゆゑに泣けるなり。

さて右の斜面にして、その嶮しさのいたく失はれたる處より、一の太陽は、その折々ガンジェより出づるがごとく世にいでたり。

されば、この處の事を口にする者、若し過はしく言はむと思はば、東邦と言ひてアアシシェエジと言ふことなかれ。これにては、言ひ得て未だ足らざればなり。

昇りて久しからざるに、かの太陽ははやくも地をして、彼の大なる德より勵ましの光をうけしむることをはじめき。

即ち、尚ほうら若きとき彼は、あだかも死のごとく、何人よりも悅びの門をひらきて迎へらるることのなき一婦人の爲めに、彼の父と爭ひをなし、かくて其靈の法廷と父との前に彼女を娶り、その後日增しに深く彼女を愛しみゆきたればなり。

を受けて「暑さ寒さを感知」るなり、――「ノチェエラとグアルト」――アッシイジの東北（スバアシオ山の背後）なる二つの小さき町。――「重き軛」とは、ペルウジアに隷屬してその壓制に苦みしこと也とも、或はスバアシオ山の東側は土地荒れて耕作不利なるを意味せりとも言はる。（以上八―一〇行）

八、「折々ガンジェより出づるがごとく」――天地創造、受胎告知等の行はれし神聖なる季節たる春分（地、一の註一一參照）にありては太陽は眞東すなはち東方より昇る、之は當時の地理學にては印度の恒河（ガンジス）によりて表はされたり。されば斯る新らしき正義の太陽の昇り出でし所は須く東邦若くば黎明の地と呼ばるべしとの意。――聖フランチェスコを「太陽」に比較することは既にその最初の傳記に見えたり。――「アアシシェエジ」（ascesi）とはアッシイジの古名にして「登る」の義なる動詞 ascendere より來れるを用ゐて洒落たる也。

九、「一婦人」――貧しさ（四〇九頁八―一〇行を見よ。）

一〇、「初めの夫」――貧しさの第一の夫は基督なりき。

一一、「アミクラアテ」――ダルマティア海邊の貧しき一漁夫にして一葉の舟と一茅屋とのみが

彼女はその初めの夫を奪はれてより千百有餘歳に亙りて、侮られまた忘れられ、彼の出づるときまでも顧みられずしてありたりき。

一二 アミクラアテと共にありし彼女が、かの全世界を恐れしめたる者の聲にさへ自若たりきといふ取沙汰も、彼女の顧みらることに役立たざりき。

又、一三 マリアは下にとどまれるに、彼女が基督と共に十字架にのぼりしほど剛く且つ毅かりしも、おなじくまた役立たざりしなり。

されど、我が言ひ廻しの餘りにも曖昧なるものになりゆかざらむことの爲め、この先き冗漫なる言の中なる戀人等の、フランチェスコと貧しさとなることを知れよかし。

ふたりの睦じさと悅ばしげなる姿とは、世の人々に愛着せられ、驚異せられ、また敬慕せられて、彼等の聖なる思の原因とはなりぬ。

かくて尊きベルナルド一四は其足を素足になし、かく大なる平和を追ひゆき、追ひゆきつつも自らの遲きを思へり。

嗚呼、未だ知られざる富、肥沃なる財よ。エジディオ一四もその足を素足になし、シルヱストロ一五も素足になりて、ともに新郎に從へり。かくも貌婦はよろこばすなり。

かくてかの父かの師は、その戀人と共に、また今卑しき索を帶にしたりしかの族と共に出で立ちぬ。

ピエエトゥロ・ベルナルドネの子と生れたりし爲めにも、太く見すぼらしくみえたる爲めにも、卑屈に額を垂るることをなさず、むしろ堂

彼の全財産なりき。チェエザレがポムペオの海軍に攻め立てられて苦戰に陷りしため、アントニオを味方に引き入れむがため一夜ひそかに伊太利に歸らむとして偶々アミクラアテの門を敲き己がチェエザレなることを傳へて渡航の便を賴みしも、彼は清貧を樂しみて容易に應ぜざりきといふ。

一三、「マリアは下に」――約翰傳一九の二五に曰く、「偖てイエスの母と母の姉妹およびクロパの妻のマリア並マグダラのマリアその十字架の旁に立てり。」

一三、「尊きベルナルド」――ベルナルド・ディ・クィンタゾルレ。アッシイジの富豪の出にしてフランチェスコの最初の弟子也。

一四、「エジディオ」――アッシイジの生れにて第三の弟子なりし人（一二七二年死）。その著「金言」（Verba aurea）は今に傳はれりといふ。――次の「シルヱストロ」はアッシイジの僧侶なりしが、或る時フランチェスコに聖ダミアアノ教會の建築用石材を讓りしことあり。その後フランチェスコがベルナルド（註一三）の喜捨金を貧者等に分てるを見て前の石材の代金を請求せり。その時フランチェスコが即座に過分の大金を差出せしため却つて自己の强慾を恥ぢ、此處に轉心して聖教團に加はれりといふ。

堂と彼は、その峻嚴なる意圖をインノチェンツォ[一六]に打ちあかし、その教團の爲めに最初の認可を彼より受けぬ。

天上の光榮の中にうたはれむかた、一層まさりて適はしかるべきほどの、希有なる生涯を送れる彼のあとに、貧しき人々の從ふもの增し加はりし後、永久なる靈はオノリオ[一七]の手をへて、この團主の聖なる志望に第二の冠をいただかしめき。

さて其事の後、殉教の渴きによりて、彼は倨れるゾルダアノ[一八]の日前に、基督及び彼に從へる者等の事を宣べ傳へたりき。

されど、人々の心の未熟なるにすぎて、歸依するにいたらざるを見出でし故、又空しく留まらざらむ爲め、彼は伊太利の穀物をとりいれむとて引きかへし、さてテエゼレとアルノとの間なる荒き巖の上にて、基督より最終の認可なる聖痕を受け、二歲にわたりてこれを身に帶びたりき。

斯くも大なる福を彼に割りあてたまへりし者、彼の自らを卑うして得たる報賞にひき上ぐるをよしとしたまへる時、彼は正しき嗣子等に薦むるごとく彼の兄弟達に、彼のいと貴き婦人をすすめ、忠實に彼女を愛づべきことをいひつけぬ。

かくて彼の花々しき魂は彼女の懷をはなれて其國に歸らむことをねがひき。しかも彼の肉體のために他の如何なる柩をも望みもとむることなかりき。

いま思へ、大海の上なるピエエトゥロ[二〇]の船をして正しき路を失はしめざるために、適はしき同僚なりし彼の、如何さまなる人にてありしかを。

さて彼は我等の宗祖[二一]なりき。されば汝は、苟くも彼に從ひて、誠められたるままを行ふ者の、良き貨物を運べるを見ることを得む。

されど、彼の牧へる群はめづらかなる食物をいたく貪りて、ために彼方此方の草原に散らばふことをまぬがれざりき。

しかして彼の羊等の、さすらひ迷ひて彼を離るること遠きに從ひ、愈々彼等は乳にとぼしくなりて其小舍に歸るなり。

固より彼等の中には、害惡を恐れて牧ふ者をはなれざるものもあり。されど其數の少きこと、僅かばかりの布にて其僧衣を造るに足るほどなり。

さて若し我が言葉にして微からずば、若し汝の、心をとめて聽きたらむには、若し汝にして、我が言へることを想ひ起しなば、汝の願の些かは滿ち足らふなるべし。

そは、かの木の削りとられたるを汝は見るべく、また革紐を帶ぶる者の『迷はずばよく肥ゆる處』と論ふ、其事の次第をも見るべければなり。」

一五、「卑しき索」――フランチェスコ派の僧侶が帶となせしもの。地、二七の註二〇參照（他の諸教團にては革帶を用ゐしといふ、註二三參照）。

一六、「インノチェンツォ」――法王インノチェント三世がこの教團に認可を與へしは一二一〇年なり。

一七、「オノリオ」――法王オノリオ三世より正式の允許の下りしは一二二三年なりき。

一八、この一節、――一二一九年フランチェスコが數人の弟子と共に十字軍に加はりて埃及に渡り、ダミエッタ附近の陣地にてソルダアノ（スルタン）を改宗せしめんがためその面前にて基督の教を宣べ傳へしと（但し効を奏せざりき）。

一九、「荒き巖の上にて」――テエゼレの上流とアルノの上流の間なるカセンティイノのアルエルニア山上にて。――傳說によればフランチエスコは一二二四年この山上にて基督に祈りをさゝげ我身に受難の苦を知らしめたまへと言ひし時基督セラフィイノの姿にて現はれフランチュスコの體に己と同じ傷痕を印し給ひきといふ。――之を「最終の認可」と云へるは前の兩法王よりの認可（註一六、一七參照）に對してなり。

二〇、「ピエエトゥロの船」――教會。

二一、「我等の宗祖」――ドメエニコ派を起せし聖ドメエニコ。

三、以下最終行までの大意、――ドメエニコ派の人々は教團の紀律に背きて、極めて少數の例外を他にしては、すべての人々が世俗的利慾（富貴、權勢、卽ち、「めづらかなる食物」）に趨り行けりとなり。

二三、「革紐を帶ぶる者」――ドメエニコ派の僧侶。此處に斯く言へるはトムマアゾ・ダクィイノのこと。

第十二歌

かの禍なる焔の語り終るや、聖なる挽臼は直に廻りはじめぬ。
しかしてその未だ一週をなしきらぬ内に、いま一の挽臼は環をなしてそれを圍み、踊りを踊りに、歌を歌に合せたり。
それらのめでたき笛より出づる歌は、元なる輝きの映れる輝にまさるが如く、我等のムウゼ、我等のシレエネにまされり。
ジュノネがその侍女に命ずるとき、色も形も似通へる二の弓は、薄き雲を横ぎりて張り渡さる。
その外なる弓の内なる弓より生るるは、日の前の靄なして、戀ゆゑに消えゆくなる、かの流浪ふ者の物いふにも似たり。
さて斯く張り渡されたる二の弓は、地上の人々をして、神がノエと立てたまひし契約により、世界にふたたび洪水のなかるべきことをトはしむ。
恰かもかくの如く、それらの不朽なる薔薇の二の花環は我等の周圍をめぐり、またかくの如く、外なる環は内なる環と相應じたりき。
光は光と、樂しくなごやかに、且つ歌ひ且つ照らしあへりし、舞踏と高く大なる祝賀とが、恰かも兩眼のそれを動かす者の意の儘に、共に閉ぢ共に開かざるを得ざる如く、時と意志とを同じうして共に靜か

第十二歌

（第四天（太陽天）。賢皆及び善智識、その三。聖ボナヴェントゥラの聖ドメニコ物語。）

一、「シレエネ」――煉、一九の註四參照。
二、「侍女」――イリス、即ちタウマンテの娘（虹の女神。煉、二一の註一一參照。）神々の、就中ジュノネ女神の侍女なりといはる。
三、この一節、――二重の虹のうち外の大なるは内の小なるものゝ反映なりと信ぜられたるを、反響が人の聲より生ずるに喩へしなり。――「流浪ふ者」とはニムファ・エコ（反響）のことにてナルチッソ（地、三〇の註三〇參照）に對する戀患のために憔悴してたゞ骨と聲のみとなり、後に骨は岩となりて只聲のみ生き殘りて今に及べりと言ふ（オヰディオ、「メタモルフォオシ」三の三五六以下。）こは要するにドメエニコ派とフランチェスコ派との諸聖徒の作れる二重の圓の形容を述べたる也）
四、「神がノエと立てたまひし契約」――ノエ（ノア）の洪水の後神は再び水を以て世界を滅ぼさざるべきを契約しそのしるしとして虹を立て給ふなりと（創世記九の九―一七參照。）
五、「星を指す針」――北極星を指す磁針。一二一八年頃には既に伊太利の航海者等に知られたりきといふ。

になりし後、新しき光の一の衷心より一の聲は出で來り、我をそなたに向はしめて、星を指す針のごとく見えしめぬ。
さてその聲はいふ、「我を美しうする愛は、我をすすめて今一人の導者の上を談らしむ。彼の爲めに、今し我が師のあれほどにも讃へられしなりき。
一人の在る處には今一人も導かれて、二人の一になりて戰へりし如く、今もろともに榮光をかがやかさむは宜しき事ぞ。
あれほどにも高き値を拂ひて陣立をあらたにしたる基督の軍勢が、旗章のうしろより、歩のろく、疑ひまどひつつ、疎になりて進みゐたりし時、永遠にしろしめしたまふ上帝は、危きに臨めりし彼の軍人等の爲めに、彼等にその價ある故ならで、ただ彼自らの恩寵よりして備へをなしたまひ、また前きに言はれたる如く、二人の勇士をもて『彼の新婦』を扶けたまひしかば、彼等の行により、彼等の言葉によりて、迷へる人々は連れかへされたり。
草木の若葉を開かせて、歐羅巴の粧ひをあたらしくさせむ爲め、甘き西風の吹き起る處に、時には太陽の波路はるかに、すべての人々よりかくれ行くなる、かの大海原のこなたにして、浪打際よりあまり遠からぬ處に、獅子の從ひ且つ從へたるをあらはす、かの大なる楯にまもられつつ幸多きカラロガあり。
かしこに基督の敎を熱愛する者、味方にはやさしく、敵には嚴しき聖なる闘士は生れたりき。

六、「我」――ボナヴェントゥラ（註二六參照）。フランチェスコ派を代表す。
七、「今一人の導者」――聖ドメエニコ。〔かやうにこの兩派は地上にては互に敵視して競爭せしも天上にありては互に推賞し合へる也〕
八、以下七行の大意、――嘗つて人類はアダモの罪によりて戰鬪力なきものとなされたりしも、後に基督の血によりて新たに武裝をとゝのふることを得たりき。然るに今やそは異端邪說のために愈〻不安なる狀態に陷り且つ敎會の世俗化は宗敎的熱心を微力ならしめたりとなり。
九、以下五行、――聖ドメエニコの出生地に就きて述べたり。〔「甘き西風の吹き起る處」――西班牙。甘き西風とは春風のこと。――「獅子の從ひ且つ從へたる」とは、領主カスティリア家とレオン家との結合せし紋章にありて一頭の獅子は中央なる城の上に、今一頭はその下に描かれたるを指せる也。――「カラロガ」――今は Calahorra と呼ばるる古代カスティリアの町の名。聖ドメエニコは一一七〇年にこの地に生れ、終生敎會のために働きて、一二二一年に死せり。「幸多き」と言へるは聖ドメエニコの生地なればなり。〕
一〇、この一節、――傳へによれば、ドメエニコの

一〇彼の心は、その造らるるや否や、直に生強き能に充ちみちたりしかば、母の裏にありてすでに彼女を證言者たらしめき。

彼と信仰との間なる婚約は聖禮盤一のほとりにむすばれ、そこにて彼等が相互の救ひを取りかはしし後、彼に代りて執り行へりし婦人二は、彼及び彼の嗣子等より出づべき不思議なる果を、一の夢の中に見き。

かくて彼が、そのありの儘を言ひ現はされむことの爲め、一の靈はこの處より下りゆき『彼を悉く有てる者三』にちなみて名づけたり。

すなはち彼はドメエニコと呼ばれぬ。彼を我は、基督にえらばれて其園に彼をたすけし農夫に比へむ。

眞に彼は基督の使、またその親しき者と見えたりき。彼にあらはれし最初の愛は、基督の與へたまへる最初の訓四に向ひゐたればなり。

彼の乳母は、彼が目をさましながら默して地に伏し、あだかも『この爲めにこそ生れたれ』と言はむずるさまなるを屢々見出でき。

五嗚呼、彼の父は實にフェリイチェ。嗚呼彼の母は實にジョヴンナ。若しこれを釋きて、世にいはるるごとき意味あらば。

人々の今、オスティア人六またはタッデオ七のあとを追ひつつ、勞苦して求むる俗世間の事の爲めならで、眞のマンナを愛する爲めに、彼は間もなく大なる教師となり、かの若し園丁八にして過ちなば、直に白みわたるべき葡萄園のあたりに出でゆきぬ。

昔は正しき貧者を今よりも多くいたはりたりしかの『座席九』の、かれが如くなり來りしものは、座席その物よりも、それに着ける者の墮

舟はその懷妊中夢に一匹の白黒斑らの犬を生みしにその犬が口に咥へし炬火によりて世界中を炎上せしめたりと。（此の黒白の斑はドメエニコ派の服裝をあらはし、炬火は聖者の熱情を表はせるものと解せらる）

二、「聖禮盤」――洗禮の水をいる器。洗禮によりて彼の高き信仰との緣を結べりとなり。

三、「婦人」――敎母（小兒に代りて授洗僧に答へをなし儀式を完了する婦人）ドメエニコの敎母はこの小兒の額上にやがて世を照らすべき一の星を夢に見たりきといふ。

三、「彼を悉く有てる者」――神。それに因みたるドメエニコの名は、「主に屬したる」の義也。

四、「最初の訓」――馬太傳一九の二一に見ゆる言葉、「全からん事を欲はゞ往きて爾が所有を售りて貧しき者に施せ然れば天に於て財あらん」云々。――最初とは主要の義にてトムマアゾも清貧をば基督の最初の訓となせり。

五、この一節、――父の名「フェリイチェ」は幸福なる者の義。母の名「ジョヴンナ」は神より惠みを受けし女の義なり。――「世にはいるごとき意味あらば」と言ひしは、ダンテ自らが希伯來語に通ぜざりし故なるべし。

六、「オスティア人」――一二六一年以來オスティ

落によることなるが、この座席にむかひてわがドメエニコの求めしは一〇、六を納めて二三を出すことにあらず、空きたる官にいちはやくつくことの仕合せにあらず、また神の貧者に屬する十分一にもあらで、むしろ汝を取り闇める二十四の草木の元なるかの種子のために、誤れる世と戰ふことの許しなりき。

かくて彼は使徒の務二と共に、敎理を携へて、また意志を携へて、高き水脈より迸りいづる奔流のごとく進みゆき、異端の株に擊ちかかり、抗ふことのいと大なる處にては、その擊つことも亦いと激しかりき。

この後さまざまの小さき流は彼より出でて、加特力の園に灌ぎたれば、その茂みは愈々榮えたり。

聖敎會が自ら衞り、また其内訌をとり鎭むるにあたりて乘りし、かの戰車の一の輪三にして若し斯くの如くならば、わが乘るにさきだちてトムマアゾの太く稱へたりし、今一の輪の傑れたること亦必ずや汝に明らかなるべし。

しかるに、その輪のいと高き處四の殘したる軌はかへりみるものなく、良き酒の薄皮をはれりし處に黴生えたり。

彼の足跡をつたひて直く進みし彼の家族は、また其方向を變へたれば、彼の踵のありしところに彼等の指を置くありさまなり。

五やがて、惡しき耕作の收穫は見らるべく、その時莠はその箱を奪はれたることをかこつべし。

さあれ、敢てわれ言はむ、人若し我等の書を一葉宛くり檢べなば、

アのカルディナアレ及び僧正なりしエンリイコ・ディ・スウザ（一二七一年死）なり。名高き寺院法の註釋者たり。

七、「タッデオ」――名高き醫師にしてヒッポクラアテスの解說者たり。一二六〇――九五年の間ボロニヤの大學敎授たりき。

八、「座席」――法王の地位を指せり。

九、「それに着ける者」――法王自身。此處には特に例の法王ボニファチオ八世を指せるものの如し。

一〇、「ドメエニコの求めしは」――當時一般の僧侶の貪り求めし不正利得（「六を納めて」云々）にもあらず、僧職の空位を狙ふ（「空きたる官に」云々）にもあらず、また十分一稅を私せんとにもあらず、專ら眞の信仰（種）のために異端を征伐する（誤れる世と戰ふ）ことにありし也。

一一、「使徒の務」――ドミニコ派敎團がオノリオ三世より正式の允許を得たるは一二一六年なりき。

一二、「一の輪」――聖ドメエニコ。――次の「今一の輪」は言ふ迄もなく聖フランチェスコ。

一三、「その輪のいと高き處」――聖フランチェスコ。

一四、「彼の踵のありしところに」云々――今の指

今尙は『我があり來りし處に我あり』と錄されたる紙面をも見出づるならむ。

されど、そはカサアレの者にもまたはアクァスパルタの者にも係りなし。彼等の宗規にのぞむや、或はこれを弛め、或はこれを引き緊めたればなり。

我はボナヱントゥラ・ダ・バアニョレジオの命なり。大なる務をはたさむ爲め我はつねに世俗の心勞をあとにしき。

イルミナアトとアアゴスティイノと此處にあり。彼等は索によりて神の友となれる最初の素足なる貧者等の間にありき。

此處には此等と共に、ウウゴ・ダ・サン・ギットレあり、ピエエトゥロ・マンジアドレあり。また下界にて十二卷にひかり輝けるピエエトゥロ・イスパアノあり。

豫言者ナタンと、大司教クリソストムと、アンセルモと、第一の學藝にたづさはることを厭はざりしかのドナアトとあり。

ラバアノこの處にあり。又豫言の靈智を授かりたるカラブリアの貫主ジョアッキイノは我が傍に輝けり。

兄弟トムマアゾの燃ゆるが如き溫情と、その行き屆きたる言葉とは、我を動かして斯くも偉なる武人を羨望讃嘆せしめ、我と共にこれらの侶をも動かせり。」

導の惡しきために祖師聖フランチェスコの歩みし道をば逆行する也。

二五、以下次頁に亙り八行――フランチェスコ派がやがて二派に分裂すべきことを暗示せり。その一は所謂精神派にして清貧の戒をば極度に嚴守して遂に異端たるの嫌疑を受けしもの他の一はいはば半俗僧派にして此の派は戒律を極めて弛くせむことを主張せり。――法王ボニファチオ八世は一三〇二年前者を批難して之を啻にフランチェスコ派よりのみならず寧ろ教會より分離するに至らしめ、その後此の種の決定は數多認許せられたりき。――「カサアレ」（ウベルティイノ・ダ・カサアレ。一三三八年死）は精神派に屬し、「アクァスパルタ」は半俗僧派に屬して一二八七年以來教團の長たりき。――ダンテは此の如く極端なる兩派の說を非難して一の中庸の道を求めたりきといふ。

二六、「ボナヱントゥラ・ダ・バアニョレジオ」――元の名をジョヴンニ・フィダンツァといふ。聖フランチェスコのために大病より救はれし時、buona ventura（幸運）と叫びしによりその母名前をボナヱントゥラに改めし也といふ。後にフランチェスコ派教團の長となり夥しき著作をなせし中に聖フランチェスコ傳あり（前歌のフ

第十三歌

今し我が見し物をよく會得せむと願ふ者は、心の中に描き見よ。しかして我かかたれる間は、その描かれたるものを、堅き巖のごとくに保てよかし。

空氣のいかなる濃さにも打ち克つほどの大なる輝かしさをもて、天上のここかしこを灑刺たらしむるところの十五の星を描き見よ。

又描き見よ、夜も晝も、我等の天の懷にありて足れりとし、その轅をめぐらしつつもかくれ去ることのなき北斗の七星を。

又第一の天輪に車軸をなせるものの尖端にはじまる、かの角笛の口を。

即ち、これらのもの自ら天上に、あだかもミノスの女が死の冷さを覺えし時なりし如き二の標徵となり、一は他の內に照りかがやき、互に前後になりつつ諸共にめぐりゆくさまを描き見よ。

さらば彼は、眞の星宿と、わが在りし處を中にめぐれる二重の舞踏とを、おぼろげながらも識ることを得たるべし。

そは、かの舞踏のわれらの慣ひを超えたるは、いと速き天體の動きの、キアアナの流よりはやきにも比すべければなり。

かしこにて歌はれしはバッコにあらず、ペアアナにあらずして、三位

ランチェスコ物語も多く之に據れりと。彼は瞑想的神祕家にしてスコラ哲學者中のプラトオの稱ありといふ（一二二一―七四年）。

二七、「イルミナアト」――フランチェスコの弟子にして彼の埃及行に隨ひたりといふ。（天、一一の註一八參照。）

二八、「アアゴスティイノ」――テッラ・ディ・ラヴォロに於けるフランチェスコ派教團の管區長なりき。

二九、「ウウゴ・ダ・サン・ギットレ」――生れは獨逸人なりし如し。巴里の聖ギクトル教會の牧師にして神祕派の神學者として著はる（一〇九七―一一四一年）。

三〇、「ピエエトゥロ・マンジァドレ」――その名マンジァドレは「多食者」の義にして彼が多讀者なりしに對する異名なりと。佛蘭西の神學者にして一一六四年巴里大學の長となりしも後聖ギクトル教會に退き、一一七八年此處に死せり。その著數卷の中「教會史」（Historia scholastica）最も著はる。

三一、「ピエエトゥロ・イスパアノ」――西班牙なるリスボンの人（一二二六―七七年）。一二七六年法王となりジョヴンニ第二十一世と稱したりしも翌年ギテルボなる法王殿の一部崩壞のため壓死せり。（これダンテが天國にて遇へる

に分れたる神の性なりき、また神の性と人の性との一になれるものなりき。

歌ふことも舞ひめぐることも、各そのきりをつけしとき、それらの聖なる光は我等に意をとめ、一の心遣より他の心遣へと移ることをよろこべり。

神の貧者の奇特なる生涯を我に物語りしかの光は、この時それらの相和したる神々の間に沈默をやぶりて言ふ。

「一の苅穂は打ちこなされ、其實は今や藏められたれば、めでたき愛は我を促して今一の苅穂を打たしむ。

汝は謂へり、己が味ひ見しことによりて、全世界に高き價を拂はしめたる女の、かの美しき頰を造りなすため、肋骨を引きぬかれしかの胸に、又槍に刺されて、あらゆる罪の重さに勝れる贖ひを、その事の後前になししかの胸にも、この二の胸を造れる全能者は、凡そ人間の有ち得る限りのあらゆる光を注ぎ入れたりと。

乃ち汝は、さきに我が汝に告げて、かの第五の光に比すべきものなしといへりしを異しめり。

いざ、我が汝に答ふる處にむかひて、汝の眼を開けよかし。さらば汝は、汝の思ひと我が言と眞實に於て合一すること、圓に於ける中心の如くなるを見む。

滅びざるものも、滅びうるものも、我等の主が彼の愛より生みたまふところの觀念の耀きにほかならず。

唯一の同時代の法王なり）その著「論理綱要」(Summulae logicales) 十二卷は甚だ有益なる教科書なりといふ。

三三、「豫言者ナタン」――ウリアの妻を奪ひて己が妻となせしダビデ王にエホバの怒りを傳へたり（撒母耳後書、一二の一以下）。

三三、「大司教クリソストム」――クリソストムは「黃金の口」の義にしてその雄辯を表はせりと彼は名高き說教者なりき。（三四七―四〇七年）。三九七年コンスタンティノポリの大司教となりしが、皇帝アルカアディオの罪を批難せしため（此の點ナタンと相似たるため此處に併せ述べられしなるべし）遂に退放の中に死せり。

三四、「アンセルモ」――一〇三三年ピエモンテのアオスタに生れ、一〇九三年カンタベリイの大僧正に任命せられ、一一〇九年に死せり。その著作には世に名高きもの多し、例へば「贖罪論」(Cur Deus homo)。

三五、「ドナアト」――エエリオ・ドナアト。名高き羅甸文法家（四世紀中葉の人）。

三六、「ラバアノ」――ラバアヌス・マウルス（七七六―八五六年）。獨逸マインツの人にて後に同地の大僧正となれり。神學に關する著書多し。

そは、己が赫灼たる本源より流れ出でて、しかもそれと離れず、またそれらと三位にして一體なる愛ともはなれざるかの活ける光は、それ自ら永遠に一たることを失はずして、それ自らの至善よりそ光線を、あだかも鏡に映すがごとく九の存在に集むればなり。

さて其光は、それより降りて潛勢の極限に及び、しかも斯く作用に作用を重ぬるにつれて愈々力弱まり、遂には、ただ果敢なき苅且の物をのみ成すにいたる。

ここに苅且の物とは、諸のめぐれる天球が、或は種により或は種によらずして生ずる產物の謂ひなり。

此等の物の蠟と、蠟を形作す物とは一樣にあらず。乃ち、觀念の印象をうけて自らひかり耀くこと亦相等しからず。

これ、類を同じうする草木も善果惡果をむすび、また汝等のさまざまなる天賦を受けて生れいづる所以なり。

蠟にして若しよく調へられ、また諸の天體にして若しいと强く力を及ぼしなば、刻印の光は皆悉くあらはれたるべし。

然るに自然の光を與ふること常に十分ならざるは、すぐれたる技能を有ちたれども、手の震ひわななく技藝家のごとくにはたらけばなり。

されど、熱烈なる『愛』にして若し思し立ち、第一の『力』の明らかなる『正覺』を印象したまはば、十分なる完全は獲らるべし。

かくてこそ往時土は生きたる物の十分なる完全にふさはしく造られ

三七、「ジョアッキイノ」――一一三〇年の頃、伊太利の靴の爪先に當れるカラブリア州のチェリコに生れ、後にコラッツォの僧院の貫主となりしが、一二〇二年に死せり。その著せし默示的豫言的論說を以て名高し。

第十三歌

（第四天（太陽天）。賢哲及び善智識、その四。アダモ及び基督の智。ソロモネの智。）

一、以下一一行、――ダンテは今、彼とベアトゥリイチェとの周圍を相反せる方向にめぐり行く二個の圈の中なる二十四人の聖徒等をば、當時一等星に數へられし十五の大なる星と、北半球にては決してかくれ去ることなき北斗七星と、その形によりて天の角笛といはるる小熊星（その尖端は天の尖端卽ち北極に近く初まり、北極は「第一の天輪」卽ち原動天の廻轉軸の一端をなせり）の末端「口」（卽ち角笛の聲の出づるところ）に輝ける二つの星とをあはせし以上二十四個の星が二つの圈をなして運行する有樣によりて想像せよ、とその樣を述べたる也。――次の一節に見ゆる「ミノスの女」とはアリアアドネ、彼女は戀人テセオ（地、一二の註五參照）に棄てられし後バッカス神の愛顧を受けしが、死後彼はその冠を天に上げて星座とせりといふ。

しなれ。かくてこそ『處女』は孕りしなれ。

すなはち、人間の性の、この二人者に於ける如くなりしこと、前にもあらず、後にもあらじと汝の思ふは宜しき事ぞ。

さて、我がもしこの上を說きすすまずば、汝は恐らく言ひいづるならむ、『さらば、いかにして彼の者に比類なかりしぞ』と。

されど、あらはれざる事の明らかに顯はれむ爲め、彼の何人なりしやを思へ。また『求めよ』と言はれしとき、何物の彼を動かして請ひ求めしやを思へ。

我が言へることのいかなりしとも、尙ほ且つ明らかに汝は見るを得む、彼がよき王者とならむ爲め智慧を求めたる王者なりしを。

その智慧を求めたるは、この高き處なる動力者等の數を知らむ爲めにも、必然と偶然と一になりて、必然を生ずるや否やを知らむ爲めにも、第一の運動なるものの有り得るや否やを知らむ爲めにも、はた又、半圓の中にして、一の直角を有たざるやう三角形の作らるるや否やを知らむ爲めにもあらざりしを。

この故に、汝若し我が前きに言へる事と此事とを思ひ見なば、我が心の中に指すところのかの比類なき睿智とは、王者の深き慮なるを明らかにせむ。

また、汝若し明らかなる目を『起ちあらはれたる』と言ふ言葉にむけなば、そが數多くして良きものの希なる王者達にのみ關はれるを見るならむ。

二、「キアアナの流」――アレッツォ地方を流るる此の川はダンテの時代には極めて緩漫なりきといふ。その上の「いと速き天體」とは第九天卽ち水晶天のこと也。

三、「バッコにあらず」云々――バッカスやアポロの如き古代の神々を讃美せし異敎徒等の如くならずして。――「ペアアナ」はアポロ神に對する讃歌なり。

四、「一の心遣より」――天、四〇七頁一一行に述べられし疑問（「よく肥ゆる處」）は既に同歌にて（天、一一の末節）解決せられたり。次に「他の心遣」とは引きつづき提起せられたる疑問（其の後ふたたび起ちあらはれたることあらじ）のことにして、今やその解決が試みられむとする也。

五、「第五の光」――サロモネ。天、一〇の註一五參照。

六、この一節、――一切の被造物、卽ち靈智（天使）並びに有形の、從ひて滅ぶべき被造物の原形（觀念）は劫初よりして神の言葉（基督の）內に存したりき。父なる神は基督の愛（聖靈）の中に此等の原形を植ゑ込み給へり。

七、「活ける光」――基督。之等の光線は子なる基督より發すれども、而も基督にありては三一の神の力が一體となれる也。

斯く差別を立ててわが言を受けよかし。さらば、そは第一の父、及びわれらの『愛する』者につきて、汝の思ふところと並び立つ事を得む。

さて、此事をもて汝は常に汝の足を重くする鉛となし、なんぢの見ざる然りにも否にも、疲れたる人のごとく徐に歩み寄れ。

肯ふにも否むにも、差別を立てずしてこれをなす者は、愚人の中にても甚だしき愚人なり。

そは、あわただしく斷ずれば屢々方向を誤り、また偏見に囚はるることあればなり。

眞實を漁りて、しかも其術を知らざる者は、その出で立ちしときと態を異にして歸り來るなれば、彼の岸を去りゆくを益なしといふもの、未だ言ひ得て足らざるを覺ゆ。

パルメニイデ、メリッソ、ブリソン、そのほか行きつつも行方を知らざりし多くの人々は、この事を世に明らかにせる證なり。

サベルリオ、アアリオ、並びに聖書の直き面を劍のまぐるごとくまげたる愚者等も亦然り。

畑にある穗を、その熟するにさきだちて計量りみる者のごとく、人人斷定を下すにあたりて餘りに自らを負むことなかれ。

そは、茨のはじめかたくなに趣きなげなるも、やがて冬すぐればその頂きに花をつくるを我は見、又直く疾く海を越え來れる船の、港の入口にて終に沈むを曾つて見たればなり。

ペルタ刀自も、マルティイノ先生も、一人の盜み、他の一人の獻物を

八、「鏡に映すがごとく」云々――九個の天のたみに下界に感化を及ぼすべき力を仲介するところの天使の合唱團共は、神の內に休らへる諸々の觀念の鏡にしか過ぎず。神の內にありてかの總ての力は未だ分れずして一體たり。唯靈智（諸天）に於てのみ個々の力は分離されて而も總括せられたり。

九、「潛勢」――潛勢とは物質及び元素なり。それ等自體創造せられし諸々の力に依りて潛勢より形成せるものは偶然物すなはち朽つべきものと稱せらる。生產せられし諸事物の材料。若くば發達し行く個體は蠟なり。天の影響とは溶けたる蠟をば封緘せらるべき紙の上に塗抹する如きもの也。

一〇、この一節、――斯く神の直接なる働によりたればこそ往時土は生物を極めて完全ならしめ（アダモの場合）、或は處女マリアが基督を受胎せしなり。

一一、「彼の者」――サロモネ。

一二、「『求めよ』と言はれしとき」――斯く神より言はれし也（列王紀略上、三の五以下）。――サロモネの夢に神が現はれて彼の求むるところを尋ね給ひしに、彼がその父ダビイデの位を辱めざらむがために自己に明君たるの資格を與へ給へと答へしを以て甚だこれを嘉した

なすを見て、彼等の上に神の審判を讀みとれりと思ひなすことなかれ。前者の救はれ、後者の滅ぶることもあるべければなり。」

第十四歌

闃き器の中なる水の、外より打たれ、または内より打たるれば、中心より緣に動き、または緣より中心に動く。

トムマアゾの榮ある命の口をつぐみしとき、この事俄かに我が心に浮び來ぬ。

そは、彼の言と彼につづけるベアトゥリイチェの言とより、似通へる事の起りたればなり。

即ち彼女は言へりき、「この人は今一の眞實の根を追ひ求めて行かざるを得ず。しかも其事を、彼の聲に出だして汝にいはざるのみならず、思ひのうちにさへいはざるなり。

請ふ、彼に告げよ、汝等の實體を飾れる光は、今あるごとくして永久に汝等と共にとどまるべきや否やを。

若しとどまらば、更に告げよかし、汝等の再び見ゆる物になりたらむとき、その光の如何にして汝等の目を害はざるを得べきやを。」

あだかも、輪をなして舞へる人々の、加はれる悅びに促し立てられて、諸共に其聲を高め、その動作を樂しげになすごとく、かの聖なる

一三、以下七行――サロモネの乞ひ求めしは實際上の生活睿智にして、理論上の疑問を解く技倆の如きものにはあらざりき。

一四、「かの比類なき睿智」云々――世にソロモンの智慧とて西儔すべきものなしと讃へらるるは王者としての彼の卓越せる智力也との意。

一五、「起ちあらはれたる」――天、四〇五頁九―一一行參照。

一六、「『愛する』者」――基督。

〔以下四行――眞實を求めて而も過誤を得し人々の實例を擧げたり〕

一七、この一節、――異敎の哲學者を擧たり。「パルメニイデ、メリッソ」――共に前五世紀の人にてエレア學派に屬せし哲學者にして、共にアリストテレエスの論難を受け、またアルベルトゥス・マグヌス（天、一〇の註一一參照）によりて徹底的に否定せられたれば此處にかく擧げたるなるべし。――「プリソン」はヘラクレアの生れにて同じく古代希臘の哲學者。圓の求平積法を立證せむと試みき。

一八、この一節、――重なる異端者等を擧たり。「サベルリオ、アアリオ」――共に名高き異端神學者。前者は三世紀の人にて神の三位一體を否定し、後者は四世紀の人にて基督の神性

二の環は、機を逸さぬ切なる願をききて、その廻りざまと妙なる歌の調とに、新しき悅びを示したり。

凡そ我等の、高きかの處に生きむ爲め此處に死ぬるを悲む者は、ここにして永久なる雨の爽やかさを見ざるなり。

恆に生き、恆に『三と二と一と』にして治むるかの『一と二と三と』は、自ら限られずして萬の物を限りたまふ者、それらの靈ことごとくによりて三度うたはれたるが、その佳き調は、いかなる功德の報いとなすにも足りたるべし。

又我は、小さき環のいと神々しき光の内に、いとつつましき一の聲を聞きたり。そはマリアに物言へる天使の聲もかくやと思はるるものなりき。

その聲は答へて言ふ、「天國の慶のあらむ限り、我等の愛は斯かる光を放ちて我等のまはりに衣をなすべし。

その輝かしさは我等の熱愛に伴ひ、熱愛は我等の正覺に伴ひ、しかしてこは、それ自らの功德を超えて享くるところの恩寵の多少に準ずるもの。

光榮ある、聖められたる肉の、再び我等に着せられむ時、我等の身は悉く全くなれるによりて、愈々めでたさを加ふべし。

されば、至上の善の我等に施し　まふほどのあらゆる光は、我等をして『彼』を見ることを得しむる光はいやまさるべし。

かくて我等の靈覺も增し、これに燃やさるる我等の熱愛もまし、こ

を否定せりといふ。――「並びに」以下の大意は、之等の人々が聖書の眞義（直き面）を曲解する（まぐる）樣は恰も劍がその刃にうつる人の面をゆがめて見するに異ならずとなり。

第十四歌

（第四天（太陽天）、賢者及び善智識、その五。）
（第五天（火星天）神の戰士、光肉體、活後の諸聖徒の榮光。）
（の十字架。）

一、この一節の意味、――トムマアゾは外なる環より内に向ひて語り、ベアトゥリイチェはそれを受けて（次節以下參照）環の内より外に向ひて語れり。その樣、冒頭の二行に述べしことを想ひ泛べしめきとなり。

二、「永久なる雨」云々――神恩かぎりなく聖徒等の上に降り注ぎてこれを福ならしむる事。

三、「一と二と三と」――一は父、二は父と子と、三は父と子と聖靈と。

四、「一の聲」――サロモネの聲也。

五、「天使」――首天使ガブリエエレ（煉、一〇の註九、一〇參照）

六、この一節、――以上（前節まで）にて第一の疑問に答へ、天上の諸聖徒は永久に輝けるのみならず、肉體復活の後には愈、その美を增すことを明かにせり。故に此處には第二疑問に答へて、肉體の諸の機關が復活後には極めて

れより來る我等の照耀もまさざるを得ず。

されど、あだかも炭の焰を出だしつつも、それ自らの姿のかくれざるほどに、焰の中にして鮮やかにかがやくが如く、既に我等を取りまける此輝きは、それまで地の被へりし肉體の、ありありと見ゆるに壓倒さるべし。

また斯く大なる光も我等を疲れしむること能はじ。そは肉體の諸の機關は、よく我等を悅ばすところの總ての物に堪ふるほど強かるべければなり。」

二の隊いづれも太く燥急りて「アアメン」を唱へ、げに彼等が、死にたる體を得むとの願を示したるごとく思はれき。

思ふに此の願は、彼等自らの爲めのみならず、その母達の爲めにも、その父達の爲めにも、また彼等が不朽の焰となりし前に親しかりし者等の爲めにもねがはれしならむ。

さて見よ。かしこにありし光のかなたに、一樣の輝かしさを有てる一の光はあたりにあらはれ、さながら明そめたる地平線のごとくなりき。

又、日の暮れ方に、新しく天に現れ來るもの、あるかなきかに見るが如く、我はかしこに新しき物ありて、かの二の圓周のそとに一の環を作りたるを見きとおぼえぬ。

嗚呼、聖靈の眞の火花よ。我が目のくらみて堪ふるを得ざりし其火花の、いかに突如として燃え出でしかな。

されどベアトゥリイチェはわが記憶に伴はぬ觀物に數へられざるを得

完全となるを以てかゝる光が目を疲れしめざるのみならず、實にそは總ての物に堪ゆる程强かるべしと述べたり。

七、「一の光」――第三の環あらはれし也。

八、「燔祭」――此處は眞心よりの感謝の意。――次節の「犧牲の溫熱の未だ尙ほ我が胸に盡きざる內に」とは、我が感謝の未だ全く終らざる內に、の意也。

九、「エリオス」――希臘語のヘリオス卽ちあらゆる星に光を分ち與ふる太陽神、之よりして此處には廣く神の義に用ゐられしものの如し。――ノオトンの註には、ダンテが此の語をヘブライ語のエリ（我が神）より造りしか、また希臘語のヘリオス（太陽）より採りしか不明なりとあり。

一〇、「二の直徑の四分圓に於てなすところの尊き標號」――聖十字架。（十）

一二、「我が才は」云々――我が才拙くして記憶に留まれることを思ふさま描き出す能はず。

一三、「起ちて克て」――パッセルマンは、基督の戰士の復活祭讃歌中より採りしものなるべしと言ひ、その附錄中にて復活祭の時殉教者等のために歌はるべき Rex gloriose Martyoum（光榮ある殉教の王よ）といへる讃歌の中に之と類似の句の見ゆることを指摘せり。

ざるほど、麗はしく微笑みて見えたりき。

これに力を得て、再び我は目をあげ、わがただかの淑女とのみ、更に高き救ひの中に移されゐたるを見き。

わが前よりも高きにありしことを、我は常よりも紅く見えし星の燃ゆる笑ひによりてさだかに知りしなり。

我がすべての眞心をもて、また總ての人々に通ずるかの言葉をもて、我はこの新なる恩寵にふさはしきほどの一の燔祭を神にささげぬ。

しかして犧牲の溫熱の未だ尙ほ我が胸に盡きざる內に、我はこの供物の嘉びて納められたりしことを知りぬ。

そは、我が「嗚呼かくもかれらを飾るエリオスよ」と言ひしほどに、いと煌かなる、いと赤き輝きは二の光線のうちにして我に現れたればなり。

恰かも銀河の、强き弱きさまざまなる光によりて、宇宙の二の極の間に白みわたり、知者にさへ疑をいだかしむる如く、火星の深みに位せるそれらの光線は、二の直徑の四分圓に於てなすところの尊き標號をなしたり。

ここに至りて我が才はわが記憶に及ばず。そはかの十字架に基督の照り映えたまへりしかど、我はたとふべき物を知らざればなり。

されど十字架を取りて基督に從ふ者は、かの光明の中に基督のきらめきたまふを見むとき、わが斯く省きたるをも恕すことなるべし。

十字架の桁より桁に、又上と下との間に動ける光は、相會ふときに

一三、以下最後迄に就きての注意、――火星に昇りし後のベアトゥリイチェの美しさをばダンテは未だ見ざりしなり。それ故に四二六頁一二―一三行に言ひ放たれ―輕卒とも見ゆる大膽なる言葉に於てはベアトゥリイチェの美しさは除外例たりしなりといふこと。

（昇天とベアトゥリイチェの美とに關して以下少しくノオトンの註釋を參考にすべし、――「天界より天界へと昇り行くことは、淨められし魂が神の知識に進み行くことの、また信仰の神祕の中へより深く進み入ることの表象たり。一步每に靈覺は一層明かとなり來る、されど見られたる諸事物は說明を要求す、而して此の精神的過程に於ける主要の要素は之等の諸事物に關する神學に依る啓示なり。これこそはベアトゥリイチェの眼が與ふるところの歡喜なれ。蓋しダンテはその『饗宴篇』中にて哲學に關して語りて曰く、『此の淑女の兩眼こそは彼女の表明なれ、そは理解の眼に向けられしものにて、救はれし魂をば喜ばす也。おお、いとも心樂しき、えも言はれざる眼眸よ、俄かに人の心を捉ふる者よ、そは表明となりて哲學がその戀人共と語れる時に彼女の兩眼の中に現はるる也。實に汝の中にこそ救ひはあり、汝を眺むる者の祝福を受くべき、且

も行きすぐるときにも燃え閃けり。

たとへば地上にて、人々の自らを衞らむため巧みに工夫せる日蔭を破りて、折々さし入れる日光の中に、微細なる物體の直く又ゆがみて、疾く又遲く、長く又短く、さまを變へつつ動くを見るも亦かくの如し。

更に宛かも、多くの絃の調べを合せて張れる胡弓または竪琴が、譜を心得ぬ者にさへ音色面白うきかるる如く、かの我に現れし光より、一の旋律は十字架の上に集められ、その歌詞をわが聞き分くることもなく我を魅し去れり。

固より我も、そが高き讃美なりしは知りたり。そは「起ちて克て」といふ言葉の、聞き分けざれども聞く人に來るごとく、その如く我に來りたればなり。

我が熱愛のそれによりて燃えさかりたるは、その時まで、斯くもめでたき絆をもて我をつなげる何物も曾つてあらざりしほどなり。

我がこの言葉のあるひは、かろがろしきに過ぐとも見らるべく、かの見入りて、我が願ひの安まる美しき目の、我に與ふる悅びを、かろしめたりとも見らるべし。

されど、いかなる美の生ける刻印も、その高きに從ひて愈々强くはたらくことと、我かかしこにて未だその目に向ひみざりしこととを思はむ者は、わが我自らを辯解かむとて我自らを告發けるかの事を恕し、また我が眞實を語れるを見るならむ。

けだし、かの聖なる悅びの今除かれたるにあらず。そは登るに從ひつつ無智と罪との滅びより救ひ出さるべきその救ひは。』饗宴篇、二の一六、二七―三七。」〕

第十五歌

一、「かの甘き竪琴に口をつぐませ」云々――第五天（火星天）。神の戰士、その二。カッチヤ・グイイダ。フイレンツエ昔物語。

五天にて歌へる聖徒等の歌の止みたる也。次なる「天の右手」とは神を、「聖なる絃」とは諸聖徒を意味せり。

二、「光の條をつたひて」云々――聖徒等のつくり成せる十字架の緣に沿ひて下れる也。次に見ゆる「雪花石」は輝きて透明なるもの也。

三、「アンキイゼの魂が」云々――「エエネアの歌」六の六八四以下にアンキイゼが冥界の野にてその子エエネアに會ひしとき、嬉しさの餘り涙を流して、「汝つひに來りしか、而して汝の父が豫見せし如く、汝の愛は行路の艱難に打ち克ちしか？」云々と語りし事見えたり。――「エリジオ」は冥界なる極樂者の居るところ也。

四、この一節――原文は全部羅甸語なり。――「ふたたび開かれし」といへる其一度は今にして、他の一度はダンテの死後に開かるべき時のことを指せる也といふ。――此處に斯く言へるはダンテの遠祖カッチアグィイダなれど

て愈々清純を加ふるものなればなり。

第十五歌

道ならぬ愛慾より惡意の流れいづるが如く、正しきを吹きいるる愛の常に源をなすなる一の善意は、かの甘き竪琴に口をつぐませ、天の右手の彈きたまふ聖なる絃を靜めたり。

それらのものは我をして彼等に願ひ求めしめむとて齊しく默ししなれば、いかでか正しき願ひ求めに耳をかさざるべき。

果敢なき物を愛するによりて、この愛を永久に失ふ人の、はてしなく嘆かざるを得ざるも亦宜なるかな。

あだかも、靜かに澄み渡れる夕空に、折々ゆくりなき火の走りて、やすらへりし眼を驚かし、移り動く星かと見えたるも、その燃え立ちし處に失はれたるものもなく、又その走り出でしも久しく保たざるが如く、かの十字架の右の腕より、かしこに輝きたる星の一は、十字架の足にまで走りくだれり。

かの寶玉はまた其紐を離るることなく、光の條をつたひて下り、雪花石の背なる光の如く見えたり。

我等のいと大なるムウザに信を置くべくば、アンキイゼの魂がエリジオに其子を認めしときも、同じ變着をもて寄りゆきしなるべし。

も、彼の身の上に就きては此の歌及び次の歌にて詩人の告ぐる事以外には知り難し。

五、「彼女」――ベアトゥリイチェ。

六、この一節――諸聖徒の思想が彼等の神の直觀より流れ出づること恰もあらゆる數が元の一（「單數」）より發するが如し。

七、「第一の平衡」――神。――神にありては聰明と意志と能力とは同等の大いさを有てり、即ちそれ等は自由無碍なり。諸聖徒の意志は神の意志より流れ出でたるを以て彼等は此の「第一の平衡」に與かれりと言ふべし。〔以下八七行までの大意、――汝等天國の靈にありては此の如く智情意圓滿具足せるを以て知れることと欲することと相一致すれども、我等未だ人間なる者には此のこと無ければ、唯心にて感謝し且つ汝の誰なるやは問けざれば知る能はず。〕

八、「黃玉」――古代の寶石學にては黃玉に二種ありとせり。而して之には種々の微妙にして靈活なる魔力ありと傳へられしが、此處にダンテが象徵的意味として思ひ泛べしは恐らく次の如き解釋ならむといふ、即ち――黃玉は總じて眞實にして忠信なる愛情をあらはすものなるも、わけて黃金色なるは隣人に對する愛を、空色なるは神に對する愛を表はせる也。

「嗚呼我が血族よ。ああ、神のあふるる恩寵よ。誰の爲めにか、汝に於けるごとく、天國の戸のふたたび開かれしことやある。」

斯くかの光の言ひたれば、我はそれに意をとめぬ。やがてふりかへりて我が淑女を見しとき、かなたにも此方にも我は驚きたり。

そは、我自らの目をもて我が恩寵の、また我が天國の深みに觸れたりとわれに思はせしほどなる一の微笑は、彼女の目の内に燃えゐたればなり。

かくて、聞くにも見るにも悅ばしく、かの靈はその初めの言葉に添へていひしかど、そは我がさとりがたきほどに奥深きものなりき。

しかも彼は好みて彼自らを我にかくししにあらで、むしろしかせざるを得ざりしのみ。そは彼の思ひは、人間のめざすところを超えゐたればなり。

さて其熱愛の弓の弛み來て、われらの會得のとどく處に下りしとき我が會得したる初めのものはこれなり。

「讃むべきかな、三位にして一體なる者、なんぢは斯くも懇切にわが裔をかへりみたまふ。」

更に彼はつづけていふ、「白きも黑きも改めらるることなきかの大なる書を讀みてより、樂しくも久しく覺えたる我が飢を、子よ汝は、わが汝に物言へるところなる此光の内にして饗したり。こは高く翔ばしめむとて汝に羽を着せたる彼女のめぐみによるものぞ。

汝は謂へり、汝の思は『第一』なる『彼』より我に流れきたり、あだかも單數の知らるるとき、五も六もこれより出で來るがごとしと。

さればこそ、わが誰なるや、また何故にこの樂しげなる群の中にても、とり分けてたのしげに見ゆるやを、汝の我に問はざるなれ。

汝の謂ふところは謬ならず。そは小きも大なるも、ここに生きたる者は、汝の思ふにさきだちて汝の思を映すなる、かの鏡の面を見入ればなり。

されど、我をして斷えず見まもらしめ、我をしてめでたき願ひに渴かしむる聖なる『愛』の、更によく充ち足らふを得むことの爲め、恐れなく、憚りなく、よろこべる汝の聲をもて、汝の願ふところ望むところを言ひ出でよ。我が答ははやく既に定められたり。

我はベアトゥリイチェをかへりみぬ。我が物言ふに先きだちて聞きたる彼女は、我に一の相圖を與へ、わが願望の翼をのばしめき。

すなはち我は口を開きていふ、「第一の平衡の汝等に現れしとき、汝等各の愛着と智能とは重さをひとししうしき。

これ、熱と光とをもて汝等を照らし暖めし太陽の、たとふるに物なきほどの平衡を保てばなり。

されど、人間にありては、汝等に明らかなる理由により、願ふところと陳ぶるところとは其翼を異にせり。

乃ち、人間なる我は、われ自らこの差異を覺ゆるなれば、父の如くにも歡びて汝の迎ふるを、謝するにただわが心もてするのみぞ。

まことに我は汝に請はむ、この貴き石を飾る活きたる黄玉よ、汝そ

九、「汝の家の名」――アリギエエリ。

一〇、「百年にあまれる」――前記アリギエエリの名を初めて名乘りし者なるダンテの曾祖父の死後百年あまりの意也。但し、アリギエエリは一二〇一年には猶存命せしこと記錄に見ゆと言へば、ダンテ自らも彼の死せし年を正確には知らざりしものの如し。――「かの山の第一の軒蛇腹」とは煉獄の第一臺地（傲慢の罪の淨めをるところ）のこと也。ダンテは此の曾祖父より名前と共に傲慢の性をも承け繼ぎしものの如し（煉、一三の註二五參照）。

一一、「第一刻の鐘」――第一刻とは午前六時より九時までの時刻にて、その鐘は終りの午前九時に鳴らされし也。次の「第三刻」とは正午より午後三時までの時刻なれども、その鐘は初め卽ち正午に鳴らされき。（地、三四の註一六參照）――而して此の「鐘」はフィレンツェ市の城壁に沿ひたるバディイアと稱するベネディクト派の僧院に懸かりしものにて毎日勞働と禮拜との時刻を報じたりきといふ。

〔以下古のフィレンツェの安らけく幸せなりし有樣を述ぶ〕

一二、「城壁の古き圍」――フィレンツェ市最古の中世式城壁。四角形にて一一七三年に擴張せられ一二九九年に更に增築せられしといふ。

一三、「婚姻の時期」――ダンテの時代には婦人に甚だしき早婚の風あり且つ夥しき持參金を要するを常としきといふ。

一四、「家人の用ふるにあまる家屋もなく」――過分に宏莊なる邸宅の如きも未だ存せざりき。〔此の一節は當時盛んに行はれし追放（それに因る多くの無人の邸宅等）を諷喩せしものの如し〕

一五、「サルダナパロ」――前七世紀頃のアッシリア帝國最後の王。奢侈と淫逸との典型なり。

一六、「ウッツェルラトイオ」――フィレンツェに近き山。舊き國道によりてボロオニアより來る者は、此の山よりして先づフィレンツェの市とアルノの谿谷とを望む也。――次なる「モンテマアロ」は羅馬に近き山の名にて、北方より來る者必ず之を越え、此處よりして先づ永遠の都羅馬を望みし也。――此處にカッチャグィイダの言はむと欲するところは、當時のフィレンツェは現今（ダンテ時代）のそれの如く羅馬をも凌ぐが如くに華麗なる眺望を有たざりきとの意也。

一七、「ベルリンチオオネ・ベルティ」――フィレンツェにて最も古き名家の一つラギニアアニ家の出。彼の名の最初に記錄に見ゆるは一一七六年なり。かの「善きグァルドラアダ」の父た

の名を「のりて我が心を滿ち足らはせよかし。」
「嗚呼わが葉よ、汝を待つ間をさへよろこび來れる、我こそは汝の根なりけれ。」
我に答へて彼は、先づかくの如く言ひいでしが、更に言葉をつぎていふ。
「汝の家の名を[九]はじめてなのりし者にして、又かの山の第一の軒蛇腹をめぐりて百年にあまれる[一〇]者は、我には子、なんぢには曾祖父なりき。げに汝は、汝の長き勞苦をば汝の業によりて短くすべきなり。
フィレンツェは、いま尙ほ第一刻の鐘第三刻の鐘の鳴りいづるなる、かの城壁の古き圍[一一]の內に、泰らかに、深沈に、愼ましく住みたりき。
かしこには頸飾または冠のきらびやかなるもなく、靴のかざり立てたるを穿てる婦人もなく、纏へる人自らにもまさりて人の目を惹くほどなる帶とてもなかりき。
その頃は、生れ來る女もその父の恐となるにいたらざりき。その婚姻の時期につきても支度につきても、程の宜しきを失はざりければなり。
かしこには家人の用ふるにあまる家屋もなく、室の內にて爲さるるほどの事悉くを示さむとて、サルダナパロ[一五]の來る事もいまだなかりき。
その頃は汝等のウッツェルラトイオもモンテマアロの眺めに及ばざりき。されど、いま其盛なることに於てもまさるべし。
我はベルリンチオオネ・ペルティ[一七]が革と骨とを帶になして出でゆき、

一八、「ネルリ、ゼッキョオ」――フィレンツェの古き貴族の二名門なり。共にグェルフ黨に屬せり。
一九、「其葬らるるところにつきて」云々――追放のため或は良人等が商人乃至銀行業者として他國に滯在せることのため、同行の妻達が異鄕の土とならむことを恐るるが如きこともなかりき。次に「佛蘭西へゆきたる」と言へるは、當時（十三四世紀の頃）フィレンツェの商人達は主として佛蘭西を相手に交易せしを以て也。
二〇、「トロイア人、ヒエソレ、羅馬」――トロイア人は羅馬帝國の祖先。後の二者はフィレンツェ市發祥の地（地、七三頁一六行參照）――此の如く何れもフィレンツェに密接の關係あるを以て之等の物語は樂しく聞かれしたらむ。
二一、「チァンゲルラ」――ダンテと同時代にてデルラ・トオサ家の出なる婦人。その放縱と奢侈とを以て一代の惡評を招きしといふ。
二二、「ラアポ・サルテレルロ」――法律家にしてダンテの黨友なりしも、政治上の意見は動搖勝にて且つ一種の流行狂なりしものの如し。――次の「チンチナアト」につきては天、六の註一七參照。また、「コルニイリア」につきては地、四の註四八參照。
二三、「モロントとエリセオ」――此の兩人に關し

また彼の妻が顏に彩ることなくして其鏡を離れ來るを見き。
又我は見き、ネルリの人も、ゼッキョオ[一八]の人も、皮ばかりなるをもて、その婦人等が紡錘と絲とをもて足れりとしたるを。
嗚呼幸多き女等よ。いづれも其葬らるるところにつきて[一九]恐をいだかざりき。又佛蘭西へゆきたる人のあとに、その臥床と共にさびしく殘さるるもの未だあらざりき。
一人は心を用ひて搖籃を目守り、またあやしつつ、父達母達を先づ娛ますところの片言を倣ひき。
いま一人は絲を紡ぎつつ、その家の者にトロイア人の、ヒエソレの、羅馬[二〇]の事を物語りき。
チァンゲルラや、ラアポ・サルテレルロ[二一]ほどのもの其頃ありしならむには、チンチナアトやコルニイリアの今あるが如く、いと異しき事に思ひなされたるべし。
かくも安らかに、かくも朗かに生きたる市人達の間に、かくも賴母しき團欒に、かくもめでたき客舍に、聲高く求められたるマリアは我をさづけたまへり。
さて汝等の古き洗禮所にて我は、基督徒[クリスティアン]となり、カッチァグィイダとなりにき。
モロントとエリセオ[二三]とは我が同胞なりき。我が妻はポオの谷間より我に來りき。汝の名字もそれより出でしものぞ。
後我は皇帝コルラアド[二四]に事へ、その騎士の帶を賜はりしほど、よき

ては知らるゝところなし。但し、最近には此の一句をば「我が同胞はモロントなりき。而してエリセオの血族より出でたりき」と解する解釋法もあり。ダンテの一族にエリセオなる一族との血族關係ありしことは確實なる事なり。されば此處にてはカッチァグィイダに依りてダンテの一族がエリセオの一族より岐れ出でしものの如く考へられしならむ。――その「妻」は恐らくフェルラアラなるノルディギエエリ家より出でしものなるべし。
二四、「皇帝コルラアド」――ホオエンシュタウフェン家のコンラアト（コルラアド）三世（在位一一三八―五二年）。一一四七年佛王ルイ七世と共に第二十字軍に參加して聖地に赴きしも戰利あらずして歸國せり。――「騎士の帶を賜はり」とは勳爵士たるの名譽を與へられしこと也。

第十六歌＝（第五天（火星天）。神の戰士、その三。フィレンツェの今昔物語。）

一、以下六行、――ダンテは唯自己の功績に基ける貴族の榮譽をのみ承認せり。彼の考へにては祖先等に貴族を有するといふことは彼等に似む事を努むべしとの訓戒の意なり。若しも貴族の名稱を有する者にして、己が才幹によりそれに相當すべき高貴なる行ひを以てそ

功績によりて寵せられき。
彼に從ひて我は、牧する者等の過により、汝等の領地を侵す者等の邪なる教法を破らむ爲め出でゆきぬ。
かしこにて、かの忌まはしき民によりて我は、多くの魂の愛着して穢るるなる、かの虚僞の世より繹き放たれ、殉教の苦みよりして、この安らかなるに來りしなり。」

第十六歌

一 嗚呼人間の血統の瑣々たる貴さよ。我等の愛情の衰ふる處なるこの下界にて、汝のよし人々をして汝を誇らしむるとも、我はもはや異しとせざるべし。そは、欲望のよこしまならざる彼處にして、卽ち天上にありても我は汝を誇りとしたればなり。
まことに汝は短くなり易き服にして、日に日に補はるることなくば、「時」はその鋏をもちて汝の周圍をめぐるべし。
羅馬のさきだちて容しし敬語、またその一族の間にいとも少くのこれる敬語の、汝をもて我が言葉は復びはじまりき。
少しく離れゐたりしベアトゥリイチェは、これをききて微笑み、あたかもジネエヴラの物語中なる、最初の過を見て咳きし女のごとく見えたりき。

の榮譽を繼ぎ足すにあらずんば、その素性の貴きを誇るは無稽に類せりといふべし。
二、「汝」――voi（汝等）。單數人稱代名詞 tu（汝）の代りに敬稱に用ゐられし也。中世にては此の風習はチェザレに始まりしものと信じられたり。されど羅馬にありてはダンテ時代には此の風習は驅逐せられしといふ。（ダンテは先には（天、四二九頁終行）tu を以て呼びかけしも今やカッチャグィイダの勳爵士なりしことを聞きて虚榮心よりかく言葉を改めて voi を用ゐしなり。その他の場合には、ベアトゥリイチェに對してこれを用ゐ、またブルネット・ラティイニに對して用ゐたりき（地、七二頁一一―一二行）
三、「ジネエヴラの物語」――地、五の註二八參照。――「咳きし女」とはジネエヴラの侍女マルオウにて、王妃とランチロットとの戀を語れるを知り咳きしてその不義を警戒せしなり。――恰もその如くベアトゥリイチェは彼等より離れゐてダンテの虚榮心（人間にありては止むを得ざるに微笑を送りし也。
四、「近頃の言語ならぬを」――カッチャグィイダは先の如く（天、四二八頁一―二行）羅甸語にて語りしもダンテが之を伊太利語に直せし也。

我はいふ、「汝はわが父なり、汝は我をしてまことに心置きなく物いはしむ。なんぢは我を高めて我にまされるものとなす。
我が心はいとも多くの流によりて悅ばしさを滿され、自らこれを容れ得て張り裂くることなきをよろこべり。
されば我が愛する祖先よ、汝の祖先等の誰なりしや、また汝の童なりしは何れの年なりしやを我に告げよ。
我に告げよ、聖約翰の羊の小舍はその頃いかばかり大なりしや、またその內にていと高き座席につくべかりし人々は誰なりしやを。」
たとへば炭の風に吹かれて燃えさかるが如く、我が言葉に煽られてかの光の灼きいづるを我は見き。
さて、そが我に愈々うるはしく見ゆると共に、愈々甘く且つ柔かなる聲音にて、されどこの近頃の言語ならぬを用ひて、そは我に語りていふ。
「天使ガブリエエレの『幸あれ』と言ひしかの日より、いまや聖徒になれる我が母の、その腹にありし我を產み落ししまでに、この火は己が『獅子』に廻りゆき、その足の下にて焰をあぐること五百八十回に及べり。
我が祖先等と我とは、第六區の內にして、汝等の年毎の競技に走る者の、先づ走り來る處に生れたりき。
我が祖先等につきては、なんぢこれを聞きて足れりとせよ。彼等の誰なりしや、彼等の何處より來りしやにつきては、言はれざるは言は

五、「天使ガブリエエレの」云々――天、一四の註五參照。――此處は「受胎告知の日より」の意也。（ギイゼの註に依ればフィレンツェ人等は三月二十五日（受胎告知の日、地、一の註一一參照）を以て年の始めとなしたりきといふ。）
六、「この火」――火星。――火の性を有し且つ燃ゆる星座「獅子宮」中にて常にその火を新たに燃え立たしむる火星は、十三世紀の中葉に賢王アルフォンスの命にて定められし一覽表に據れば、その一廻轉に六百八十六日二十二時二十四分を要するとせられたりき。此の計算に從ふ時カッチャグィイダは一〇九一年に生れし也。
七、「第六區」――當時フィレンツェの市は六區に分たれしが、之はその最後の區域なり。最後とは、「年毎」に（市の守護神洗禮者約翰の祭日、六月二十四日）行はれし「競技」（競馬）の決勝點に近き所なりしを意味せり。こは市の東端ポルタ・サン・ピエエトロなる地區に接したり。而して此處のギア・デ・スペッィアアリにエリセイ家の家々は立ち並びたりき。これによりてエリセイ家とアリギエエリ家との親戚關係にありしこと明かなりと（天、一五の註二三參照）。――ダンテはその祖先等に關してこ

るるよりも宜しさにかなへり。

その頃マルテと洗禮者との間[八]にありて、武器を取ることをえし者等は、その悉くをあはせて、今住める者等の五分一なりき。

されど、いまやカムピとさじり、チェルタルドとまじり、またフィギイネ[九]とまじれる市民等も、その頃はいと賤しき職人にいたるまで清純なりき。

嗚呼、わがあげし人々[一〇]の儘にてあり、ガルッツォオとトゥレスピアアノとに汝等の境界のありたらむは、なまじひに彼等を容れてアグリオネの下種、ならびに既に收賄にぬけ目なくなれるシイニア[一一]の下郎なその、かの惡臭を忍ぶにまさること如何ばかりぞや。

世の中のいと惡しくなれるものなるかの人々にして若し、チェエザレと繼しき仲ならず、慈母のその子に於けるごとくなりせば、今フィレンチェ人となりて兩替をなし、商をなせるかの者は、その祖父の物乞へる處なるセミフォンテ[一二]に引き返したるべく、モンテムルロ[一三]は昔のままに其伯達に麗したるべく、チェルキはアアコネ[一四]の寺領にあり、またブォンデルモンティ[一五]は恐らくゲルディグレエゼ[一六]にありたるべし。

人間の混りあふことは、食物に食物を加ふることの肉體に於けるが如く、つねにこの市[一七]の禍のはじまりなりき。

盲の牡牛は盲の羔よりも倒るること疾し。一口の劍の五口にまさりて善く切ること屢々あり。

汝若し、ルウニ[一八]とウルビサアリアとの如何に滅びたるや、またキュウれ以上知るところなかりき（次節參照）。

八、「マルテと洗禮者との間」――兩者共にフィレンツェ市の守護神なりき。（地、一三の註二四參照）――前者の安置せられし「ポンテ・ゼッキオ」の橋（南）と聖約翰洗禮堂（北）との間とは即ちフィレンツェ全市の意なり。――次の「今住める者等の五分一」とは現今の人口の五分一なりきとの意。

九、「カムピ、チェルタルド、フィギイネ」――いづれもフィレンツェ附近の小さき町の名にして、それ等の處より後に數多の人々移住し來りてフィレンツェの血を濁したりとの意。

一〇、「ガルッツォとトゥレスピアアノ」――共にフィレンツェに程近き地名。前者はシエエナに到る道に在り、後者はボロオニアへの途上に在り。

一一、「アグリオネ、シイニア」――前者はペエザ河谿谷の上流に在り、後者はピゼンツィオ川がアルノ河に落合ふところの地名。――前者の「下種」とはメッセル・バルド・アグリオネ（ダンテの同時代者にて市の記錄に關して不正行爲ありし者）地、一二の註四三參照）を指し、後者の「下郎」とはメッセル・ファアツィオ・デイ・モルバルディニ（同じく市に對して不正行爲ありし汚吏にて白黨に屬せり）を謂せりと

シとシニガアリアとの如何に其跡を追へるやを思ひ見ば、市々さへも其期限のあるとき、家々の消えうするを聞くは、汝にとりて異しき事にも解しがたき事にもおもはれざるべし。

汝等の物なるすべては、恰かも汝等自らのごとく死にゆく。ただ久しく打ち續く物にありては、汝等の命の短さによりて知られざるのみぞ。

しかして月天の運行の、絶えず渚を覆ひてはまた露はすごとく、運命もそのごとくフィレンチェをあしらふなれば、時のたつ儘その名聲の失はれたる貴きフィレンチェ人等につきて我が告げたることも、汝に異しとは思はれざるべし。

我はウウギ、カテルリニ、フィリッピ、グレエチ、オルマンニ、アルベリキなぞ、名立たる市民等のはやくも衰ふるを見き。

又我は見き、舊きがごとく大なるラ・サンネルラの者とラルカの者とを、ソルダニエエリ、アルディンギ、及びボスティイキを。

間もなく船より投げすてらるべきほどの、あまりにも重き新なる罪惡をいま積み込める、かの門[一〇]の上にラギニアアニはありき。それより伯爵ゲィイド[一一]、及び凡そその後高きベルリンチオネを名乘れるもの出でたり。

ラ・プレッサ[一二]の者は既に、いかに治むべきかを知り、ガリガアイオ[一三]は既に其家に黃金裝の柄と柄頭とを有ちたりき。

『ヴイオ』の圓柱[一四]も、サッケッティ[一五]も、ジュオキ[一六]も、フィファンティ[一七]も、バルッチ[一八]も、ガルリ[一九]も、桝をみて面を赤うする人々[二〇]も既に大なりき。

いふ。

三、「かの人々」――法王、僧侶等の如く寺院に屬せし人々。――「チェエザレと繼しき仲ならず」云々とは法王等が皇帝を敵視して之と相爭ふことなかりしならば云々との意。

三、「セミフォンテ」――エルザ河谿谷の上流に在りし堅固なる城。一二〇二年フィレンツェ人等によりて破壞せられき。

四、「モンテムルロ」――オムブロネ河の谿谷中に在りし城。元來ゲィイド伯爵一家の所有なりしもピストイア人の攻擊に堪へずして一二一九年之をフィレンツェ人に賣りし也。

五、「アアコネ」――シエエエ河谿谷中のアアコネ。――この寺領内には元來チェルキ一家が住みたりしも十二世紀中葉にフィレンツェ人の攻略に遭ひし後は同市内に移住せり（註二〇參照）。

六、「ブォンデルモンティ」――その所領の城モンテブオオニは一一三五年フィレンツェ人等によりて破壞せられき。

七、「ゲルディグレエゼ」――右のブォンデルモンティ家の城の在りし處、即ち、グレエゼ河の谿谷なり。

八、「ルウニ」――地、二〇の註八參照。――次なる「ウルビサアリア」はマルカ・ダンコナと

カルフッチの出で來し木の株も既に大なりき、シジイとアルリグッチとも既に位高き座席に据ゑられたりき。

嗚呼、その慢心の爲めに滅びたる家々も、我が見し頃はいかに大なりしかな。金の球はその總ての大なる功をもてフィレンツェを榮えしめき。

汝等の教會の窓く度に、いつも相議りて身を肥やせる人々の先祖等も斯くなしき。

逃ぐる者を追ふこと龍のごとく、齒または財布を示す者には羔のごとくやさしき僭上の種族は、既にあらはれゐたりしかど、素姓のいやしきによりて、ウベルティイノ・ドナアティはその舅がその後彼をば、彼等の緣者になししことをよろこばざりき。

既にカアポンサッコは、フィエソレより市場へくだり、ジュウダとインファンガアトとは既に善き市民なりき。

信じ難くしてしかも眞實なる一の事を我は告げむ。ラ・ペエラの人々に因みて名を呼ばれたる一の門より、かの小さき圍の内に人の入りゆきしことぞこれなる。

トムマアゾの祭によりて名を知られ德をたたへられたる、かの大なる領主のうるはしき紋章を帶ぶる者は、いづれも皆騎士の資格と特典とを彼より受けき。ただかの紋章に緣取れる者の今日、庶民と一になれるのみ。

グァルテロッティもイムボルトゥニも既にありしが、彼等にもし新なる隣人なかりせば、ボルゴは今尙ひとしほ靜かなりしなるべし。

義しき憤の故に汝等を殺し、汝等の樂しき生活に終をつげしめ、かくして汝等の嘆きを生み出したるかの家は、その緣の者等と共に敬はれき。

嗚呼、ブオンデルモンテよ、汝が他人の說得によりて、これとの緣組を避けしことの如何に禍なりしかな。

汝のはじめてこの市に來りしとき、神の若し汝をエエマに委ねたまひしならば、今悲める多くの人々も喜びてありたるべし。

されど、フィレンチェはその平和の最終の時、橋を守れるかの不具の石像に犧牲をささげざるを得ざりき。

我はフィレンチェにこれらの家々あり、その他の家々もありて、泣きなげくべき理由のなかりしほどに泰らかなるを見き。

また我は見き、これらの家々ありて其民はまことにかがやかしく、まことに正しかりしかば、百合はかつて其旗竿を逆まにされしことなく、軋轢によりて紅くなさるることもなかりき。」

第十七歌

今尙ほ人の父等をしてその子等にむかひて咎ならしむる者は、人の己を罵りて言へりし事につきて、その眞實をあきらかにせむとてクリ

アスコリ・ピツェエノとの間にありし昔の町。「キュウシ」はトスカナ州南端のヴルディキアアナ（地、二九の註一一參照）に在りし町。「シニガアリア」は同じくマルカ・ダンコナなる町。

（昔つては大いなりし町々、今は亡びて跡形もなし）

一九、この一節、――カッチァグィイダの生時にフィレンツェにて榮えたりし數多の家名を此處に擧げし也。

二〇、「かの門」――ポルタ・サン・ピエエトロ（聖彼得の門）――此處に一三〇〇年の頃チェルキ一家（註一五）がその邸宅を構へたりき。此の一家は白黨の首領となりてドナアティ家と爭ひ遂にフィレンツェ全市に禍亂を加へし者なれば此處に「新なる罪惡をいま積み込める」と言ひしなり。――次なる「ラポニアアニ」はカッチァグィイダ時代のフィレンツェの名家にしてその邸宅は上記「聖彼得の門」の上手にありしが、こは後にグィイド家に移り、更にチェルキ家の有に歸せし也。

二一、「伯爵グィイド、ベルリンチォネ」――天、一五の註一七並地、一六の註七、八參照――ベルリンチォネに就きて「その後高き」と言へるは「善きグァルドラアダ」の姉妹が一人はドナアティ家に、他はアアディマリ家に嫁してそれ等の子孫にベルリンチォネの名を繼ぎし者多かりしことを指せる也。

二二、「ラ・プレッサの者」――ボルラニに從へばボオルタ・デル・ドゥオオモ區内の貴族等を斯く呼びしなりと。彼等は一二五八年にフィレンツェを逃亡し、また一二六〇年のモンタペルティの戰（地、一〇の註一九參照）に敵方に移りしギベリン黨員に屬せり。後に市政に參與して高官に就き「いかに治むべきかを知り」たりしといふ。

二三、「ガリガアイオ」――ポオルタ・サン・ピエエトロ區のいと古き一門。一二一五年にギベリン黨に加はりしも、後いたく零落せりといふ。――「黃金裝の柄と柄頭とを有ちたりき」とはかゝる事を許されて勳爵士の位に列したりとの意。

二四、「『ヴァイオ』の圓柱」――家紋によりてフィレンツェの名門ビイリ家を表せり。――此の紋章は赤き楯に蒼白の縱縞（圓柱）を描きてヴァイオと稱する十四世紀の頃王侯の衣服に用ゐし毛皮を表はせしものなりき。

二五、「サッケッティも、ジュオキも」云々――いづれもフィレンツェの貴族名門なりき。

二六、「桝をみて面を赤うする人々」――キアラモンテエジ家の一門。その一人鹽を賣る役目に

メエネにいたりしが、我も亦その如くなりき。
又わがその如くなりしことはベアトゥリイチェによりても、並びに、前に我が爲めにその處を移したりし聖なる燈によりても認められき。
乃ち我が淑女はわれにいふ、「汝の願望の焰を放ち、そが衷なる印を十分にきざみて出で來るほどになせよかし。
そは汝の言葉によりて我等の知識の增すを得む爲めならで、寧ろ汝がなんぢの渴さを告ぐることに自ら慣れ、人の汝に飲ますを得む爲めぞかし。」
「嗚呼、わが親愛なる根本よ。汝は自らを高くあげたれば、恰かも世俗の理智が、二の鈍角のよく一の三角形に容れられざることを知るごとく、あらゆる『時』の現前せる一點を見守りつつ、偶然なる事柄をその起るにさきだちて見るなり。
わがギルジリオと共に、かの魂を癒す山に登れる間にも、また死の世界に降れる間にも、わが行末につきてゆゆしき言は我に聞かされたり。
されど、我は運命のわれを擊たむとも、いささかも心搖がざるべきを覺ゆ。この故に、いかなる運命の我に近づけるやを聞かば、わが願ひは滿ち足らふべし。そは、豫見されたる箭はその中る力を弱めらるればなり。」
前に我に物言へりし光にむかひて我は斯く言ひ、ベアトゥリイチェの望める如く我が願望は打ち明かされぬ。

ありて不正の利を圖りしことあり（煉、一二の註四三參照）。
三七、「木の株」――ドナアティ家のこと。これより數多の家々分れ出でしが就中「カルフッチ」家は早く衰頽せしを以て此處に擧げたるなるべし。
三八、「シジイとアルリグッチ」――兩家共に當時高官に着きて榮えたりき。
三九、「家々」――フィレンツェ市屈指の名門なりしウベルティ家の人々。就中ファリナアタは最も著名なる者なりき（地、一〇の註六參照）。
三〇、「金の球」――フィレンツェの名門ラムベルティ家を指せり。――此の一族は楯の上に黃金の球を描きて紋章となせり。――ブォンデルモンテ殺害事件に關與せしモスカは之に屬せり（地、二八の註三一參照）。
三一、この一節、――フィレンツェ僧正教區の監督者たりしギスドミニ、トシンギ兩家の人々は、僧正の椅子空しくして、その後繼者の定まる迄は收入を司るの權を有せしを奇貨とし、故意に後繼者の任命を延ばして私腹を肥せしといふ。
三二、「僧上の種族」――アディマリイ家並びにその分家カポッツィウリイ家（後者の出にフィリッポ・アルゼンティあり。地、八の註六參照）――

諸の罪を取り去る神の羔の殺されたりしにさきだちて、古の愚かなる民を惑はしし、かの贋なる言葉によらで、むしろ明らかに飾氣なく語りて、かの父なせる者の愛は、自らの微笑の中に且つ包まれ、且つあらはされつつ答ふらく。
「汝等の物質の卷物より外に出でざる偶然の事柄は、悉く皆永遠なる靈覺の土に描かれたり。
しかも尙ほ、かく描かれたるが爲めの故に、其事柄の必然に起るとにはあらず。たとへば流を下れる舟の、これを映せる眼によりて下るにはあらざるがごとし。
この永遠なる靈覺より汝を待ち受けたる物のわが目に來るは、めでたき和聲の樂器より耳に來ると異るところなし。
イッポリイトがその無慈悲にして邪慳なる繼母の故に、アテエネを去りしごとく、汝はフィレンツェを去らざるを得ず。
日毎に其督の賣買せらるる處にて思ひ量れる者、この事をねがひ、既にこの事を企てたり。しかして間もなくこの事を成すならむ。
この罪はつねの如く、虐げられたる側の者等にむかひて鳴らさるべし。されど正しき刑罰はこれを下す眞實への證となならむ。
汝は何物にもまさりて愛するもの悉くを棄て去るべし。これ、流罪の弓の第一に射かくる箭なり。
他人のパンのいかに鹹きやを、また他人の階段の昇降のいかばかり辛き徑なるやを汝は自ら試しみるならむ。

ベンヴェヌト・ダ・イモラの報告によれば、此の一門のボッカチノなるものダンテ追放の後その財產を掠奪せしため以後常にダンテの仇敵たりしといふ。
三三、「ウベルティイノ・ドナァティ」――ベルリンティオオネ・ベルティの女婿ウベルティイノ・デ・ドナアティは、己が妻の姉妹が後に素性卑しきアディマリイ家に嫁せしため（註二一參照）、自らが「彼等」（アディマリイ家の人々）の緣者となりしことを快からず思ひし也。
三四、「カアポンサッコ」（囊中の頭の義）――フィエソレよりフィレンツェの舊市場の附近に移住し來りしカアポンサッキ家の一。昔の名門にして十二世紀の頃には市の高官多く之より出でしといふ。また、ベアトゥリイチェ・ポルティナアリ（地、二の註一〇參照）の母も此の一門の出なりしとぞ。
三五、「ジュウダとインファンガアト」――夫々にジウディ、一門インファンガアティ一門を代表せり。いづれも十二世紀に榮えしフィレンツェの名家なり。
三六、「ラ・ペエラの人々」――La Pera は「梨」の義。梨を紋章とせし一族なりしを以て此名あり。フィレンツェの出擊門の一をば此の一族の名に因みてペルッツァ門（porta Peruzza）と呼び

しかして汝の肩にいと大なる重荷となるは、汝と共に此溪に落ちゆく邪にして愚かなる伴侶なるべし。

彼等はまたく恩義を忘れて、またく狂暴になりて汝に背かむ。されど程なく、汝ならで彼等こそは、これが爲めに其額を赤くいろどらむ。

彼自らの行爲こそは獸のごとき其性に證をなさむ。されば、汝ただ一人にして汝の黨派を作ること、汝にとりて宜しかるべし。

汝の第一の避難所第一の旅舍は、聖なる鳥を梯の上に置く、かの大なるロムバルディア人の溫情ならむ。

汝に對する彼の思ひやりのいと深ければ、爲すことと求むることとのうち、他の人々の間にていとおそきものも、汝等ふたりの間にては先なるべし。

その功績の世に知らるるほどにも、この强き星の影響を、その生る時に受けたる者を、彼の許にて汝は見む。

彼の年若きことよりて、人々未だ彼を知ることなし。そは、これらの天球の彼の周圍をめぐること僅かに九歲なればなり。

されど、かのグァスコニア人が氣高きアルリイゴを欺くに先きだちて、彼の德の閃きは錢をも勞苦をも顧みざることの中にあらはれむ。彼の華々しき行はこの後あまねく世に知られ、その敵さへもそれについて口をつぐむことを得ざるにいたらむ。

なんぢ彼と彼の恩澤とに目をむけよ。彼によりて多くの人々は形をしることあるも、ダンテの時代には此の名家も零落して跡形もなければ、誰人にもこの事は「信じ難」かるべし、而も「眞實なる一の事」なりとの意。——次なる「かの小さき圍の內」とは昔の城壁內の義也（天、一五の註一二參照）。

三七、「大なる領主」——皇帝オットオ第二世及び第三世時代に於けるトスカナ州の皇帝代理人にて「偉大なる男爵」と呼ばれしウウゴ・ディ・ブランディムボルゴ（侯爵）。彼は一〇〇六年十二月廿一日（使徒聖トマスの祭日）に死せしがその母の建立せしバディイア僧院（天、一五の註一一參照）に葬られ、爾後毎年同日記念の祭典行はるることとなれり。——此のウウゴはその生前數多のフィレンツェの家族に騎士たるの榮譽を與へしが、彼等は皆「領主のうそはしき紋章」（紅白七條の縱縞）を受けつぎしがその形は大同小異なりき。——たゞ、此の紋章の緣に細き黃金線をあしらひしもの（「かの紋章に緣取れる者」）なるジアアノ・デルラ・ベルラは、十三世紀の末「庶民」の味方となりて權門に抗せしが利あらず、後に（一二九五年）追放せられて佛蘭西に走れり。

三八、「グァルテロッティもイムボルトゥウニも」——いづれも一時榮えしフィレンツェの名家。

あらため、富める者と乞食とは互に地をかへむ。

又汝はこの後彼の事を心にしるして携ふべし。されどこれを人に告ぐることなかれ。」

かくて、居合せたる人々にも眞と思はるまじき事どもを告げしのち、更に加へていふ。

「子よ、これらのものは汝に語りきかされたりし事の註解ぞ。いくばくもなき歲月のかなたにかくされたる係蹄を視よ。

されど、我は汝がなんぢの隣人を嫉むことをねがはず。汝の生命は彼等の不實の刑はるるよりも遙かに遠き未來に亙るべければなり。」

我が持ち出だしたりし織機の紐に緯を入れ終りしことを、かの聖なる魂の默して示ししとき、あだかも疑をいだける者の、見ること、願ふこと、また愛することの正しき人より助言を求むる如く、口を開きて我はいふ。

「我が父よ、自らを顧みることのいと少き者に、いと嚴しくあたるごとき一の打擊を、我に與へむとて時の我が方へ急げるは、我よくこれを見る。

この故に我が自ら先見をもて裝甲ふぞよき。さらば、いと愛しき處の我より奪はれむとも、他の處をば我はわが歌によりて失ふことなきを得む。

はてしなき苦みの世界に下り、また我が淑女の目にひさあげられて麗はしき頂を離れしかの山を登り、後また天上の光より光にと移り來

三九、「隣人」——モンテブォオニよりフィレンツェへ移住せしブォンデルモンティ家（註一六參照）——次なる「ボルゴ」は市の一區域の名前（ボルゴ・サンタポストロ）也。——初め前記のグァルテロッティ、イムボルトゥウニ兩家が此處に住みしが、後にブォンデルモンティ家がその隣に來り住みてアアミディ家と事を構へしため全市の平安を失ひたりきとなり。

四〇、「かの家」——アアミディ家。——ブォンデルモンティ家との爭亂につきては地、二八の註三一參照。——「義しき憤」とは爭亂の始めが破約者に對するアアミディ家側の憤りに發せしことを表はせる也。

四一、「他人の說得によりて」——破婚の因をなせし美少女の母（ドナアティ家の一婦人）の說得によりて（同じく地、二八の註三一參照）。

四二、「エェマ」——グレエゼ河谿谷中なる小さき流の名。モンテブオオノよりフィレンツェに來るには必ず之を渡らざるべからず。（ブォンデルモンティ家がフィレンツェへ移住（註三九參照）の途上若しも此の川に陷りて溺死せしならば斯かる不祥事は起らざりしならむに）

四三、「不具の石像に」云々——犧牲に捧げられしは破婚者ブォンデルモンテ彼自身なりき。怒れるアアミディ家の人々は彼をばポンテ・ゼッキ

つつも、我が學び知りたるところをば、若し我が語り告げなば、その味は多くの人々にとりて太だ辛かるべし。

しかも、若しわが眞實の友たることに怯れたらば、今の時を昔語りにすべき人々の間に命を失はむことを恐る。」

かしこに我が寶の微笑むを包めりし光は、先づ日光の中なる金の鏡のごとくきらめき出でしが、やがて答へていふ。

「己自らの、または他人の恥によりてくらめる本心は、固より汝の言葉を嚴しとも思ふことあらむ。

さあれ、あらゆる虚僞をすてて、汝に見えし物ことごとくを顯はし、さて痒き處を、人の搔くにまかせよかし。

汝の聲のその初め味あしくとも、のち消化るるに及びては生命の營養となるものをのこすべし。

汝のこの叫びは、いと高き巔をいと激しく擊つところの風の如くなすならむ。しかもこは小さからぬ名譽となるべきものぞ。

されば、これらの天球の内にても、かの山にても、またかの哀みの溪にても、汝に示されたるは唯だ世に聞えたる魂のみ。

そは、根元の知られず隱されたる實例によりては、また明らかならぬ論證によりては、聞く人の心落ちつかず、その信を置くにためらふべければなり。」

オの橋の袂に立ちたりし破損せるマルテ像（地、一三の註二四參照）の下にて殺害せし也。——玆にフィレンツェの平和は終りを告げしなり。

四四、「百合はかつて」云々——フィレンツェの旗は嘗つて敵の手中に陷りしことなく、また嘲弄のため旗竿に逆さに揭げられしこともなかりき。——此の旗古は紅地に白百合の花を帶びしが、一二五〇年にギベリン黨の追放せらるるやゲルフ黨は白地に紅百合を採用せり。而して爾後之が此の市の徽章となりたり。

第十七歌

（第五天（火星天）。神の戰士、その四。ダンテの將來に關する豫言。）

一、「者」——フェトンテ（地、一七の註二二參照）——フェトンテの過失は人の父等を警戒して、その子等の願ひに對して吝ならしむる也。

二、「クリメエネ」——フェトンテの母。——ジョオヱとイオとの間の子なるエパアフォなる者或る時フェトンテにむかひて彼の父はアポロ神に非ずと罵りしためフェトンテが憂ひて母の許に急ぎ此の言の眞否を問ひ質せし時のこと也。——「我も亦その如く」とは、フェトンテがその父に關する眞實を知らむと熱望せし如く、ダンテも亦その未來に關して屢〻聞かされし豫言——ファリナアダ（地、四九頁八行以下）、ブルネット（地、七三頁一六行以下）コルラアド（煉、二一五頁一二行以下）オデリジ（煉、二三〇頁終四行）——に關する眞實を知らむと熱望せしなり。

三、「あらゆる『時』の現前せる一點」——神。

四、「ゆゆしき言」——註二從半參照。

五、「古の」——基督以前卽ち異教時代の。——「かの朧なる言葉」とは神託の如きを指せる也（煉、三三の註一一、一二參照。）

六、以下七行の大意、——偶然事はただ物質界のみにあり、靈界にありては一切の事悉く必然の理より生ず。（天、五一六頁二〇行以下）——「永遠の靈覺」たる神は起るべき一切の事を豫知し給ふと雖も而もそは生起の原因にはあらず。生起の原因は寧ろ自由意志なり。斯くてダンテは宿命論に反對せる也。

七、「イッポリイト」——テセオとアマツォオネの女王イッポリテとの子。その繼母フェエドラが彼を慕ひて不倫の戀を迫りし時之を拒みしため彼女の憎むところとなり、却つて彼女が彼につけ廻さるるが如くにテセオに讒言せしため、イッポリイトは父の怒に觸れてアテエネより追放せらるるに至れり。——ダンテも亦

第十八歌

いまかの禍なる鏡はただそれ自らの思ひを、また我は我が思ひを味ひつつも、甘きをもて苦きを和げゐたりき。

さて、我を神に導きたりしかの淑女はいふ、「汝の思を變へよ、あらゆる非行の重荷をかろくする者に、わが近きことを思へかし。」

我はわが慰めなる者のやさしき聲音をききてふりかへりぬ。しかも其時かの聖なる目の中にいかなる愛をわが見しや、我はこれを此處に言はじ。

そは、我がわれ自らの言葉を信頼み得ざる故のみにあらず、他に導く者なくば、記憶の力のかくまでも遠きにさかのぼること能はざればなり。

かの刹那につきて我が述べ得るところは單だこれのみ。曰く、復び彼女を視て、我が情は如何なる他の願望にも累はされざりきと。

ベアトゥリイチェを直接に照らせる永遠なる悅びの、其第二の姿をば彼女の麗はしき面に映して、わが心を滿ち足らはしゐたりしとき、一の微笑の光をもて我を服へつつ彼女は我にいふ、「ふりかへりて聽け。

我が目にのみ天國のあるにあらざればなり」と。

情にして若し、魂ことごとくを占むるほどに大ならば、そが容貌の

上に見らるるは、この世にして間々あることなるが如く、われのふりむきし聖なる光の燃えたる中に、尙ほ我と談らまほしとねがふ意志あることを我は認めき。

かの光は言ふ、「頂より生命を攝りいれ、常に實を結び、また葉の落つることなき樹の此第五座に、福なる諸の靈はあり。その天上に來るにさきだちて、いかなるムソザをも詩材に富ましむるほど、下界に名を知られたる人々なりき。

されば、かの十字架の臂を見よ、わが今名をいはむ者は、雲の中にてそれ自らの疾き火の爲すごとき技を、かしこにしてなすなるべし。」

ジョスエの名のいはるるや、直に我は一の光の十字架をつたひて走るを見ぬ。その言はれたるを我が知りしも、その爲されたるより前の事ならず。

さて氣高きマッカベオの名と共に、いま一の光の廻りつつ動きいづるを我は見き。しかも悅ばしさはそのむち獨樂の鞭なりき。

カルロ・マアニオとオルランドとの名をいはれし時にも、我が目は切に二人のあとを追ひ、あだかも鷹の飛びゆくを鷹匠の目の追ひゆくが如くなりき。

その後グリエルモ、リノアルド、ゴッフレッド公、及びロベルト・グィスカアルドは、かの十字架にそひてわが目を走らしめき。

かくて我と物言へりし魂は、他の光の間に混りゆきながら、彼が天上の歌人等の中にても如何に大なる名手なりしやを我に示しき。

その如く寃罪を負はされてフィレンツェを去らざるべからず。

八、「日毎に基督の賣買せらるる處」——羅馬法王廳。——「思ひ量れる者」卽ちダンテを虐げむがための策をめぐらせるは法王ボニファチオ八世とその一味の者共なり。

九、この一節、——汝に對して最も大なる苦痛を與ふる者は汝と共に追放流竄の悲境に陷るべき白黨の人々なるべし。

一〇、「汝に背かむ」——追放後の白黨は屢〻フィレンツェの黑黨に對して再擧をはかれり。而してダンテは恐らく一三〇四年のラストラの戰以前に白黨の頭目等と絕交せしものの如し。蓋し彼等はダンテの熱誠なる對策を理解する能はずして彼に怨恨を懷きしためならむといふ。——次の「其額を赤くいろどらむ」とは、思ふに前記一三〇四年七月廿日ラストラに於ける白黨のフィレンツェ攻擊に敗れて血にまみれし時のことを指せるなるべし。

一一、「ロムバルディア人」——バルトロムメオ・デルラ・スカアラ（一三〇四年三月七日死）。——アルベルト・デルラ・スカアラ（煉、一八の註二八參照）の長子にしてその死後ヱロナの君たり。此の一家の紋章は赤地にて頂に帝國の鷲の止れる銀色の梯子を表はせるものなりしといふ。

我はわが右側にふりかへり、ベアトゥリイチェの言によりて、または身振によりて表はされたる我が義務を見むとしき。

しかして、彼女の目のまことに清く、まことに樂しげにして、その姿の他なるときに勝り、最終の時にさへ勝りたりしを我は見き。

又あだかも、善き行をなすにあたり、悅ばしく思ふことの愈々大なるによりて、日毎に人が、その德の進めるを自ら知るごとく、我はかの奇蹟の愈々かざられたるを見て、天球と共に我かめぐる輪の、その弧を增し加へたりしことを知りき。

しかして、あだかも其顏より羞恥の荷を下ろしたる女の、束の間に變りて白きにかへるごとく、わがふりかへりしとき、われの目に見ゆるもの變りゐたりき。こは我を受け容れたりし程よき第六の星の白きによりてなり。

我は、かのジョオヱの炬火の內に愛のきらめきあり、我等の用ふる言葉となりてわが目にうつるを見き。

しかして、岸よりたてる鳥共の、その食物のありしを喜び合へるかとも見えて、或は圓き、或は他の形の隊を作るが如く、諸の光の內なる聖徒等は飛びつつ歌ひ、或はDの字を、或はIの字を、或はLの字を形作りき。

彼等は先づ歌ひつつ彼等自らの節にあはせて動きしが、やがて此等の文字となりしとき、しばし立ち止まりて默しき。

嗚呼、女神の馬なるペガアゼアよ、汝は人々の才をして榮あらしめ

一三、「者」——カングランデ・デルラ・スカアラ。前記バルトロムメオの末弟（アルベルトの第三子）たり。一二九一年三月九日、火星（この強き星）の影響下に生れて生來勇猛心に富み、一三一一年には兄アルボイノと共にヱロナの支配者となり且つ皇帝アルリイゴ（ハインリヒ）七世の代理者となりしが、兄の死後に全ヱロナの獨裁者たりき。一三二九年七月二十二日に死せり。——ダンテは彼をば皇帝及びギベリン黨の勢力恢復者也と見做して彼に大いなる希望をつなぎたりき。彼も亦ダンテを厚く保護せしを以てダンテは感謝の意をこめて彼に此の「天國篇」を獻ぜしなり。

一三、「グァスコニア人」——法王クレメンテ五世（地、一九の註二〇參照）彼はアルリイゴ七世の羅馬行（戴冠式のため。一三一二年）に許可を與へ乍ら他方にて皇帝の敵を庇護せり（之を此處に「欺く」といひし也）。故に「欺くに先きだちて」とは此の時以前との意也。

一四、「汝に語りきかされたりし事」——地獄及び煉獄に於て聞かされし豫言（註二參照）。

一五、「いと愛しき處」——フィレンツェ。

一六、この一節、——我若し怯懦にして眞實を語るを避けたらむか我は貴き後代の譽れを失ひ

命ながからしむ。そは才が汝によりて市々國々の上になすところの如し。

願はくは、汝自らをもて我を照らし、我をして彼等の有樣の、わが心に畫かれたるままを示すを得しめよ。汝の力をしてこれらの短き詞章のうちにあらはれしめよ。

さて彼等は七を五倍したる母韻及び子韻として自らを示し、我はまた其部分部分の、さながら我に言はれしかのごとくに思はゝたるを意に留めき。

Diligite justitiam は全畫幅の初めの動詞及び名詞にして、Qui judicatis terram は終りのものなりき。

かくて第五語のMをなしたる儘に彼等のありしかば、かしこにして木星は金の模樣を打ち出したる銀かと見えしほどなりき。

我は又、Mの頂の處に他の諸の光の降り來て、歌ひつつかしこに鎭まるを見き。うたへるは思ふに、彼等を己自らに引き寄する『至善』の事ならむ。

かくて燃えたる薪を打てば、愚者等をして占ひをなさしむる慣ひなる、夥しき火花の出づるが如く、かしこより復び千餘の光は出で、彼等を燃やす太陽の定むるところに從ひて、立ちのぼること或は多く、或は少きがごとく見えたりき。

しかして各その處にしづまりしとき、かの飾られたる火によりて、一羽の鷲の頭と頸との表はさるるを我は見き。

果てつらむとなり。

第十八歌

（第五天（火星天）。神の戰士、その五。第五天の諸靈。第六天（木星天）。正義の君主。諸靈のつくれる文字と形象。）

一、「福なる鏡」――カッチァグィイダ。――祝福せられたる諸靈は神の光榮及び神の御心の中に見出さるる凡ての事を反映するを以て斯くは言へる也。――次の「甘きをもて苦きを和げ」しとは、後代の榮譽に關する悅ばしき豫言をもちて流竄その他將來の悲境に關する豫言の苦楚を和げしとなり。

二、「者」――正義に基きてあらゆる非行の仇を報い給ふべき神（羅馬書、一二の一九參照）。

三、「其第二の委」――神の委の反映。ダンテは直接に見しにあらず、ベアトゥリイチェの眼より反射せるを見しなり。

四、「頂より生命を攝りいれ」云々――天國を象徵せる一大樹木のこと。――こは神よりその生を享くるが故に頂によりて生き、新たなる聖徒を得て常に實を結び、且つその祝福は永久に亘るを以て葉の落つることなき也。――次の「第五座」は第五天也。

五、「ジョスエ」――モオセに次ぎて猶太の民の教導者たりき（約書亞記參照）。（以下信仰のた

かしこに畫ける者は、何者によりても導かるるにあらず。己自ら導くのみ。彼こそは巢の形づくる能にその本をなすものなれ。

初めMの上に百合となれるを悅ぶと見えたりし、他の福なる靈等は、少しく動きてかの印を押し終へぬ。

嗚呼、うるはしき星よ、我等の正義かなんぢの飾れる天球の影響なることを、いかなる、いかに多くの寶玉の我等に知らしめしぞ。

この故に我は、汝の動きと汝の能とに初めをなすなる聖意に祈る、汝の光を蔽ふ煙の根源をみそなはし、血と殉教とをもて塞き上げられたる神殿のうちに、賣買のなさるることを今ふたたび憤りたまへよと。

嗚呼我が觀る天上の軍人等よ、惡しき模範にならひて迷はざるなき地上の人々の爲めに汝等祈れかし。

古は劍をもて戰をなす慣ひなりしに、今や慈悲ぶかき父の何人にも惜みたまはざるパンを、ここに又かしこに奪ひとりて戰ふなり。

さあれ、なんぢ、ただ取り消さむ爲めにのみ記す者よ、汝の荒らせる葡萄園の爲めに死にたるピエエトロとパオロとの今尙ほ生けることを思へ。

固より汝は言ふならむ、「ただ獨りにして住むことを好び、また舞一曲の爲めに殉教をさせられたる者に、我はわが願望をかくるに專らなれば、かの漁人もパオロも我の知るところにあらざるなり」と。

めの主なる戰士八名を擧ぐ）

六、「マッカベオ」――「地の極みに至るまで著名なりし」猶太の勇將（マッカベイ前書、二―九）。

七、「カルロ・マアニオとオルランド」――基督教信仰のためサラセン人と戰ひし勇將等（地、三一の註六參照）。

八、「グリエルモ、リノアルド」――カルロ・マアニオの十二天王に屬せし勇士。「ロオランドの歌」に勇名を謳はれたり。殊に、後者は初め阿弗利加に於けるサラセン王の息子にて少年の折に捕はれし者なるが後に基督教に改宗せしなりといふ。

九、「ゴッフレッド公」――ゴッフレッド・ディ・ブウリオネ（一〇六〇年頃――一一〇〇年死）第一十字軍の指導者たりき。

一〇、「ロベルト・グィスカアルド」――地、二八の註六參照。

一一、この一節――カッチァグィイダは今や再び聖徒等の合唱に加はりしなり。

一二、「最終の時」――此歌冒頭六―七行參照。

一三、「奇蹟」――ベアトゥリイチェ。地、二の註一〇參照。

一四、以下四行、――木星天上の光り耀ける諸聖徒等次々に相集りて個々の文字を形成せり。

第十九歌

己がめでたき福祉を享けたのしめる魂等の、もろともに結びて成せる美しき象は、翼をひろげて我が前に現はれぬ。

彼等はいづれも、一の小さき紅玉の、燃えかがやける日光を受けて、それをわが目に反映らしむるごとく見えたりき。

しかして、今わが述べざるべからざるは、聲の傳へしこともなく、墨の記ししこともなく、想像の描きしこともなきものぞ。

そはわれ、嘴の物言ひ、そのいへる聲にて我と我がとの、我等と我等がとの意味なるを見、またこれを聞きたればなり。

さてかの嘴はいふ、「正しく且つ信心ふかきによりて、ここに我は、願望に及ばざることなき榮光にまで上げられたり。

しかして地上には、かしこなる惡しき人々の讃めたたふるのみにして、見習ふことをなさざるごとき我が記念を我は殘しきぬ。」

恰かも多くの爐より單だ一の熱の感得せらるる如く、かの象の多くの愛より單だ一の響きいでたり。

ここに於てか我は直にいふ、「嗚呼永久なる悅びの不斷の花よ、なんぢら、己がすべての香をただ一と我に見えしむる者よ。

願はくは、地上にいかなる食物をも見いでざるによりて、久しく我を

——此處にては四四六頁九—一〇行の最初に見ゆる Diligite（汝等愛せよ）の初めの部分の現はれしことを述べたる也。

一五、「ペガアゼア」——詩神の馬ペガススにより て詩神を表はせり。此の馬その蹄の力により て名高き詩神の泉ヒッポクレエネを湧き出でしめきと（煉、二九の註七參照）。——ダンテは此處に恐らく敍事詩の女神カルリオオペを指せるなるべし。

一六、この一節の羅甸語の意味、——「汝等地を裁く者等よ、正義を愛せよ」（「ソロモンの智慧」第一行の言葉）——商節なる「七を五倍したる」とは此處の羅甸語の總字母數なり。

一七、「金の模樣を打ち出したる銀」——金の模樣は諸々の聖靈、銀は火星の熱と土星の冷氣との中間にありて「柔和なる」星と呼ばれし木星の白きを表せる也。

一八、「一羽の鶯」——鶯は羅馬帝國の表象（煉、三二の註三五參照）にしてダンテが人類の最高目的實現のために主張する地上に行はるべき正義を代表せる也。——四四六頁九—一〇行に見えし羅甸語の最後のMが當時の頭文字Mの形となり、更に「かしこより復び千餘の光」（四四六頁一七行）出でて「各その處にしづまりし」

飢ゑしめたる大なる斷食を、汝の息吹によりて拂ひのぞけよかし。

善く我は知れり、神の正義にして天上なる他の國をその鏡となさば汝等の國もまた面帕を隔ててそれを見ることあらじ。

汝等は、我が聽かましと待ちかまふる心の如何に切なるやを知れり。斯く久しき我が斷食なるかの疑の、何物なるやを汝は知れるなり。」

被物をとられし鷹の其頭を動かし、その翼を鼓ちて、そのねがひを表はし、その威勢を示すが如く、神の恩寵の讃美をもて編み成されたるこの旗章も亦、かの天上に悅樂する者にのみ知らるる歌もて同じ事をなせるを我は見き。

かくてこの旗章はいふ、「宇宙のはてに圓規を廻はし、その內に隱れたるとあらはなるとを、斯くも夥しくわかち定めたまへる者は、彼の言葉の限りなき優越を失ふほどに、彼の力を全宇宙に印刻し得ざりき。

しかして此事は、あらゆる被造物の首なりし第一の慢心者が、光を待たざりし爲め、未熟のまま落ちしによりてたしかめらる。

乃ち、かれに劣れるあらゆる性の、己をもて己を測るところの、て知らぬかの至善を受け容るるに、小きにすぐる器なることも亦明らかならむ。

されば、萬の物に滿ちわたれる聖意の光の、その一ならざるを得ざる我等の視力は、その本來の性として、それ自らにあらはなる物を遙かに越えて、その源を認めずともよきほどに、それほど力强きものな

（同、二〇行）時に血の形、即ち「一羽の鶯の頭と頸と」が表はされし也。

一九、「己自ら導くのみ」云々——諸星の影響下に生命を賦與せらるる一切のものに關する觀念は神より出づ。鶯は謂はゞ木星をばその巢に選びし也。而して今やダンテは一般化することによりて總ての天界をば「巢」と名付けし也。

二〇、「かの印」——かの鶯全體の形也（註一八參照）。

二一、「我等の正義が」云々——地上の正義はその根源をば神より得たり。神が正義に對する反抗の何處に由來せるやを訊ね且つその非行者等を責罰せむことを。——次の「多くの寶玉」とは今は木星天に在る數多の聖徒等を指せるなり。

二二、「汝の光を蔽ふ煙」——正義のはたらきを蔽ひ妨ぐる罪惡、特に貪婪。

二三、「神殿のうち」——敎會の內。馬太傳二一の一二參照。——次に「今ふたたび」云々と言へるは此の事柄に基きてなり。

二四、「パン」——法王は破門を武器として戰ひ且つ人々をして聖晩餐の聖禮にあづかるを得ざらしめき。

二五、「者」——法王はたゞ後に再び取消してその

らず。

されば、汝等の世の受くる視力をもて永久なる正義に入りこまむとするは、肉眼の涙に於けるが如し。

岸邊にては、目はよく底を見るべけれど、沖にいでてはこれを見ることなし。しかもかしこに底なきにあらで、深きによりてかくるるのみ。

曇を知らぬ、朗らかなる天より來るもののほかに光はなし。然り、あるところのものは寧ろ闇なり、肉の陰影またはその毒なり。

なんぢの斯くも屢々問ひ質したる、生ける正義を汝にかくしし隱處は、いまし汝に開かれて足らざるところなし。

汝は言へり、『ある人印度の河岸に生れたり。かしこには基督の事を說く者もなく、讀む者もなく、また書く者もなし。

さて人間の理性の目のとどく限り、彼の願ふところ爲すところみな宜しく、言葉にも行にも犯せる罪なし。

彼は洗禮を受けず、信仰に入らずして死にたり。かかる人を罰ふところの正義は何處にありや。彼のよし信ぜざらむとも、犯せる罪の何處にかある』と。

そもそも汝は何者なれば、尺寸の內に限られたる視力を有ちながら、千里のかなたをさばかむとはするものぞ。

聖書にして若し汝の上にあらずば、實に我と共に穿擊する者に、疑ひを起すことの大なる理由もあらむ。

代金を受けむがためにのみ破門徵戒等の令旨を發布せし也。——此處にはジオヴンニ第廿二世（在位一三一三—三四年）が諷せられしならむ。

三六、「葡萄園」——教會（天、四一四頁一六—一九行參照）。——羅馬にての殉教者聖ピエエトロ聖パオロは今もなほ天國より汝の行ひを見守れり。

三七、以下三行、——汝の答はかくの如くならむ、「我は洗禮者約翰（フィレンツェの金貨の像、地、三〇の註一四參照）に專ら願望をかくるによりピエエトロもパオロもよく知るところにあらず」と。——「舞一曲のために」云々とは、ヘロデ王の娘（サロメ）の舞の犧牲となりて殺されしこと（馬太傳一四の一以下）——「漁人」につきては煉、二二の註一四參照。

第十九歌

（第六天（木星天）。正義の君主、その二。神の正義。似而非基督教徒。）

一、この一節、——鷲を象れる總ての聖靈の聲なれども「我等」と言はずして「我」といへるは正義の一致せる意志および帝國の下に於ける正義の統一を表はせる也。（ギイゼの註に據れば次の如し、——鷲はその中にて一切の人間

嗚呼地上の動物等よ、愚鈍なる心よ。『それ』自らにして善なる第一の意志は、至上の善なる『それ』自らより離れたることなし。

『それ』と相和するにつれて物は正しきなり。造られたる善にして『それ』を己に引き寄するはあらじ。むしろ『それ』こそは輝き出でてかの善に原をなすものなれ。」

鸛の其雛を養ひし後、その巢の上をめぐる如く、また養はれたる雛の鸛を見上ぐるごとく、いと多くの謀議に促されて、かの福なる象は其翼を動かし、さて我は我が眉をあげたり。

舞ひめぐりつつ、かの象は歌をうたひ、またいへり、「わが歌の調の汝に於けるが如く、永久なる審判は汝等人間に解せられざるなり。」

羅馬人をして世界より敬はれしめたる、かの章を尙ほもあらはしながら、聖靈の輝ける焰等のしづまりし後、かの象は復び語りいづ。

「基督が木に架けられたまひし前にも又後にも、彼を信ぜざりし者のこの國に登り來れるは曾つてなし。

されど視よ、基督よ基督よと呼ばはれる人にして、審判の時、基督を知らざる人より遠く基督にはなるるものも多かるべし。

かかる基督徒をエティオピア人は罪に定むべく、その時二の組はわけられて、一は永遠に富み、いま一はとこしへに貧しからむ。

汝等の王達の讒謗ことごとくを錄したるかの書の開かるるを見るとき、ペルシア人の彼等に何をか言ふを得ざるべき。

そこにアルベルトの行爲の中、程なく筆を走らしむるところの事見が統一せらるるところの羅馬の世界帝國の象徵たり。（パッセルマンの註も之と相似たり）〕

二、「鏡」——神がその中に於て特に審判者としての自己を寫し出せる寶座の諸天使（天使の合唱團）を指せる也（天、九の註一三參照）。

三、「我が斷食なるかの疑」——四五〇頁一一—一七行を見よ。

四、「鷹」——煉、一九の註一四參照。

五、「彼の言葉の」云々——神の思想若くは睿智たることばは創造の中に現はされしそれに優ること無限なりといふべし。

六、「第一の慢心者」——魔王ルチイフェロ。煉、一二の註三、地、三四の註四參照。

七、この一節、——神より發するところのもの卽ち啓示の光を他にして光なるものはなし。故に之を缺く時には人は無智の闇の中に在り。此の闇こそは肉の陰影なり、また肉の毒なる罪の陰影なり。

八、この一節、——正義に關する我等の概念は神の內に存する正義の本質の反映に過ぎず。若しもその原像と映像とが相一致せざる時、而も鏡の不完全なる爲めにのみ種々樣々の映像を生ぜしに拘らず恰も原形が誤れるものの如くに非難するは痴愚の沙汰といふべし。

らるべく、その事によりてプラアガの國は荒れはつべし。

一二、そこに、野猪に突かれて死ぬべき者が、贋貨を造りてセンナの邊に

一三、そこに、かの蘇格蘭土人と英吉利人とを物狂はしき渇望に駆り立て、その何れをも己が領土の内にとどまることを得ざらしむるほどの慢心は見らるべし。

曾つて德を知りしことも願ひ求めしこともなきボエエミア人の、及び西班牙人の淫縱と懦弱なる生活とは見らるべし。

一五、ゼルサレムメの跛者の善が一のIをもて記さるるとき、一のMはその惡の記號となりて見らるべし。

アンキイゼがその長き生涯を終へし處なる、かの火の島を治むる者の强慾と怯懦とは見らるべし。

しかも、彼が取るにも足らぬ人物なりしことをさとらせむ爲め、彼の記錄には略字を用ひられて、些の場所に多くの事柄はしるし留めらるべし。

又、あれほどにも卓れたる家柄と二の王冠とを汚したる、彼の叔父及び彼の兄弟の穢き行は、いかなる人の目にも明らかにさるべし。

一九、また、葡萄牙人も諾威人もかの書にて知らるべし。ゼネエチアの貨幣を見て其禍を招くにいたれるラッシア人も亦しかり。

二〇、嗚呼、ウングリアにして若し、この上虐げらるるに甘ずることなくば幸なるかな。ナヴルラにして若し、取りかこめる山々をもて自らを

九、「基督よ基督よ」――馬太傳七の二一に曰く「我を召びて主よ主よと曰もの盡く天國に入るに非ず」云々。――次節に見ゆる「エティオピア人」は異教徒を代表せり。又、「罪に定むべく」に就ては馬太傳一二の四一―二參照。

又、「二の組」といへるに就きては、馬太傳二五の三二以下に「萬國の民をその前に集め羊を牧者の綿羊と山羊とを別つが如く彼等を別ち」云々とあり。

一〇、「かの書」――最終審判の日に開かるる生命の書（默示錄二〇の一二）――次の「ペルシア人」は註九の「エティオピア人」と同樣異教徒を表せり。

（四五一頁終行―この歌の最後まで、正義を行ふべき基督教國の君主等にして却て憎むべき罪惡に墮せし實例をば枚擧せり）

二一、「アルベルト」――皇帝アルベルト第一世（煉、六の註二三參照）一三〇四年ゼンツェスラアオ二世に對する戰に於てボヘミヤの國を荒廢せしめたり。――「程なく筆を走らしむる」と言へる筆は、生命の書に書入れをなす神の筆なり。――ボヘミヤを「プラアガの國」と呼びしは、その首都の名（プラアグ）に因りてなり。

二二、この一節に述べられし者は――佛蘭西の美

よろひなば幸なるかな。

さて人々よ、この事の眞實なる證左として、ニコシアとファマゴスタとが今、ほかの獸等の傍をはなれざる彼等の獸の故に悲み嘆けることを信ぜよかし。」

第二十歌

全世界を照らす者、我等の半球より下りゆきて、いづれの側にも晝の消えさりしとき、前に唯だ彼によりてのみ燃やされたりし天は、忽ち一の光の反射なる多くの光によりて再び自らを目立たしくす。

世界とその導者等との徽章がその糧なる嘴を噤めるとき、我が心に浮び來りしは此のごとき天象の推移なり。

そは、かの諸の生ける光は愈々照りまさりつつ、我が記憶を脱れ去りたるさまざまなる歌をうたひ出でたればなり。

嗚呼、微笑の衣を纏へるめでたき愛よ、ただ聖なる想をのみ吐きたるそれらの笛の中にして、如何に汝の熱烈に見えたりしかな。

第六の光明を飾れるを我が見し、貴き輝かしき寶石の、天使のごときその歌聲をとどめし後、我はかの、岩より岩へと清らかに落ちくだりて其水源の豐なるを示す流の、その囁きを開くと覺えき。

しかして琵琶の頸にて造り成さるる響きの如く、また風琴の孔より

貌王フィリッポ第四世也（煉、七の註一七、一九參照）一三一四年猪狩りの際その乘馬を猪に突かれ自らは落馬して死にきと傳ふ。――彼はフィアンドラとの戰（煉、二〇の註一四參照）の頃軍費調達の窮策として貨幣の質を甚だしく粗惡ならしめきといふ。――「センナの邊」とはセエヌ河畔卽ち廣く佛蘭西の意。

一三、この一節、――英王エドワアド一世（煉、七の註三〇參照）及び二世がワレエス、ブルウス兩雄の指導下にありし蘇格蘭土軍との間に行ひし戰爭を指せり。此の戰爭は殆ど間斷なく十四世紀初頭の二十箇年間を繼續せり。――「物狂はしき渇望」とは領土占有慾なり。

一四、「ボエエミア人」――ゼンツェスラアオ四世（煉、七の註一六參照）。

一五、「西班牙人」――カスティイリア王フェルディナンド四世（在位一二九五―一三一二年）。

一六、「ゼルサレムメの跛者」――プウリア王カルロ二世（煉、七の註二五、同、二〇の註三一參照）。彼は名義上ゼルサレムメの王なりしかば斯く嘲りし也。――「善が一のIをもて」云々とは、羅馬數字にてIは卽ち一、Mは卽ち千、を表せるによりて彼の行狀は善行一に對して惡行千なりとの意なり。

一七、「火の島を治むる者」――シチリア（火の島）

入りこむ風の如く、かの鶯の囁きは、待つまもあらず、さながら穴洞なりしかとも思はるる其頸をぬけてのぼり來ぬ。

かしこにて聲となれるもの、かしこより其嘴をすぎ、言葉の形をとりて出づ。これこそは、わが心に記して待ちゐたりしものなれ。

そは我に言ふ、「我が身の中にして、下界の鶯のよく太陽を見るに堪ふる處は、今心して見守られざるべからず。

そは、わが形をつくりなせる諸の火の中にても、目となりてわれの頭にきらめけるは、位のいと高きものなればなり。

中央に瞳となりてかがやけるは、町より町にかの賈を運びゆきし聖靈の歌手なりき。

今彼は、彼の歌の彼自らの思量より出でたるかぎり、その功德をそれに適はしき報によりて知れり。

一の輪を作りてわが眉となれる五の火の中、わが嘴にいと近きは、かのあはれなる寡婦を、その子の事につきて慰めし者ぞ。

今彼は、このうるはしき生命とその反對の生命とを味ひ見て、甚睿に從はざることの如何に値高きやを知れり。

又、わが言へる圓の高き弧線の處にして彼の次ぎなるは、眞實の悔改めによりて死ぬことを延ばしし者ぞ。

今彼は知れり、適はしき祈の下界にして、今日の事なりしを明日になさむとも、永遠なる審判の變るまじきを。

その次ぎなる者は、善き意志の、惡しき果を結べるをもて、牧者にの王たりしアラアゴナのフェデリイゴ第二世（煉、三の註一二、同、二〇九頁一七—一九行參照）。

一八、「叔父」——前記フェデリイゴ第二世の叔父。アラアゴナのピエエトロ第三世の兄弟にてマイオリカ島のジアコモと稱せられし者。彼は豪贅者フィリッポ（第三世、佛王）と相結びて前記「彼の兄弟」ピエエトロ第三世に對して遠征を起せり。此の醜き兄弟爭ひをば此處に「穢き行」と言ひし也。

一九、「葡萄牙人」——葡萄牙王ディオニシオ（在位一二七九—一三二五年）貪慾なりしとの傳へあれども史實は却つて好評を與へたり。

二〇、「諸威人」——アアコネ第七世（在位一二九九—一三一九年）を指せるなるべし　彼は丁抹との間に幾多の殘忍なる戰爭を行へり。

二一、「ラッシア人」——古代セルビア王國（ラッシアとはその首都ラッサによりて呼ばれし名前）の支配者にて、此處に指されしは一二七五—一三二一年間在位の王ステファアノ・ウロオジオ第二世なるものの如し。——彼はエネエッティアの貨幣に僞せて粗惡の金貨を鑄造せしめきといふ。

二二、「ウングリアにして」云々——匈牙利にては一三〇〇年以後にありても尙王位繼承の紛爭

讓らむためにとて、律法及び我と共に彼自らを希臘人にしき。

今彼は知れり、その善行より出で來りし惡の、たとひ世を滅ぼさむとも、彼自らを害はざるべきことを。

又、低き處の弧線に汝の見るは、グリエルモと云へりし者にして、カルロとフェデリイゴとの生きたるを嘆ける國は、彼のあらぬをなげけるなり。

今彼は、天の正しき王者を愛づるいかばかりなるやを知り、彼の輝かしき姿によりて、なほ其事の證をなしたり。

誤多き下界にして誰かは眞と思ふべき、トロイア人リフェオがこの輪の聖なる光の中の第五なりしを。

今彼は、神の慈寵につきて世の知り得ざる多くの事を知れり。その目の奥底を見分くること能はずとも。」

空を翔び漂へる小さき雲雀の初めに歌へるも、やがて、己自らをよろこばす最終の調のめでたさに、心みち足らひて默すが如く、萬の物を御意の儘になしたまふ、『永遠なる悅び』の印したる象もまた、心みちたらひて默すと見えにき。

しかして、かしこにて我のわが疑に於けるは、玻璃のそれを被ふ色に於けると似たりしかど、この疑は默して待つに堪へず、その重さによりて我が口より、「これらのものは何事ぞや」といふ言葉を出さしめき。この言葉につれて我はまた、大なる喜びの閃めきを見き。

かくてかの祇なる徽章は、愈々その目を燃えかがやかしつつ、いつは絕えざりき。一三一〇年に至りて漸くカルロ・マルテルロの息カルロ・ロベルトが承認を受けたり。

二三、「ナヅルラ」——ナヅルラ王國の嗣妃ジョヅンナ（エンリコ第一世の娘）は美貌王フィリッポの王妃となりしが、死に臨みて（一三〇四年）ナヅルラの王位をその息子ルイイジに讓りしに、彼は後にルイ第十世として（一三一四—一六年）佛蘭西を支配せしを以てナヅルラも之に合併せられたり。天使の鶯は此の事を警戒せる也。

二四、「ニコシアとファマゴスタ」——チプロ島（地、二八の註二二參照）の二つの主なる都。此處にては島全體を指せり。一三〇〇年の頃同島には怯懦にして殘虐なるルウジニアアニの伯爵アルリイゴ第二世が支配しゐて、人民は爲めに塗炭の苦を嘗めきといふ。

第二十歌

（第六天（木星天）。正義の君主、その三。六大明君。異教徒の救濟。）

一、「一の光の反射なる」——當時は恒星も亦太陽よりその光を受くと信じられたりき。（この部分（冒頭四五三頁自終二行目迄）の大意、——太陽が沒して、諸星の現はれ出づるが如く鶯（世界とその導者等との徽章）が語り終り

までも我を驚異のうちにとどめおかざらむとて我に答ふ。

「我が見るところをもてすれば、汝は我が言ふによりて此等の物を信ずれども、その事の由を知れるにあらず。乃ち、信ぜられたるもの尙ほ包みかくされたり。

汝は名稱によりて事物を心得たれども、他人の說き明かすにあらずば、その本義をさとること能はざる者に似たり。

天國[一]は熱烈なる愛によりて、又神意に打ち克つところの生ける望によりて侵略せらる。

しかも人の人を服ふるが如くせず、その打ち克つは、神意の打ち克たれむことをねがふにより、又打ち克たれつつもそれ自らの仁慈をもて打ち克つによりてなり。

汝は天使等の國が、眉の中なる第一の命及び第五の命[二]をもて畫かれたるを見て異めり。

彼等の肉體より出づるとき、彼等は汝の思ふごとく異教徒なりしにあらず、むしろひとり[三]は苦むべき『足』を信ずる、ひとりは苦みし『足』を信ずる、信仰の堅き基督徒なりき。

すなはち、その一人[四]は正しき意志にひき返すことのたき地獄より其骨に歸りき。しかしてこは生ける望の報なりき。

この[五]生ける望こそは、彼の更生りて、その意志の改まることを得む爲め神にささげられたる諸の祈に、その力を添へし物なれ。

わがいへる榮ある魂は、肉體に歸りて、その處にあることた少だ時し時そを形づくれる諸靈は一段と輝きまさり我が記憶する能はざりしさまざまの靈妙なる天使の歌を合唱し始めたり。」

二、「聖靈の歌手」――イズラエレ王ダギイデ（地、四の註一七、煉、一〇の註一四―一八參照）――「聖靈の」と言へるは王が神の靈感に依りて歌ひしを以てなり。

三、「彼自らの思量」云々――ダギイデの歌は前記の靈感と王自らの思量（自由意志）との兩部分より成れり。故に王の功德として報を受くべきは後者にして前者にあらずとなり。

四、「慰めし者」――皇帝トライアアノ（煉、一〇の註二〇、二一參照）――天國に入るより前に彼は地獄にありき。

五、「死ぬことを延ばしし者」――猶太の王ヒゼキヤ。――その病みて將に死なむとせし時心より懺悔して神の冥護を祈りしに依り惠まれて更に十五年の齡を加へられきといふ（列王紀略下、二〇の一以下、以賽亞書、三八の一以下）。

六、「その次なる者」――皇帝コンスタンティイノ第一世（地、一九の註二八、地、二七の註二九、煉、三二の註二八參照）―「律法及び我」とは法律及び鷲章旗のことにてコンスタンティイノ大帝が法王に羅馬を讓りて帝都をコンスタンティノオプルに移し謂はば之等のもの並びに彼自身を希臘のものとせしを指摘せる也。――ダンテはこれを以て世界歷史中の最大不幸事と見做し地上の權能は皇帝の棄つべからず、法王の受くべからざるものとなせり（帝政論、三の一〇）。

七、「グリエルモ」――シチイリア及びプウリイの王グリエルモ第二世（在位一一六六―一一八九年）その善政によりて「善王」の綽名あり。――「カルロとフェデリイゴ」に就きては、前者は天、一九の註一六、後者は同、一七參照。

八、「トロイア人リフェオ」――トロイア陷落の際戰歿せしトロイアの勇士。「エエネアの歌」二の四二六及二七に曰く、「而してリフェオ艷る、こはトロイア人の中にて最も正しき者にして且つ正義の最も忠實なる守護者なり」と。――此のギルジリオの言葉に基きてダンテは神がリフェオに約束の基督を啓示し給へりとの構想を立てし也。

九、「『永遠なる悅び』の印したる象」――鷲。鷲は神の意志の模寫、また神の正義の化身なればかかく言へり（天、三八七頁終二行參照）。

一〇、「わが疑」――基督降誕以前の人なる皇帝トライアノとリフェオとが如何なればかく天國

なりしかど、彼を扶くることを得たりし『者』を信じき。

しかして信じつつも、眞實なる愛の火に燃え立てりしかば、その第二の死にあたりて此悅びを享くるに足りしなり。

いま一人[一一]は、造られし物の未だ曾つて其奧底を見究めしこともなきほどに、いと深き泉より流れいづる恩惠により、かの下界にして彼のすべての愛着を正義にむけたりき。

されば恩惠はめくみに加はり、神は彼の目を開きて我等の未來の贖を見しめき。かくて彼はその贖を信じて、その後もはや異教の惡しき臭を忍ばず、また其事につきてあやまれる人々を責めたりき。

かの車の右の輪のほとりに汝の見たる三人の淑女[一二]は、洗禮の行はるるに先だつこと千年餘の昔にして、既に彼のための洗禮となりたりき。

嗚呼永遠なる豫定[一九]よ、第一の原因を見究めざる人々の目に、汝の根のいかに遠くも離れたるかな。

また汝等人間よ、輕々しく事を斷ずるなかれ。神を見るところの我等も、尙ほ且つ總ての選ばれし者を知れるにあらず。

しかも此の如き短所は我等によろこばし。そは、神の思召すところを我等もまた欲ふと云ふ、この福の中に我等の福は全うせらるればなり。」

斯く我が短見を醫さむ爲め、めでたき藥はかの神々しき象によりて我に與へられき。

しかして、善き琵琶彈きが善き歌手につれて絃を震はせ、これによりて歌の面白味を加ふる如く、今憶ひ浮ぶれば、鷲の物いへりし間我は、二の光が言葉のままに搖れ動きて、さながら双の目の瞬きをあはすにも似たるを見き。

第二十一歌

既に我が目は復びわが淑女の顏に注がれ、目と共に意も注がれて、あらゆる他の注意よりひきはなされき。

彼女は微笑まずして我にいふ、「我もし微笑まば、汝はセメエレ[一]が灰になりしときの如くになるべし。

これ、永遠なる宮殿の階を高くのぼるにつれて、汝の見たる如く、愈々燃えさかりゆく我が美しさは、これを和らぐるもの若しなくば、餘りにも強く輝きまさり、ために人間なる汝の力のそれに擊たれて、雷に碎かれたる小枝のごとくにもなるべければなり。

我等はいま第七の光明の中にあり。この光明は燃えたる獅子の胸の下にして、彼の強さと一になりて下方を照らせるものぞ。

汝の心をもて汝の目のあとを追ひゆき、汝の目を鏡となして、そこにて汝にあらはなるべき傷[三]を映し見よ。」

他なる心遣にわが移りしとき、かの女の[四]褶なる姿をわが目のいかばかり悅びしやを知るほどの者は、かなたとこなたとを比べ合せて知りたらむ、わが天上の案內者に聽き從ふことの、いかばかり我に樂しかりしやを。

世界のまはりを廻りつつ、その名高き指導者[五]——その治下にはいかなる邪事も滅びたりき——の名を負へる水晶體の內に、一の梯を我は見き。そは日の光に照らさるる黃金の色にして、我が目の及ばざりしほどに高く起ちたりき。

我はまた、その段々を下れる輝きを見しが、その數の夥しきによりて、天上に現るるあらゆる光の、かしこより注がれたりしかと思ひしほどなり。

自らなる習性によりて、鴉共晝の初めに、その冷き羽根を暖めむ爲め立ち騷ぎ、やがて或るものは去りゆきて歸らず、或るものはいでたちし處に立ちむかひ、また或るものは居殘りて翔びめぐる。

いま、もろともに來れるかの焰も、とある段の上にありしや否や、またその如く我に見えたりき。

しかして、我等にいと近く止まれる光のあまりにもかがやかしかりしかば、我はわが心の內にいふ。

「我はよく、汝の我に示せる愛を見る。されど、何時いかに物言ひ、また默すべきかの、指圖をわが仰ぐべき彼女は口を噤みたり。乃ち我は、問はまほしきなれど問はずしてありなむ。」

このとき彼女は、萬の物を見たまふ物の目によりて、我が默せるゆ

に居ることを得るや、天國には唯基督を信ぜし者のみ在ることを得べきに（天、四五一頁一三—一四行參照）——「玻璃のそれを被ふ色に於ける」とは我が此の疑問はガラスにて包まれし色彩の透きて見ゆる如く諸聖徒等には問はずして明瞭に看取せられしとの意也。

二、この一節、——馬太傳、一一の一二參照。即ち曰く、「バプテスマのヨハネの時より今に至るまで人々勵みて天國を取んとす勵みたる者は之を取れり」——その取るは「愛」と「望」とに依るなり。

三、「第一の命及び第五の命」——前者はトライアアノ、後者はリフェオ。

四、「ひとりは」云々——リフェオは基督降誕以前にありてその贖罪を（四五七頁八行參照）、トライアアノは贖罪のため十字架に釘けられし後の基督を、共に堅く信ぜし也（天、三二の註九並別言參照）。

五、「その一人」——皇帝トライアアノ。——「生ける望」とは大法王グレゴオリオのそれ。即ち、神は必ず祈りを聽き給ふとの堅き信望（煉一〇の註二一參照）。

六、この一節の大意、——一旦地獄に墮ちし者には改悔も正しき意志もある能はず。故に大法王グレゴオリオ（「生ける望」）は其希望にて固められし熱烈なる祈りにより、優れたる人トライアアノの魂を地獄より呼び戻して、彼が尙地上に在る中にその意志を正義に轉じ、その基督に對する信仰を公言せしめむと盡力せし也（次頁三行目迄ダンテは三神德「信、望、愛」の說明をなせり）。

七、「いま一人」——リフェオ。（リフェオの救濟は悉くダンテの創意に出でたり。但し、野蠻人と雖も理性に聽從する時は神恩これに臨みて救濟の道にひき入れ給ふとは基督敎會に於ける當時の敎なりき）。

八、「三人の淑女」——信、望、愛の表象（煉二九の註三四參照）。

九、「千年餘の昔」——當時の記錄に據ればトロイア落城は紀元前一一八四年のことなりしといふ。——斯る以前に（即ち洗禮の儀式未だ定らざる前に）信、望、愛の三神德が彼のために洗禮の代りをなし、依りて彼を天國に入るを得る者となせしとなり。

一〇、「永遠なる豫定」——人間救濟に關する神の豫定。——「第一の原因」は神。

一一、「二の光」——トライアアノとリフェオ。

第二十一歌＝（第七天（土星天）。聖觀者、その一。天の梯子。聖ピエエトロ・ダミアアノ。）

ゐを見ぬき、「汝の願ひ求むるところを陳べよ」と我にいふ。

すなはち我はいふ、「我自らの功德は我をして汝の答を望ましむるに足らず。されど問ふことを我にゆるす彼女の故に請ひ問はむ。

嗚呼、汝自らの悅の內にかくれたる福なる生命よ、いかなれば汝の斯くも我に近く置かれたるやを我に知らせよ。

また告げよかし、下なる他の諸の天にて、敬虔に響き渡れる天國のめでたき音樂の、いかなればこの天球にて聞かれざるやを。」

かの光は我に答へていふ、「汝の耳は汝の目の如く人間のものなれば、ベアトゥリイチェが微笑まざると同じ理にて此處に歌なきなり。

聖なる梯の段々をこの處まで我が下り來れるは、ただ我が言葉をもて、また我を包める光をもて、汝を歡待さむ爲めぞ。

他にまさりて我が急ぎしも、愛のまさりし爲めならず。焰の汝に示せる如く、相讓らざる、また立ちまされる愛のかしこにありて燃えたればなり。

但だ、我等をば、世界を治めたまふ御周量の敏き僕となすなる高き慈愛の、汝の見る如く、役々をここに割りあてたまふなれ。」

我はいふ、「嗚呼聖なる燈よ、我よく知れり、この宮廷にては、自由なる愛にしてあらば、永久なる攝理に從ふに足らざるもの なきことを。

されど、何故なれば汝の侶等をさし措きて、ただ汝のみ豫め定めら

一、「セメエレ」――バッキュスの母なるセメエレはジュノネに誑かされてジョオヱ神を見んと欲せしため、その電光に擊たれて燒死せしといふ（オヰディオ、「メタモルフォオシ」三の二五三以下。地、三〇の註一參照）。

二、この一節、――第七天なる土星が獅子宮中にありて冷き前者の光（煉、一九の註一參照）と熱き後者の光と相結合して下方を照せり（之に依りて知らるる如く土星は一三〇〇年の春には獅子宮中に見えし也）――かく冷熱相調和せるを以てその影響溫和なりと言ひ、又一說には、土星は冷かなるを以て人を冷靜ならしめ遂にこれを誤想に導く也ともいふ。

三、「そこにて」――土星にて。

四、以下四行の大意、――ベアトゥリイチェの命に順ふは、ダンテにとりては、彼女の美しき姿に眺め入るに優りて心樂しとなり。――命に順ふは活動を意味し眺め入るは誤想を表はせるなるべし。（煉、二七の註一三、一四、一五參照）

五、「名高き指導者」――サトゥルノ神（その名によりて土星はサトゥルノと呼ばる）神話に名高き黃金時代を支配せし者（地、一四の註二七、二九、三〇、煉、三二五頁九行參照）――次の「水晶體」とは土星のこと也。

れて此職にあたれるや、これ我が辨へがたく思ふところなり。」

わが最終の言葉へ來りしにさきだちて、はやくもかの光は、その中程を軸となして疾き磨石の如くめぐりき。

かくてその內にありし愛は答へていふ、「我を包める此物を貫きて、神聖なる一の光は我が上に射し來り、その力はわが視力と一になりて、我を我自らよりも遙かに高くあげ、我をして光の出づる處なる『至上の本質』を見ることを得しむ。

これより來る悅びぞ我を燃え立たすなる。それは我が目の明らかなるをいたすにつれて、わが焰もまた明らかになりまさればなり。

されど、天上にありていと明らけきかの魂も、いと確く神を見守れるかのセラフィイノも、汝の要望を足はすこと能はず。

そは、汝の求むるものは永遠なる制の淵の奧深きところにありて、すべての造られし物の目より懸けはなれたればなり。

なんぢ、人間の世に歸らむときはこれを携へゆき、世の人をしてもはや斯かる標的に寄り近づかむと思ひ立つことなからしめよ。

ここにして照りかがやける心も、地上にありては打ちけぶれり。されば思へ、天上に受け容れられし者にさへ爲しがたき事を、いかでか下界にある者の爲し得べきぞ。」

その言葉の我を制へたれば、我はこの問をすて去り、ただ控目に、その誰なりしやをそれにたづねたり。

「伊太利の二の岸の間にして、汝の鄕土より餘り遠からぬ處に、雷の

六、「一の梯」――ヤコブの金梯なり。創世記、二八の一〇―一二に曰く、「玆にヤコブ、ベエルシバより出でたちてハランの方におもむきけるが、一處にいたれる時日暮れたれば卽ち其處に宿り其處の石をとり枕となして其處に臥して寢ねたり。時に彼夢みて梯の地にたちゐて其巔の天に達れるを見又神の使者の其にのぼりくだりするを見たり」云々。又、天、四六五頁終行參照。

七、以下二節、――ダンテの心に次の二つの疑問起れり、――一、如何なれば此の靈のみ特に彼に近く置かれたるか。二、下なる他の諸天にて聞くを得たるめでたき音樂が如何なれば此の天にては聞かれざるか。

八、以下二節、――右の答。先づ第二問より答ふ、――先きにベアトゥリイチェが微笑を差控へしは未だ人間なるダンテが到底その絕美に堪へ得ざるべきに因りてなりき（冒頭四行）音樂の聞えざるも同樣にそがダンテの耳に到底堪へ得ざるべきに因りて也（天、三六八頁一三―一四行、同、七の冒頭四行、同、三九一頁一八―一九行等參照）――次に第一問に應へて、此の靈が梯を下りて來りしは神の聖旨に依るものにして特に彼の愛情が他の諸靈よりも深しといふ如き意味にあらずとなり。

轟きを遙かなる下にきくほどにも、高く聳ゆる岩ありて一の山脊を成したり。

カアトリア[一三]と呼ばるるその山脊の下には、一宇の僧院ありてただ禮拜の爲めにのみ用ひらるる慣なりき。」

かの者は三度我に語りて先づ斯くいひ、やがて又言葉をつづけていふ、「かしこにて我は、心ゆるがず神に仕ふる者となり、橄欖の液の食物のみにして、默想のうちに滿ち足らひつつ、暑さ寒さをも易らかに過ごすを常としき。

かの僧院は此等の天に豐かなる收穫を齎らす慣なりしに、今やまことに虛しくなりはてたれば、程なくその事の顯はれざるべし。

かしこにて我はピエエトロ・ダミアアノ[一四]なりき。罪人ピエエトロと云へりしは、アドリアティコの岸なる『我等の淑女』[一五]の家にありしときの事なり。

わが餘命のいくばくもなかりしころ、請ひ求められ强ひられて我は、かの惡しきより愈々惡しきに移されたる僧帽を被りき。

ケバ[一六]の來りしとき、また聖靈の大なる器の來りしときは、瘦せて、素足にして、いかなる宿の食物をもくらへり。

然るに沉き代の牧者等には、いと重苦しき彼等を、かなたこなたより支ふる者、導く者のあることを必要とし、また背後より裳裾をかかぐる者を必要とせり。

九、「豫め定められて」云々――先きにダンテは天國に入るや否やピッカルダより天國の諸靈を充せる愛が彼等の意志をば神の意志と一つになすことを學びたり（天、三六六頁二行―次頁八行迄）されど豫定の問題に關しては、之を木星天に於て見、また之に就きて諸靈の驚と談話せし以來愈々强く彼の心を捉へしも尙依然として一の疑惑たり。――その答に就きては四六一頁一二―一三行參照。

一〇、「磨石の如くめぐりき」――大いなる喜びをあらはせし也。

一一、「セラフィイノ」――天、四の註四參照

一二、「伊太利の二の岸」――アドリア海とチルレエノ海（地中海）との岸。――次の「一の山背」とは中央アペニン山脈。

一三、「カアトリア」――中央アペニン山脈中最高峯の一。その北方の山腹に聖ロムアルド（天、二二の註八參照）の弟子ルドルフの開基にかかるカマルドリ派の僧院サンタ・クロオチェ・ア・フォンテ・アエルラアナ在り。――ダンテは一三一四年の頃此僧院に足を止め遙に鄕土の山水を望んで懷鄕の念に堪へざりしと傳ふ。

一四、「ピエエトロ・ダミアアノ」――一〇〇七年ラヱンナに生る。その家柄は良かりしも貧乏にて子澤山の家庭の末弟なりき。母にはない

彼等は其表衣をもて乘馬を覆ふ。すなはち、一枚の皮の下に二匹の獸のゆくなり。嗚呼、これほどの事をも忍べるは如何なる忍耐ぞ。」

これらの言葉をききて、更に多くの焰の段々を下りつつ、めぐりつつ、その廻る度毎に愈々美しくなりまされるを我は見き。

彼等は此者のまはりに來りて止り、この世にてはたとへつべき物もなきほどなる、いと聲高き叫びをあげにき。

されど、その雷に轟倒されたる我は、その何を謂へりしやを知らざりき。

第二十二歌

驚愕のあまりに、我はわが案內者にふりかへりき。その狀あだかも、事ある毎に、己がいと賴もしく思へる處に馳せかへる小兒のごとくなりき。

彼女は、色靑ざめて息切のせる己が子に、いつも彼の心を落ちつかす聲音をもて、直に力づくるなる母親の如く我にいふ。

「汝は汝が天上にあることを知らざるや。天上は悉く聖にして、ここに爲さるる程のもの、皆赤誠の情より來ることを知らざるや。

かの叫びの斯くまでに汝を動かしたるなれば、歌とわが微笑との如何に汝を變へたるべきかを、今や汝は想ひ見ることを得む。

がしろにせられ、長兄よりは酷使せられて豚飼ひを命ぜられる等悲慘なる境涯にありしも幸ひにして次兄ダミアアノの篤き愛情に守られて諸學をも修め無事に成長するを得たり。此の恩に感じて彼はダミアアノの名を己が名に加へしなりといふ。早く既に博學の名を得たりしも、カマルドリ派の隱遁生活に心ひかれ世を避けてサンタ・クロオチェ・ア・フォンテ・アエルラアナの僧院に入り、人に感激を與ふる範例によりて嚴格なる訓育を始め、間もなく僧院長の位に上れり。彼は熱心に僧侶の世俗化に反對して新しき隱者僧院の設立者として大なる成功ををさめしも、屢〻法王より重要任務を托せられ、殊に一〇五八年には法王ステファアノ九世のために、その意志に反してのみならず破門の脅迫を以てして、オスティアの僧正兼カルディナアレに任命せられたり（四六二頁一六行、「僧帽を被りき」）。されど常にカアトリアの隱棲を樂しみて此處に引返せり。彼は一〇七二年此種の法王のための旅行中ファエンツァにて客死せり。――「罪人ピエエトロ」とは彼が自ら謙遜して呼びし名前にてフォンテ・アエルラアナ僧院にては此の二つの名前を共に用ゐしといふ。

一五、「『我等の淑女』の家」――ラヱンナの北方コ

汝若し、かの叫びの中なる祈りをさとりたらむには、汝が死ぬ前に見るべき刑罰は、既に汝に知られたるべし。

この天上にありては、その劍の切るに急ぐこともなく遲るることもなし。ただ、或は願ひ求めつつ、或は恐れつつ待てる者に、これあるが如く見ゆるのみ。

されど、いま汝は他の者等をかへりみよ。若し我がいふ如く汝の目を轉らさば、汝は多くの名高き魂等を見るべければなり。」

彼女の意にまかせて我はわが目を向け、一百の小さき球體ありて、互に照り交はしつつ、諸共に愈々美しくなれるを見ぬ。

我はあだかも、厚顏しきに過ぎむことを恐れて、願望の動きを衷に抑へ、敢て問はざらむとする人の如く立ちゐたりき。

さてかの眞珠の中のいと大なる、いと輝かしきもの、それ自らの事に關はろ我が願ひを滿ち足らはせむとて進み出でたり。

しかしてその内に物いへるを我は聞く、「汝若し我がなす如く、我等の間に燃ゆる仁愛を見ることを得たりしならば、汝の思ひは憚らず打ち明されたるべし。

とまれ、汝が待つことによりて、汝の高き目的をおくらざらむ爲め、我は汝の斯く差し控へて、敢へて述べざる思ひにても答をなさむ。

山腹にカアシイノのあるかの山には、そのかみ其巔を多くの謬り迷へる人々訪れき。

マッキオ附近なる聖マリア・ポムポオザ僧院なり。ピエエトロは嘗つてアエルラアナの僧院長の命により二箇年間此處に滯在せしことあり。

一六、「ケパ」――使徒ペテロ。約翰傳一の四二に曰く、「イエス視て之に曰けるは爾はヨナの子シモンなり爾はケパと稱へらるべしケパを譯ればペテロ（巖）なり」――「聖靈の大なる器」は使徒パオロ。地、二の註八參照。

一七、「二匹の獸」――馬と僧侶と。

第二十二歌

（第七天（土星天）。瞑想者、その二。聖ベネディット。第八天（恒星天）。凱旋の諸聖。七星と地球。）

一、「歌とわが微笑」――前者につきては天、四五八頁第二十一歌の三行以下、同、四六〇頁七行並二一の註八參照。

二、「刑罰」――此處に教會に對する一定の神罰に關する暗示を探し求むるは無益の業なるべし。之も亦神曲全體を貫ける或る救濟者又は審判者に對する一般的期待に過ぎずと見るを得べし（ペッセルマン註）

三、この一節、――神罰は決して時を誤たず。ただ之を求むる者（他人に下らむことを）には遲く、之を恐るる者（己が身の上に下らむことを）には速しと思はるるのみ。

しかして、我等を斯く高く引きあぐる眞實を地上に齎らしし『彼』の名を、はじめてかの山に傳へしは我なり。

また大なる恩寵の我が上にかがやきたれば、我は周圍の村々をして、世を惑はしし異端の禮拜より脫れしめき。

これらの他なる火はいづれも皆、聖なる花と果實とを生ずるかの熱に燃やされたる、默想好きの人々なりき。

ここにはマッカリオあり。ここにはロムアルドあり。ここには、足を僧院の内にとどめて、その心の搖ぐことなかりし我が兄弟達あり。」

さて我は彼に言ふ、「汝が我と語りて示すところの愛着と、あらゆる汝の炎熱にわが見て認むる溫き表情とは、わが信賴を增大せしめ、そのさまあだかも太陽の薔薇を、力の限り花咲かしむるが如くなり。

されば我は汝に請ふ。父よ、汝われに知らせよかし、わがよく大なる恩寵を受けて、汝のあらはなる貌を見るを得べきや否やを。」

これをききて彼はいふ、「兄弟よ、汝の高き願望は最後の球體に於て滿たさるべし。そは我自らの願望も他の總ての人々の願望も滿たさるるところぞ。

かしこにては如何なる願望も具足し、圓熟し、完成せざることなし。ただかの球體に於てのみ、各部はその常にありし處にあり。

そは場所を占むるにもあらず、軸を有するにもあらざればなり。乃ち、われらの樹のそこに到るや、そは汝の目より消え去らむ。

その頂の高くかしこにとどくを族長ジァコッペの見し時、そは夥しき

四、「我」――聖ベネデット（ベネディクト）ベネディクト派教團の創始者にして且つ全西歐の僧侶制度の建設者たり。紀元四八〇年ウムブリア州なるヌルジテ（現今のノルチア）にて高貴なる家柄に生れ、後羅馬にて七自由科の教授を受けしも、宗教的熱情に驅られて羅馬の東方サビイネの山中なるスビアアコの岩窟内に遁れ數多の弟子共を集めて後に十二の僧院を起せり。五一五年に彼は教團の規律を草せしが、そは貞潔、清貧、從順の要求に嚴なりしため初めの程は團員の反對敵視に遇ひしも後にはすべての僧侶制度の準繩とせらるるに至りぬ。五二九年此處を出でて南方へ赴きカアシイノの上なる山に名高きベネディクト派の本山を創建せしも五四三年に死せり。

五、「カアシイノ」――同名の山腹にある小さき町の名（羅馬とナポリとの間にあり）――「そのかみ其巔を」云々とは、此處にアポルロの神殿ありて異教的信仰の中心をなせしことを指せり（聖ベネデットは此の神殿を毀ちてその跡に僧院を建てし也）。

六、「花と果實」――思想と行爲。――それを「生ずるかの熱」とは神に對する愛也。

七、「マッカリオ」――聖マッカリオ。埃及アレキサンドリアの人にて四〇四年に死せり。聖ア

天使を載せて彼にあらはれしなりき。
然るに今や、それに登らむとて地より足をあぐる者はなし。わが制規はいたづらに殘りて紙反古を造るのみ。
かつて僧房なりし障壁は巣窟となり、僧衣は惡しき穀粉の滿ちたる袋なり。
[二]さあれ、いかに酷だしき高利貸とても神の御旨に違ふこと、あれほどにも僧等の心を狂はしむるかの收穫には及ばざるなり。
そは、何にてもあれ教會の貯ふる物は、みな神の名によりて求むる人々の物にして、僧等の親類緣者、または、それよりも善からぬ他の者等の物にあらざればなり。
人間の肉の弱さは、地上にして始められたる善き事も、樫の芽生てより實を結ぶに至るまでを保たざるはどのものぞ。
[三]ピエエトロは金もなく銀もなくして、我は祈をもて、斷食をもて、またフランチェスコは身を卑しうして其教團をはじめき。
汝若し、いづれもの濫觴をさぐり、次ぎにまた、その何處へ迷ひ入りしるやを究めなば、汝はよく、白きの黑きに變りたるを見ることを得む。
[三]さあれ、神の御旨のままにジョルダアノの逆にながれ、紅海の水の逃げ走りしは、ここに救ひを見むよりも、更に不可思議の事に思はれしなるべし。」
斯く彼は我に言ひてのち、その仲間の處に引き返し、その仲間は互

ントニオの弟子にして、西方に於けるベネデットと同じく東方にて僧院の規律を定め數多の隱遁者を統べたりといふ。
八、「ロムアルド」――聖ロムアルド（一〇二七年死）。ラヴェンナの貴族オネスティ家に生れしが幼時その父が決鬪にて相手を殺せし光景を目のあたり見しより大いに心を動かされてベネデット派の教團に入り、後此の派の法規を改革して新たに名高きカマルドリ派を起せり（一〇一二年）。尙、煉、五の註一六參照。
九、「最後の球體」――エムピレオの天、卽ち時間空間を超越せる永遠なる靜謐の天界。こは諸聖徒の座所たり（四六五頁一九―二〇行參照）此處にてダンテが聖ベネデットの姿を見しこと後に見ゆ（天、五一六頁六行目參照）。
一〇、「族長ジァコッペ」――天、二一の註六參照。
二、以下二節、――聖者は今寺院收入の惡用を、卽ち僧侶がそれを貧者に施すにあらずして親類妾婦等に與ふることを非難せる也（地、五五頁一―五行參照）。
三、「ピエエトロ」――使徒ペテロ。「金もなく銀もなくして」とは使徒行傳三の一以下に見ゆる彼の言葉に據れる也。――「フランチェスコ」につきては天、第十一歌參照。
三、この一節、――神は古に成せし奇蹟よりも

に相近づきぬ。かくて旋風の如く總てのもの昇り集まれり。
うるはしき淑女はただ一の合圖をもて我を促し、彼等のあとよりかの梯をのぼらしめき。かくも彼女の能の我が自然の性に打ち克ちしなり。
されど、自然に從ひて人の昇降するこの下界には、我が翼にくらぶべきほどの速き動きのありしことなし。
讀者よ、わがかの信心ふかき凱歌（その爲めに我は、屢々わが罪をなげき、わが胸を打つ）に引き返すを得むことの、祈りにかけて我は言ふ。汝は、わがかの金牛につづく天宮を見てその内に入りし如く、それほど速くは、汝の指を火に入れて引き出すことをなざりき。
[一五]嗚呼、榮光の星よ、嗚呼大なる能を孕める光よ、わが才のいかなるものにてもあれ、悉く皆かの能より來れることを我は承認す。
わがはじめてトスカナの風にあたりしとき、あらゆる人間の命の父なる者は、[一六]汝等と共に生れ出で、汝等と共に隱れつつありき。
やがて、恩寵をうけて、汝をめぐる高き天球の内にわが入りしとき、汝の領域は我にあてがはれき。
今わが魂は、そがそれを引き寄する難所をば、[一七]よく越え得るにいたらむことの爲め、切に汝に歎き願ふ。
ベアトゥリイチェは口を開きていふ、「汝は汝の目を明かにし銳くせざるべからざるほどに、終極の救に近づきたり。
されば、汝のそれに進み入るにさきだちて、下の方をかへりみ眺め、

遙かに容易に教會の腐敗を矯正すべしと也。「ジョルダアノ」云々に關しては、約書亞記三の一五に、收穫の頃には絶えずその岸に溢るるヨルダン（ジョルダアノ）川が契約の櫃を舁げる祭司等が之を渡らむとするや水遠き處まで潤れ彼等直ちに渡ることを得たりといふこと記されたり。又、「紅海の水」云々につきては煉、二六九頁一三行、同、二八、の註一七參照。
一四、「我が自然の性」――人性。―ダンテは未だ肉體を離れざりしもベアトゥリイチェの力によりて遠かに昇り行きし也。
一五、以下八行、――ダンテは自己と双兒宮との深き因緣を語りて目下の詩作に對する助力を乞へり。
一六、「父なる者」――太陽。――ダンテの生れし時太陽は双兒宮中に在りしといふ。而して一二六五年に於ける天界の斯る位置は五月十四日より六月十三日までなりき。
一七、「難所」――天國上昇を歌ふべき神曲爾餘の部分、卽ち就中崇高にして詩作に困難なる部分也。
一八、「凱旋の群衆」――基督の凱旋に加はる軍勢（天、四六九頁自終五行目以下）
一九、「いと値なし」――地球は宇宙の最も低きと

いかに大なる世界を我が既に汝の足の下に置きしやを見よかし。
こは、よろこばしげに此圓き精氣の中をわけ來たる凱旋の群衆へ、汝の心の極まれる歡びの姿をあらはさむ爲めぞ。」
我はふりかへりて七の球體のいづれもを眺めやり、また此地球を見て、その卑しき姿の故に微笑めり。
此地球をいと値なしと思ひなすをば、いよ善き事に我は思ふなり。しかして心を他の物にむくる人は、まことに正しといはるるを得む。
我はラアトナの女を見しが、そはさきに、彼女の粗なると密なるとを我に信ぜしめたる原因の、かの陰影なくして燃えたりき。
イペリオネよ、ここにて我は汝の子の姿に堪へき。我はまた、マイアとディオネとが彼の周圍に、彼に近く動くを見き。
次ぎにジョオヱが、その父とその子との間にありて和らげるを見、次ぎに又、彼等が位置を變ふる次第を明らかにしき。
しかして七の星は悉く皆、いかに彼等の大なるやを、いかに彼等の速きやを、いかに彼等の住所の相隔たれるやを我に示しき。
わがかの永遠なる双生兒と共にめぐれりし間に、人々をして斯くも猛からしむる小さき打穀場は、その山々よりその河の口にいたるまで悉く我に現れき。
かくて我は、かの美しき目をふりかへり見き。

ころに（愚昧と罪惡と不幸とに汚れて）在ればなるべし。――「心を他の物にむくる」とは天界の事物に向くる也。
二〇、「ラアトナの女」――月（煉、二〇の註四九參照）――「かの陰影なくして」と言へるわけは、月の明暗はその本來の力と月天の天使の力と相合して定まるが故に此の天使の力の及ぶ部分たる地球に面する側にのみ斑點ありて彼が上よりの力を受くる部分たる地球に面せざる側には斑點なき也。
二一、「イペリオネ」――巨人ヒュペリオン。彼は太陽神ヘリオスの父なりと考へられき。
二二、「マイアとディオネ」――前者はヱネレ（金星）の、後者はメルクリオ（水星）の母なり。今は之等の名前にて夫々の星を指せる也。
二三、「ジョオヱ」――木星。――「その父」はサトゥルノ（土星）、「その子」はマルテ（火星）なり。
二四、「位置を變ふる次第」――火星、木星、土星の三つが或る時は太陽に近く、或る時は之に遠く見ゆる理由。
二五、この一節、――ダンテは尙双兒宮中に在し間に人間の淺間しくも爭ひつづくる地球の有樣をば明細に眺望看取せりとなり。――「打穀場」とは人間の世界のことなり。蝸牛角上に名利を爭へるを以て斯く言へるなるべし。

第二十三歌

我等に物のかくさるる終夜を、慕はしき木の葉の間に、可愛ゆき雛共の巣に休みゐたりし鳥は、雛共の見まほしき面を見むとて、又彼等に食らはしむる物を見出でむ――その爲めの激しき勞苦は彼女にたのし――とて、時のいたるを待ちかねて梢にいそぎ、夜の明け渡るをのみ打ち守りつつ、燃えさかる情をもて太陽を待つ。
あだかもその如く、身を樹てて待ちわびゐたりし我が淑女は、日脚のいといと遲く見ゆる處に向へり。
乃ち、彼女の現なく思ひ入れるを見て、我は願のうちに物足らなさを覺えながら、尙且つ望のうちに滿ちたらへる人の如くになりき。
されど、かれとこれと二の時の間はいくばくもなかりき。斯く我がいへるは、われの待ちし時と、天の愈々輝きいづるをわが見し時との事なり。
さてベアトゥリイチェは言ふ、「見よ、基督の凱旋の軍勢を、また此等の天球の運行によりて收められし總ての實を。」
彼女の顏はことごとく燃えたてりと我に見え、その目はわが記述の筆をなげうたざるを得ざるほど悅びに滿ちみちたりき。
天上の隅々をも殘るところなく彩る永遠のニンフェ等にまじりて、十

第二十三歌＝（第八天（恒星天）。凱旋の諸聖、基督の凱旋。）

一、「處」――子午線（煉、三三の註二三參照）。――太陽南中せる時は東天又は西天に在る時よりもその進行遲く見ゆ（ケェリイ）。
二、「基督の凱旋の軍勢」――基督の受難によりて救濟せられし數多の聖徒等。――「總ての實」とは之等凱旋の諸靈也。諸天の善き影響の下に德に進み救ひに入りし者達なれば之をその果實と呼びし也。
三、「ニンフェ等」――諸星（煉、三四〇頁七―九行參照）。――「トリギア」は月（ディアアナ）の異名（「三叉路の女神」の義。――ディアナの神殿は多く三叉路の處に在りしにより、ギルジリオを初めとして多くの羅甸詩人等此の名をそれに代用せりといふ）。
四、「道を開きし」――基督の死に依りて。
五、「火」――電光。尙、落雷につきては天、一註二一參照。
六、「饗宴」――基督の凱旋を觀ること。――法悅のために意識を失ひたればその時の記憶を心にとどめず。
七、「ポリンニア」――詩藝術九柱の女神のうち聖詩を司れる者。――「その姉妹等」は他の八

五夜の澄みわたれる空にトリギアの微笑む如く、我は幾千の燈の上に一の日輪ありて彼等のいづれもを燃え立たせ、そのさま我等の日輪の星屑を燃え立たすに似たるを見たり。

しかしてかの赫々たる者はその活ける光によりていたくも我が眼を照らしたれば、我はこれに堪ふること能はざりき。

嗚呼ベアトゥリイチェ、わがうるはしき慕はしき案内者よ。

彼女は我にいふ、「汝に打ち克てるは、何物も抗敵ふを得ざる能なり。

ここにこそ、そのかみ、あれほどにも久しく願ひ求められたりし、かの天地の間なる道を開きし、かの智慧と力とはあるなれ。」

あだかも火が、雲の容れ得ざるところまで延びゆきて、つひにその雲を脱れいで、その本來の性に反きて地上に落つるが如く、我が心はそれらの饗宴のうちにひろがりて己自らを去りゆき、そのいかさまになりしやを思ひ出でがたし。

「汝の目を開きて、わがいかに見ゆるかを見よ。汝はさまざまなる物を見て、いまや我が微笑に堪ふるにいたれり。」

過去を記す書の中より消え去ることの竟になかるべきほどにも、かたじけなきこの招待をわが聞きし時、我はあだかも忘られたる夢より自らに歸り來て、その夢を思ひ浮べむとていたづらに努むる人の如くなりき。

今よし、ポリンニア及びその姉妹等が、彼等のいと甘き乳をもてい

柱の女神也。——「彼等のいと甘き乳」云々につきては煉、二九〇頁一八行以下參照。

八、「奉納の詩」——詩材の神聖なるによりて斯く言へり。

九、「薔薇」——聖母マリア。教會の祈禱文にはrosa mystica（神祕の薔薇）と言へり。——「神の言」は基督（約翰傳、一の一四）。——「百合」は基督の教を宣べ傳へし使徒達（これは哥林多後書二の一四に見ゆる「常に我儕をしてキリストに在りて勝を得しめ且かれを知るの香ひを我儕をもて遍くあらはす神に感謝す」といふ言葉より出でたるなりといふ）。

一〇、以下三行、——自らは雲の蔭にゐて目には日に照されたる花野を見るが如くに、既に再びエムピレオの天に昇りし基督によりて聖母および使徒等の輝かしく照されたるを見き。——「光の大本」とは基督なり。

一二、「美しき花」——薔薇（註九）。

一三、「活ける星」——同じく聖母マリア。

一三、「一の炬火」——首天使ガブリエエレ（煉、一の註九、一〇參照）。——受胎告知の時の如く天國にても亦聖母をめぐりて歌へりとなせし也。

一四、「美しき碧玉」——同じく聖母マリア。——「竪琴」は天使ガブリエエレ。

と、豊かになしたりし、諸の舌の悉く音を立てて我を扶けむとも、聖なる微笑みと、その如何ばかり聖なる顔を照りはえしめしやを歌ひては、その眞實の千分の一にも及ばざるべし。

かかれば、天國を描くにあたりて、この奉納の詩は、行手の途の斷たれたるを見出づる人の如く、跳び越ゆることをなさざるを得ず。

されど、詩題の重々しきと、これを負へる肩の人間なるとを思ふほどの者は、その肩のその荷の下に震はむをも咎めざるべし。

わが不敵なる舳のわけゆくこの航路は、小さき舟の、または身を惜む舟人のむかふべきものならじ。

「いかなれば汝はわが面にも執着して、基督の御光の下に花咲く美しき園をかへりみざるや。

ここに薔薇あり。その中にして神の言は肉となりたまへり。ここに諸の百合あり。その匂は人々を善き道に導きしなり。」

ベアトゥリイチェは斯く言ひ、また我は、その勸めに心がまへしてのみありしなれば、再び我自らを弱き目蓋の戰に委ねき。

日の光の雲間を漏れて照らせる花野を、かつて我がある陰影に覆はれながら見たりしが、その如く我は、燃え立てる光に上より照らされて輝ける數多の群衆を見き。その光の大本は見ざりしかど。

嗚呼、かく彼等に印を押すなる慈ふかき力よ、汝は力なき我が目に視ることを得しめむとて自らを高きにあげたまひき。

朝にも夕にも、わが常に呼び唱ふる美しき花の名は、我が心を一に

一五、「王者の上衣」——第九天卽ち原動天。それ以下の他の八天を覆ひ包みて之等のものに廻轉すべき力を與ふ。その上なるエムピレオの天より直接神の靈感を受くるを以て熱度いと高く、生氣に富める也。——ダンテは「その內側」卽ち第八天にありてその第九天を望みしを以て之を見るを得ざりしなり。

一六、「焰」——聖母マリア。——その上なる「冠を戴きたる」は天使ガブリエエレの作りなしし也（四七二頁二—五行參照）。

一七、「『ああ、天の女王よ』」——復活祭後一定の日の晩禱に捧げらるる聖母讃美の交唱聖歌の第一句なり。その歌の全文は次の如し。——「おお、天の王妃よ、歡べ、アルレルルイア。蓋は汝の生むを値せし者、アルレルルイア、約束せし如くに甦りし故なり、アルレルルイア。我等のために神に祈れ、アルレルルイア。」

一八、「櫃」——聖徒等。——其處に「集められたる富」とは地上にて積みし功德によりて天國にて得られし幸福なり。

一九、「バビロオニアの流罪」——罪に充てる地上生活を指せる也。——昔ヘブライ人がバビロンの虜囚となりし如く（列王紀略下、二四—五、人は天の故鄕を離れて現世の旅路にさ迷へればなり（煉、一三註一九參照）。

あつめて、いと大なる火を見守らしめたり。

しかして下界にて立ち勝りし如く天上にても立ちまされる、かの活ける星[二]の輝やかしさと大きさとの、わが双の目に描かれしとき、天空の奥より冠の如く環をなせる一の炬火[三]は降りきて、かの星をとりまき、その周圍をまはれり。

この下界にしていとめでたく聞きなされ、いと強く魂を惹きよする、如何なる諧調[四]にてもあれ、いと輝かしき天上を碧玉にせる、かの美しき碧玉を飾れりし竪琴の音に比ぶれば、雲の張り裂けて鳴り轟くにも似たるべし。

「我は天使の愛なり。われらが『熱望』の宿なりしかの胎より息きいづる高き悦びをめぐる。

我はめぐらむ、天上の淑女よ、而して汝が汝の『子』のあとを追ひ、いと高き天球を汝の入ることによりて愈々聖ならしむる、そのときにまで及ばむ。」

めぐれりし者斯く歌ひをはれば、他の光は悉く皆マリアの御名を唱へき。

宇宙のあらゆる運行を包み、神の御息を受けて熱度のいと高く、生氣にいと富める王者の上衣[五]は、その内側のわれらを遠く上に隔たれるにより、わがありし處にて、我にあらはれざりき。

されば我が目は、己が產みし者のあとより昇りゆきしところの、かの冠を戴きたる焰[六]を追ふこと能はざりき。

二〇、「舊き新しき集會」――舊約新約の諸聖徒。――「鍵を保てる者」とは使徒ピエエトロ（地、一の註三七參照）。

第二十四歌

（第八天（恒星天）。凱旋の諸聖、その三。聖ピエエトロの信仰に關する試問。）

一、「羔」――基督。――「大なる晚餐」とは基督の惠み給ふ天上の幸福なり。默示錄一九の九に次の言葉あり、「天使われに曰けるは羔の婚姻の筵に招れたる者は福なりと書記せ又われに曰ふこれ神の眞の言なり」――「侶等」とは聖徒等。

二、「此人」――ダンテ。――「落つる物」云々とは、ダンテ未だ聖徒の群には加らざるも今や恩寵によりて天上の幸福の餘瀝にあづからむとせるの意。

三、「はじめの輪」――時辰儀（當時の時計）の最も內側なる最小にして廻ること最も遲き輪。反之、「終の輪」は最も外側にありて最大にして廻ること最も速きなり。――「彼等の富を測り定めしめき」とは圓舞の遲速によりて彼等の幸福の程度を知るの意なり（天、三九一頁九―一三行參照）。

四、「一の火」――聖ピエエトロ。

五、「襞を畫くに」云々――此の隱喩法稍〻明瞭

しかして、乳を吸ひし後、燃えいづる愛着の故に、母のかたへ腕をさしのぶる稚兒のごとく、これらの光明はいづれも皆、その焰を上にのばしたれば、マリアに對ひて彼等のいだける尊き愛は我に顯されき。

かくて彼等は「ああ、天の女王よ」[七]を歌ひつつ、わが目に見ゆる處にとどまりゐたりき。その歌のめでたさは、その悅びの我を去りたることなきほどなり。

嗚呼、この下界にして種播くに宜しき圃なりし、それらのいと豐かなる穡[八]に集められたる富のいかに大なるかな。

彼等がバビロオニアの流罪[九]に泣きながら、黃金を打ち棄てて獲たりし寶を今彼等はここに生きて享け樂めり。

ここに、神の又マリアの尊き御子の下にして、舊き新しき集會[一〇]と共に、いと大なる光榮の鍵を保てる者は、その戰勝を慶び祝へり。

第二十四歌

「汝等の願ひのつねに滿たされむ爲め、汝等に食物を與ふる福なる羔の、かの大なる晚餐に選ばれたる侶等よ。

神の恩寵によりて此人は、汝等の食卓より落つる物をば、死が彼の期を定むるにさきだちて味ふなれば、彼の限りなき憧憬に意をとめ、すこしく彼を潤せよかし。汝等は彼の思ふ事の本なる、かの泉の水を

を缺きたり。その意味は恐らく次の如くなるべきか、卽ち、恰も餘りに鮮明なる色彩が衣類の襞を畫くに適せざるが如く、我等の想像や言葉も亦此の聖歌に於けるが如き歡喜を十分に敍ぶる能はずと。

六、「我等の主が」云々――地、一の註三七、同、九三頁一九行以下參照。

七、「海の上を」云々――馬太傳一四の二二―三三にピエエトロが基督に倣ひて海上を歩みしこと見ゆ。その一節に曰く、「ペテロ答へて曰ひけるは主よ若し爾ならば我に命じ水を履みて爾の所に至らしめよ。來れと曰び給ひければペテロ舟より下りてイエスの所に至らんとて浪の上を歩みたれど風の烈しきを見て懼れ沈みかかりければ主よ我を救けたまへと曰ふ。イエス頓て手を伸べこれを執へて曰ひけるは信仰うすき者よ何ぞ疑ふや。偕に舟に登ければ風しづまりぬ」

八、この一節、――彼が神學上の三德たる信、望、愛に於て如何に正しきやは汝のよく知るところ。そは汝祝福を受けたる者は神（あらゆる物の描かれて見ゆるところ」天、四二九頁四―六行參照）に於て一切の事を知ればなり。

九、「羅馬を正しきに向はせたりし」――基督教

絶えず飲むなり。」

ペアトゥリイチェは斯く言へり。しかしてかの喜べる魂等は、動かざる軸をめぐる球體となりて、彗星の燃ゆるが如く燃え立ちたり。

さて時辰儀の裝置の内に輪のめぐるとき、心をとめて見る人に、はじめの輪の靜まりて、終の輪の飛ぶとし見ゆるが如く、これらの環は、速く遲くさまざまに舞ひ、我をして彼等の富を測り定めしめき。

いと美しと我が見し環より、一の火の出づるを我は見ぬ。そはまことに幸福なる火にして、かしこに殘れるもののうちこれより輝かしきは一もなかりき。

この火の三度までペアトゥリイチェの周圍をまはりてうたへる歌は、あまりにも神々しきに過ぎて、わが今思ひ浮べむとすれどもその甲斐なし。

されば我が筆は跳り越え、我はここにこれを錄さじ。我等の想像は、それよりも更に我等の言葉は、あまりにも色の鮮かなるにすぎて、かかる襞を畫くにふさはしからざればなり。

「嗚呼、かくも眞心こめて我等に請ひ求むる我等の姉妹よ、汝の熱き愛情によりて汝は我をかの麗しき球體より釋き放てり。」

かの福なる火は停まれりし後、その息を我が淑女にむけぬ。しかしてその息は我がここに記すところの如く言へり。

さて彼女は言ふ、「嗚呼、我等の主が携へ下りし、この不思議なる悅びの鍵を授かれる偉なる人の永遠なる光よ。

の信仰を敎へて。——「汝の親愛なる兄弟」とは使徒パオロ（彼得後書、三の一五に「我儕の愛する兄弟パウロ」の語見えたり）。——「誠實なる筆の錄せる」とは、使徒パオロの筆に成れりしものと信ぜられたる希伯來書を指せる也。

一〇、「信仰は望みを」云々——右の希伯來書、一一の一に曰く、「それ信仰は望む所を疑はず未だ見ざる所を憑據とするもの也。」ダンテは之を羅甸譯聖書より譯出せし也。

一二、「かしこにて」云々——地上の信仰者は天上の眞理を眞實なりと思ひ做すことに依りて、既にその心髓より言へば之を會得せるものといふべし。

一三、この一節の大意、——その心髓より言へば既に天上の眞理を會得せる也との右の信仰こそ、一方にては實現せらるべき希望の土臺となり、他方にては亦一個獨立の（「目を他にむくることなし」き）事實として、更にそれ以上の推論の建設せらるべき論據ともなる也（ギイゼの註に據る）。

一三、「貨幣」——信仰。〔信仰の眞僞を十分に檢せりとの意〕

一四、「貴き寶玉」——同じく信仰を指せり。

一五、「舊き、また新しき書」——舊約、新約兩聖

汝をして海の上を歩ましめたりし信仰につきて、輕き重きさまざまなる事をもて、汝の意のままに彼を試みよかし。

彼の正しく愛し、正しく望みまた信ずるやは、汝にかくさるることなし。それ汝は、あらゆる物の描かれて見ゆるところに目をむくればなり。

されど、この國は眞の信仰によりてその民を得たるなれば、これを談る機の彼に來りて、榮光をこれに歸するは善き事なり。」

あだかも、學士の學位試驗を受くるにあたり、決定する爲めにはあらで、論證する爲めに身構へつつも、師の問を發すまでは物言はざる如く、彼女の物いへりし間も我は、かかる問者とかかる告白とに應ずるを得む爲め、あらゆる理をもて備をなしたりき。

「言へ、善き基督徒よ、汝の思ふところを明らかにせよ。信仰とはそもそも如何なるものぞや。」

すなはち我は、頭をあげてこの問ひの出で來りし處なるかの光を見、さてペアトゥリイチェをかへりみれば、彼女は疾く我に相圖して、わが衷なる泉より水を注ぎいださしめき。

我は言ふ、「大なる百人長の前にてわが告白するをゆるしたまふ恩寵よ、ねがはくは我をしてわが思ふところを十分に言ひ表はさしめよかし。」

さて言をつづけていふ、「父よ、汝と共に羅馬を正しきに向はせたりし、汝の親愛なる兄弟の誠實なる筆の錄せる如く、信仰は望みをかけ

書なり。

一六、「舊き又新しき命題」——同じく舊約、新約兩聖書を指せり。——命題 proposizion は元來三段論法上の大小二個の前提を指せるものなれども、ダンテは之を己が信仰は眞なりとの結論を引出すべき前提として、聖書の意味に用ゐし也。

一七、「自然が……鍛へいでしにあらざる諸の業」——奇蹟。

一八、「葡萄」——敎會は恰も葡萄園の如し（天、四一四頁、九行參照）。——今は墮落して實を結ばざる「荊棘」に變じたり。

一九、「『神よ、われら汝を讃めむ』」——煉、九の註三一參照。

二〇、「墓に近づきて」云々——約翰傳二〇の一——一〇に、マグダラのマリアが基督屍のその墓に見當らざる旨を告げしにより彼得が約翰と共に墓に急ぎしも彼は年若き約翰よりも後れて到りしこと見えたり。その一節に曰く、「シモン・ペテロ彼に後れて來り墓にいり裹みし布を置けるを見たり。……是　於て先に墓に來れる他の弟子（約翰）も入りこれを見て信ぜり。」

二一、「愛をもて、また願望をもて」云々——天、一の註一四參照。〔この一節と略〻類似の言

らるる物の基本にして、見られざる物の證據なり。しかしてここに信仰の心髓ありと我には思はる。」

この時わが聞きしところの言にいふ、「汝の思ふところ正し。されど汝よく知れりや、彼がこれを先づ基本の間に置き、つぎに證據の間に置きし所以のものを。」

ここに於てか我はいふ、「ここにして我が目にあらはなる奥深き事物も、下界なる目の見るところにあらねば、かしこにてそれらの事物の在りとせらるるは一に信仰により、その上に高き望みも築かるるにすぎず。乃ち信仰をもて基本と言ひなす所以なり。

又我等は、目を他にむくることなく、この信仰より推論せざるを得ざるが故に、信仰は證據と言ひなさるるなり。」

この時わが聞きしところの言にいふ、「凡そ教理として下界に聞き知らるるところのもの、もしかくの如く解せられむには、論辯家の才智も施すにところなかるべし。」

これらの言葉はかの燃え立てる愛より吐きいだされしが、やがて其愛は言ひ添へていふ、「この貨幣の混合物とその重さとは、既にいと善く檢られたり。

さあれ、問ふ、汝はこれを汝の財布の中に有てるや否や。」すなはち我、「さなり、わが有てるは眞く且つ光りかがやきて、その刻印に疑はしと見ゆる何物もなし。」

この時かしこに輝きゐたる奥深き光より言葉はいでていふ、「あらゆる德に礎をなせるこの貴き寶玉は、そもそも何處より汝に來れるや。」

我はいふ、「舊き、また新しき書の上に注がれたる聖靈の豐かなる雨は、その眞なることを我に示しし論理にして、その鋭きに比ぶれば、いかなる證明も鈍しと我に見ゆ。」

さて我がきき言に曰ふ、「かくの如き結論を汝になさしむる舊き又新しき命題は、いかなれば汝これを神の言葉となすものぞ。」

我はいふ、「この眞實を我に顯はす證明は、自然が鐵をやき、鑛床を打ちて鍛へいでしにあらざる諸の業の伴へることこれなり。」

我に應へられし言に曰ふ、「問ふ、これらの業のありしことを、何物か汝に保證したるや。證明さるべきもの、それ自らにして、その他の何物にもあらざるならずや、汝の爲めに證明せるは。」

我は曰ふ、「奇蹟なくして基督の教の世に行はれなば、これこそは大なる奇蹟にて、他のいかなる奇蹟もその百分の一にあたらざるほどならむ。

そは汝は、貧しく且つ饑ゑつつ圃に入りて善き木の種をまきたればなり。そのよき木なりし葡萄の、今は荊棘となりにたれども。」

この言葉の終りしとき、高き聖なる宮人達の、「神よ、われら汝を讃めむ」とかしこに歌へる佳き調は、諸の球體に響き渡れり。

さて、斯く問ひ試みつつ枝より枝へ我を連れゆき、既に最終の葉端に近きたりしかの貴人は復びいふ。

「汝の心と睦びかはせる恩寵の、今まで宜しきを得て汝の口を開かせ

葉アリストテレエスの「形而上學」中に見ゆ）

三、「形而下の、並びに形而上の論證」――アリストテレエスの「物理學」並びに「形而上學」を指せるなりといふ。

三、「モイゼにより」云々――古來行はれし分類によりて舊約新約兩聖書を擧げたり。（煉、二九の註一八、二一、三八、四二、四三參照）。

四、「これは初めなり」――神の三位一體を信ずること、これ全信仰の根本たり。馬太傳二八の一九に曰く、「是故に爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とし」云々。

第二十五歌

（第八天（恒星天）。凱旋の諸靈、その四。聖ヤアコボの希望に關する試問。）

一、「羊舍」――フィレンツェのこと（天、四三三頁七行參照）。

二、「狼共」――フィレンツェ人（特にグェルフ黨に屬せる者を指せりともいふ）。煉、一四の註一四參照。――「羔」は善良にして柔和なる者。――「閉めだす」とはダンテのフィレンツェを逐放せられしこと。

三、「異れる聲をもて」――最早逐放せられし當時の如き戀愛詩の詩人にはあらで實に聖詩の詩人としてとの意。――「異れる毛」とは若き日の美しかりし捲髮も今は灰色となりてとの意也。

四、「洗禮盤」――フィレンツェ市の聖約翰寺院内にあり（地、一九の註六參照）。（之等の部分を詩作せし頃にはダンテも齡やうやく晩年に及び懷郷の念も切にして、或は已がためにフィレンツェの門の開かるることもあらむかと儚き希望をいだきし樣このあたりの敍述にも偲ばるれど、遂にそのこと無かりし也）

五、「代理者の初果」――聖彼得。最初の法王（基督の代理者）なりしを以て斯く。――「球」は聖徒の群のつくれるもの（天、四七四頁七―九行）。――次の「一の光」はゼベダイの子にして聖約翰の兄弟なる使徒雅各。

六、「ガアリチア」――聖雅各の肉體は西班牙國ガアリチア州なるサンティアアゴ・デ・コムポステルラに葬られたりとの傳說ありしため中世には此の地に巡禮する者甚だ多かりしといふ。

七、「錄しとどめたる」――雅各書、一の二および一七に次の如くある を指せり、「わが兄弟よ若しなんぢら各樣の試誘に遇はば事を喜ぶべき事とすべし。……凡ての善き賜と全き賜はみな上より諸々の光明の父より降るなり父

たるなれば、我は言はれたるものを可しとせむ。
さあれ、汝が何を信ずるや、また何處より其信仰のいで來りしや、それを今汝は言ひ現はすべきなり。」
すなはち我はいふ、「嗚呼、聖なる父よ、墓に近づきて若き足に打ち勝ちしほどにも、かたく汝の信じゐたりしものを見るところの靈よ。
汝は、わが持ち合せたる信仰の本體をここに宜べあらはさむことをねがへり。また汝は、原因を問ひたづねたり。
すなはち我は答へていはむ、我は一個の神を信ず。愛をもて、また願望をもて、すべての天を動かしつつも自ら動かざる、唯一にして永久なる神を信ず。
かかる信仰に對しては、我に形而上の、並びに形而上の論證あるのみならず、更にモイゼにより、預言者達により、詩篇により、福音書により、また聖靈の火に燃やされて筆を執りし汝等によりて、ここより雨りくだりしところのかの眞實も、此信仰を我に與ふるなり。
又我は永遠なる三位を信ず。しかもこれらの位の體は一、すなはち一にして三なれば、これらともこれともいはるべきを信ずるなり。
我が言ひ及べる奧深き神祕の情態を、福音書の教はあまたたび我が心に印刻むなり。
これは初めなり。これは火花にして、後のびてあざやかなる焰となり、また天上の星の如く我が心の內にきらめき渡るなり。」
あだかも、意にかなへる事を聞く主の、やがて其僕の默すや否や、

は變ること無くまた轉動て顯はるる影もなき者なり。」――ダンテは此處に西班牙の傳へに從ひに註五に誌せし聖約翰の兄弟なる雅各（大ヤアコボ）をば雅各書の筆者となせり。されど普通此の筆者は使徒行傳一の一三に見ゆるアルパイの子ヤコブ（小ヤアコボ）なりとせらる。

八、「汝の『望』」――聖雅各（「汝」）は神學上の三德中「希望」の象徵とせらる。之に對し彼得は「信仰」、約翰は「愛情」を象徵せりといふ。――斯かる神學說の起りし所以は、ヤイロの女の更生（馬可傳五の二二以下、就中三七）、基督の變貌（馬太傳一七の一以下、就中一）、及びゲッセマネの園に於ける祈り（馬太傳二六の三六以下、就中三七）の如き重大なる場合に必ず基督に伴ひしは以上の三人なりしを以て也といふ。

九、「第二の火」――雅各。――次なる「かの山」とは彼得と雅各とを指せる也。詩篇一二一の一に曰く、「われ山にむかひて目をあぐ、わが扶助はいづこよりきたるや」――「山」といへるは位の高きを表はせるなりといふ。

一〇、「汝自らと他の人々との」云々――神曲に於けるダンテは迷妄より覺めて高き救ひの道に努むる人類の象徵たり。その三界歷程は自己

その報知の悅ばしきあまりに、直に彼をかき抱くが如く、我に命じて物いはしめし、かの使徒の光は、わが默しし時、歌をもて我を祝福しつつ、三たび我が周圍をめぐりき。
かくまで我はわが言葉をもて彼をよろこばしたりしなり。

第二十五歌

多くの年月に亘りて我をやせしむるほど、天地ともに手を藉したるこの聖詩の若し、かの麗はしき羊舍――かしこに戰を起す狼共に敵として、羔なる我の眠りゐし處――より我を閉めだす、かの酷たらしさに打ち克つこともあらば、その時我は異れる聲をもて、異れる毛をもて、詩人として、我は歸りゆき、我が洗禮盤のほとりに冠を戴かむ。
そは、かしこにて我は魂を神に知られしむる『信仰』に入り、後ピエトロの斯く、その爲めに我が額の周圍をめぐりしなればなり。
基督ののこしたまへる、其代理者の初果の出でたりし、球より、この時一の光は我等のかたへ進みきぬ。
我が淑女は悅ばしさにみちみちて我にいふ、「いかに、見よ、かの貴人を。かれの爲めにこそ、下界の人々のガアリチアをば訪るるなれ。」
あだかも鳩がその侶に近く下りたち、各めぐりつつ鳴きつつ、その愛情を示し合ふときの如く、一人の大なる君の光榮あるもの、今一人

救濟の過程にして、その詩作は世人救濟のため也（地、九の註一八、煉、三〇の註八參照）。
二、「われに先きだち」――ベアトゥリイチェがダンテに代りて第二の試問（「汝はこれを汝の財布の中に有てるや否や」天、四七六頁一八行に相當せり）に應ぜし也。蓋しダンテ自らが人にすぐれて大いなる望を有てることを告げむは自讚に過ぎたるべければなり。
三、「鬪をなす教會」――La chiesa militante. 地上の基督教徒を意味す。こは、天上の聖徒を意味せる凱旋する寺院（La chiesa trionfante）に對して呼ばれたる也。
三、「埃及を出で」云々――罪に汚れし地上の束縛を脫して天國の至福に入り得たりとなり（煉、二の註九參照）。
四、「他の二の事」――三個の試問の中註一一に誌せし第二問以外の二つ。即ち、一、「信仰とはそもそも如何なるものぞや」（天、四七五頁一二―一三行參照）、三、「この貴き寶玉は、そもそも何處より汝に來れるや」（天、四七七頁一行參照）。
一五、この一節、――右の第一問に對する答。――「望とは」云々、之等の言葉をダンテは直接ピエトロ・ロムバルド（天、一〇の註一四參照）の「教法集」（三の二六）より引用せりといふ。

の君に迎へられ、彼等をやしなふ天上の糧を讃め稱へたるを我は見き。

されど悅ばしき會釋の終れるとき、いづれも我が目の得堪へざりしほどに燃えかがやきつつ、默して我が前にとどまれり。

このときベアトゥリイチェは微笑みながらいふ、「われらの公會堂の惠を錄しとどめたる名高き命よ。

なんぢ『望』を此高き處に響き渡らしめよ。汝は知れり、耶蘇がいと輝かしく三人に現れたまひし度毎に、汝の『望』を象徵したりしことを。」

「汝の頭を擧げ、汝の心を泰かにせよ。人間の世界より此處に昇り來るものは、我等の光をうけて熟せざるを得ざればなり。」

この勵ましは第二の火より我に來れり。乃ち我は目を擧げ、さきに重きに過ぐる爲め、わが目を垂れしめたりしかの山を見ぬ。

「恩寵によりて我等の帝は、汝が汝の死ぬにさきだちて、彼の伯達と彼のいと奧深き宮殿にて相會ふことをゆるし、さて汝をして此宮廷の眞相を見たるのち、下界にて正しき愛をよびさますなる『望』をば、汝自らと他の人々との心にかためしめたまふ。

されば言へ、その『望』の何なるや、如何に汝の心に花咲くや、また何處より汝に來れるやを。」第二の光は更に續けて斯くいへりき。

わが翼の羽根を導きてこれほどにも高く翔ばしめしかの慈悲ふかき淑女は、われに先きだち答へていふ。

二六、以下三節、――第三問（望は何處より汝に來れるや）に對する答なり。――後の「大なる詩人」とはダヂイデ王（天、四五四頁九―一二行參照）。

二七、「『汝の御名を』云々」――詩篇、九の一〇、但し、ダンテは羅甸語譯聖書に據れり。

二八、「汝の書翰によりて」――雅各書、一の一二なる次の言葉を指せりといふ、「忍びて試誘を受くる者は福なり蓋はこころみを經て善しとせらるる時は生命の冕を受くべければ也この冕は主己を愛する者に約束し給ひし所のもの也。」

二九、「棕櫚をうるまで」――殉教の死に至るまで（使徒行傳、一二の二に曰く、「かつ刃をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり」）。――「棕櫚」は勝利を表す。

三〇、「神その友となしたまへる魂」――神に選ばれし魂（天、四一六頁八―九行參照）。〔この一節の句讀法につきては古來譯者間に種々議論あり〕

三一、「イザヤ曰へり」――以賽亞書、六一の七に曰く、「曩にうけし恥にかへ倍して賞賜をうけ、凌辱にかへ嗣業をえて樂しむべし、而してその地にありて倍したる賞賜をたもち永遠によろこびを得ん」――但し、ダンテは羅甸

「われらの軍勢をあまねく照らすかの太陽に錄されたる如く、闘をなす教會には、彼より多くの望みを抱ける子の一人もなし。

されば彼は、軍役を終るにさきだちて埃及を出で、ゼルサレムメに來りて視ることをゆるされたり。

他の二の事、即ち汝の知らむ爲めならで、ただ、此德のいかばかり汝に好ばしきやを、彼をして傳へしめむ爲め問ひ尋ねしところのものは、我はこれを彼に委ねむ。

そはこれ、彼にとりて難からず、自らを誇ることにもあらざればなり。乃ち彼をしてこれに答へしめよ。ねがはくは、神の恩寵のこれを彼にゆるしたまはむことを。」

あだかも生徒が、そのよく知れる事柄に於ては、その才能のあらはるるを得む爲め、疾く且つ悅びて教師に應ずる如く、そのごとく我はこたへていふ。

「望とは未來の光榮を確く期待することの謂ひにして、しかも斯かる期待は神の恩寵と先きだてる功德との生むところなり。

多くの星より此光は我に來れども、初めてこれを我が胸に注ぎ入れしは、いと高き導者をうたへるいと大なる詩人なりき。

彼はその神歌の中にいふ、『汝の御名を知る者等をして汝に望をかけしめよ』と。しかして誰かわが如く信じてしかもこれを知らざるべき。

彼の注ぎ入れしと共に、その後汝は汝の書翰によりてこれを我に注ぎ入れたれば、我は滿ちあふれて、汝等の雨を他の人々の上にもふら

語譯聖書によりて「倍したる」といふを、同書、六一の一〇に見ゆる「すくひの衣」に懸けて復活後の靈魂と肉體との意に解せるなりと（但し、ギイゼの註にては、此の二重とは聖化せる肉體とそれを裹める光明の衣となりと言ふ）。〔此處の大意、――死後復活して靈肉相合致し以て天國に於ける永遠の幸福にあづかること、これ希望の我等に約束するところ也〕

三二、「汝の兄弟は」――聖約翰。――默示錄、七の九以下に於て、「此後われ觀しに諸國、諸族、諸民、諸音の中より誰も數へ盡すこと能はざるほどの許多の人白衣をき手に棕櫚の葉をもち寶位と羔の前に來りて立てり」云々。

三三、「『望を汝にかけしめよ』」――詩篇、九の一〇、及註一七參照。

三四、「巨蟹宮に」云々――磨羯宮に相對せる巨蟹宮は冬至の月にありて夜の空を支配す。故に若し此の天宮中に此處に登場せし使徒約翰の魂の如く光の强烈なる星あらば、夜も猶晝の如く斯くて冬の一箇月はたゞ一つの長き晝となるべしとの意。

三五、「二の光」――彼得と雅各。

三六、「ペリカン」――この鳥はその雛をば己が血によりて養ひ育つと傳へらる（ブルネット・ラティイニ著「テゾオロ」――地、一五の註六、三

しむるなり。」

我が物いへりし間に、かの火の活ける懷の内に、且つ不意に且つ屢屢、一の火花は震ひひらめきて、さながら電光のごとくなりき。

やがてかの火は語りいでて曰ふ、「棕櫚をうるまで、戰場を出づるまでも我に伴ふ德のかたへと、今も我を燃え立たすなるかの愛は、この德を好ぶ者なる汝と、わが復び語らはむことを欲ふなり。されば願はくは、望の汝に何を約するやを告げよかし。」

すなはち我はいふ、「新舊二つの聖書は標を樹つ。その標は望をわれにさし示すなり。

神その友となしたまへる魂につきてイザヤは曰へり、彼等はいづれも其鄕土にて二重の衣をきるべしと。その鄕土とは、このめでたき生の事なり。

更に汝の兄弟は、白き衣の事を述ぶる處にて、遙かに明らさまに、この默示をわれらに顯はし示したり。」

これらの言葉の終に近く、『望を汝にかけしめよ』はまづ我等の上に聞え、合唱の者悉くこれに和したり。

やがて彼等の間に一の光は甚く輝りまさりき。亘璽宮にもし、斯かる水晶體の一もありたらば、冬の一月は單だ一の長き晝間となりたるべし。

又、いかなる心無さの爲めにもあらで、ただ新しき新婦に慶祝をなさむ爲めにとて、喜べる少女の起ちて行き、ゆきて舞踏に加はる如く、

二參照――の中に見ゆと）。中世にありては廣く救世主・基督の象徵として用ゐられしといふ。――その「胸に倚りし者」とは聖約翰、最後の晩餐の折イエスの胸に倚りしこと約翰傳、一三の二三に見ゆ。

二七、「大なる任務をひきうけし者」――同じく聖約翰。――イエスに代り子として聖母に仕ふべき務めを引受けし也（約翰傳、一九の二七）。

二八、「いかなれば汝は」云々――約翰傳、二一の二二基督が約翰につきて、「我もし彼が存て我來るを待つを欲まば」云々と言へるに基き、約翰は肉體のままにて天に擧げられたりとの傳說ありしに依り、今ダンテはその事の眞否を確かめむとて約翰の靈體に注目せし也。

二九、「我等の人數の」云々――我等選ばれし者豫定の數に達する迄は、（默示錄六の一一）即ち最後の審判の日までは。

三〇、この一節、――肉體と靈魂とを共に携へて天に擧げられしはイエスとマリアとの二人のみ。此の事を世の人々に告げてその誤を正すべし。

三一、「三部の息吹」――三使徒（彼得、雅各、約翰）の聲。

三三、「彼女を見るを得ざりし」――聖約翰を見守りて眩しため也（四八三頁九―一〇行參照）。

かの輝りまされる光は、已が燃えたる愛の熱きにふさはしく、輪をなしてめぐれりし二の光の處に來ぬ。

さて彼處にて、歌と足拍子とに加はりしが、わが淑女は、あだかも默して動かざる新婦のごとく彼等を見守りたり。

「こは我等のベリカンの胸に倚りし者、また十字架の上より選まれて、大なる任務をひきうけし者なり。」

かく我が淑女は言へり。されど、その言葉の後にも、その前に於けると同じく、彼女の目をその見守れる處より移すことなかりき。

日の少しく蝕するを、打ちまもりて視むと努むる人は、見ることによりて見得ざるにいたる。

わがかの最後の火に於けるもまたその如くなりき。かの火はやがていふ、「いかなれば汝は、ここに在らざる物を見むとて自を眩ますや。わが肉體は地にして地の上にあり。我等の人數の永久なる聖旨に適ふにいたるまでは、他の肉體と共にかしこにあらむ。

二重の服をまとひて這の福なる僧院にあるものは、今し昇りゆきたるそれらの二の光のみ。この事を汝は汝等の世に齎らしかへるべし。」

この言葉をきけるとき、焰の渦卷は、三部の息吹をもて造り成されたるめでたき和聲とともに卷きをさまりて、さながら水をかきわけたりし櫂の、疲るるを、又は危きを避けむため、相圖の笛の音と共に悉く止まるが如くなりき。

嗚呼、ペアトゥリイチェに近く、しかも幸なる世にありつつも、彼女

第二十六歌

（第八天（恒星天）。（凱旋の諸靈、その五。聖ジョヴァンニの愛に關する試問。始祖アダモの物語。）

一、「物語りして」――愛情に關する問答に依りて。――但し、その方法は前二歌に見えし信望に關するものとは異れり。即ち、一、愛の目的は何ぞ（その答、四八四頁自終四―三行）、二、愛の根據は如何（その答、四八五頁三―四行）、三、神の愛への個人的動機はあらざるか（その答、四八六頁三―四行）。

二、「アナアニア」――ダマスコの人にして主の命によりサウロ（使徒パオロ）の視力を回復せしめし者。使徒行傳、九の一七―八に曰く、「是に於てアナニア往きて其家にいり手を彼の上に按て曰ひけるは兄弟サウロよ爾の來れる路にて現はれし所の主イエス爾が再び見る事を得かつ聖靈に滿されん爲めに我を遣はせり。忽ち彼の眼より鱗の如きもの脫て再び見る事を得すなはち起ちてバプテスマを受。」

三、「この目こそは」――ダンテがペアトゥリイチェの氣高き容姿に接し、その心に絕えざる愛の火を燃え立たしめしところ、いはばその扉口也。

四、「至善」――神。こは愛の與ふる强き弱き一切の思想の始にして終なり、即ち我が愛は悉く神に向へり、默示錄一の八に曰く、「主たる

を見むとてふりかへりし我の、彼女を見ることを得ざりしとき、我が心のいかに甚だしく擾れたりしかな。

第二十六歌

視力の消えたるによりて我が思ひまどへりしとき、それを肢したりし輝く焔より、一の息吹は出で來りて我が心をひきぬ。

その言葉にいふ、「我を見て失へる、汝の目の能を取りかへすまでは、物語りして埋合はすこそよからめ。

されば、先づ問はむ、汝の魂は何をかめざしたる。また、汝の視力のまどへるのみにして、死にしにあらざることを覺れよかし。

そは、汝を導きてこの聖域をめぐりゆく淑女は、アナァニアの手に有てりし能をその目に有てばなり。

我はいふ、「遲くとも速くとも、彼女の意のままにわが目の癒えよかし。この目こそは、常にわれを燃え立たすなる火を携へて、彼女の入り來りし扉口なれ。

この宮庭を滿ち足らはしむる至善は、高く低く『愛』のわれに讀みきかす、あらゆる經典のアルファアにしてオメガなり。」

目のゆくりなく肢るための恐れを、我より取り去りたりしその聲は、更に語りつづくる心を我に起さしめむとていふ。

神いひ給へり我はアルパ也オメガなり始なり終なり今あり昔あり後ある全能の者なり。」

五、この一節、――聖約翰の第二の試問（註一參照）。

六、この一節、――右に對する答。神に對する愛の根據を與へしは、一、哲學、二、聖書に見ゆる天の啓示。

七、この一節、――愛の向ふところは善也。而して凡そ善なるものは已がために愛情をば喚び起す。乃ち善大なるに從ひて愛も亦大なり。さて、神は最高の善なり。故にそは愛の第一の對象たり。

八、「我に示す者」――アリストテレエスを指せりといふ。彼は永遠にして不動なる第一原因はそれに對する願望によりて「無窮の實體」たる諸天運行の本源たりとの說を敎へき。

九、「眞の創造者」――その言葉に僞なき者たる神。卽ち、神は自らその善の完きをば證し給へり。出埃及記、三三の一九に曰く、「エホバ言ひたまはく我わが諸々の善を汝の前に通らしめエホバの名を汝の前に宣べん我は惠まんとする者を惠み憐まんとする者を憐むなり」

一〇、「かの高き告示」――默示錄。――此處にては特にその冒頭の部分を指せるなりといふ。

一一、この一節、――第三の試問。――その大要は、――哲學と啓示とより他に個人的評價より見たる神の愛への動機はあらざるや（註一參照）。――「如何に多くの齒」とは幾許の動機といふ如き意。

一三、「基督の鷲」――聖約翰の福音書作者としての象徵（神の祕義に對する卓れたる直觀力を表はせりといふ）。煉、二九の註二六、また默示錄、四の七參照。

一三、「宇宙の存在と」云々――天地及び人類の存在と、基督の贖罪のための死。

一四、「望むところのもの」――永生。

一五、「葉」――被造物。――上の「永遠なる園丁」は神、「園」はそのしろしめし給ふ宇宙なり。

一六、「『聖なるかな』云々」――此の言葉、默示錄、四の八には次の如くあり、「聖かな聖かな聖かな昔し在し今在し後います主たる全能の神と」――今や神學上の三德に關する三使徒よりの試問めでたく終りを告げしにより聖衆等祝して斯く歌ひし也。

一七、「視覺の精」――すなはち視力。中世の考へに從へば、前腦なる視神經に發して眼球に至り更に其處より光の印象をば腦に傳ふるなりと。――「膜」は眼球を包める種々なる皮也。

一八、「その判斷の」云々――ペアトゥリイチェの眼差は曩にダンテの目を眩ませし聖約翰の光

「げに汝は、一層こまかき篩にてふるはれざるべからず。誰が汝の弓を斯かる的に向けしやを告げざるべからず。」

さて我は言ふ、「哲學の論證によりて、またこの處より下りゆく權威によりて、かかる愛は我に印象されざるを得ざりき。

そは、善にして善なる限り、その會得せらるるや否や愛を燃え立たせ、しかも善なるを含むの多きに從ひて、愈々愛を燃え立たすことの大なればなり。

されば、『それ』の外に見出さるるいかなる善も、『それ』自らの光明の一條にほかならざるほど、こよなく勝れたる存在に對しては、この論證の礎なる眞實をわきまふる何人の心も、他のあらゆる存在に對するより、まされる愛を發さざるを得ず。

總ての窮りなき事物の初めの愛を我に示す者、かかる眞實をわが理智にさとらしめ、自らを語りて『我は汝をして總ての善を見しめむ』とモイゼに言へる眞の創造者の聲もこれをさとらしめ、汝も亦、この高き處の祕密を、いかなる他のものにもまさりて下界に顯はすなる、かの高き告示をなしつつこれをさとらしむるなり。」

さて我が聞ける言葉に曰ふ、「人智によりて、またこれと相適へる權威によりて、汝の愛のいと高きものは神にむかふ。

さあれ言へ、汝を神に引きよする索の、尙このほかにもありと汝は覺ゆるや否やを。しかして汝は、この愛に如何に多くの齒をもて汝を嚙むやを宜べよかし。」

基督の鷲[一三]の聖なる意圖は我にかくされざりき。否、寧ろ我は、何處へ彼の我が告白を導かむとねがひしやを見て取りき。

すなはち我は復びいふ、「總ての嚙みて、心を神にむかはしむるを得るもの、我が愛と相伴へり。

そは、宇宙の存在と、[一四]われ自らの存在と、われの生くるを得む爲め『彼』の受け忍びし死と、苟くも信ずる人のわが如く望むところのものとは、前にいへる生ける知識ともろともに、我を謬れる愛の海より曳き出だし、正しき惡の渚に我を置きたればなり。

永遠なる園丁の園にあまねく茂れる葉を、彼等の神より授かれる幸の程度にしたがひて我は愛づ。

わが默すや否や、いとめでたき一の歌は天上に響き渡り、わが淑女は他の者等と共に、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」と言へり。

凡そ、鋭き光にあへば、視覺の精[一七]の、膜より膜に入り込める其輝きへ向ひゆくにより、眼はその精の破るところとなる。

しかも目覺めたる人は、その判斷[一八]の來りて扶くるにいたるまで、ゆくりなくも斯く目覺めたるを知らざるままに、その視るところの物を懼るることあり。

かくの如くベアトゥリイチェは千哩の先をも照らす彼女自らの目の光をもて、あらゆる塵をわが眼より逐ひ拂ひき。

すなはち、我はその時前よりも善く見ることを得て、我等と共なる

に比して尙遙かに赫奕たりしも、その中にダンテの判斷力は治癒の力を認め且つ捕捉せしと也（ギイゼの註に據る）。

一九、「第四の光」――アダモの靈。

二〇、「第一の力」――神。――「第一の魂」はアダモ。

二一、「なりいづるとき旣に」云々――アダモは造られし時旣に大人なりき。――「新婦といふ新婦を」云々とは如何なる新婦も彼の子孫なるを以てその「女」に當り、悉く彼の末裔なる男子の配偶となるを以てその「子婦」に當るとの意也。

二二、この一節、――アダモの靈を裏める光明が一際强く燃え立ちしに依りてダンテはアダモの感動（喜びてダンテの望みを叶へむとの）の如何ばかり大いなるかを知りしとの寓意。

二三、「鏡」――神（天、四二九頁四―六行參照）。

二四、「汝の聞かむとねがへるは」――アダモはダンテの心の中に次の四つの疑問を讀み取りたり、――一、アダモが創めて造られて地上樂園（さきにダンテがベアトゥリイチェに導かれて昇天を始めしところ）に置かれし以來今に至るまで幾年を經たるや、二、彼が樂園に在りし期間は幾許ぞ、三、原罪の眞因は奈邊に

をわが見し第四の光[一九]につき、驚きあきれたる人の如くにも問ひたづねたり。

さて我が淑女はいふ、「これらの光の內にては、第一の力[二〇]の曾つて造りし第一の魂の、歡喜をもて其造主を見守れるなり。」

風の吹き過ぐれば、枝はその頂きをまぐれども、それを彈ね返すそれ自らの能によりて起き直るが如く、我もまた、彼女の物いへる間は、驚きあきれてうなだれたりしかど、やがて物言はましと願ふ心の火の、復び我を落ちつかせたれば言ふ。

「嗚呼、なりいづるとき旣にすでに熟れつくしたりし唯だ一の果實よ、嗚呼、新婦といふ新婦を悉く女に、また子婦に有つなる古の父よ。

眞心の限りをつくして我は、汝の我に語らむことを汝に祈ぎもとむ。

汝はわが願ふところを知れるなれば、疾く汝に聞くを得む爲め、我はこれを言はざるなり。」

包みかくされたる獸の身を動かせば、これを包める物も相伴ひて動くが故に、その求むるところの現れざるを得ざることあり。

かくの如く第一の魂は、如何に悅びて彼の、我が望みのままをなさむとしたりしかを、その翼によりて我に知らしめき。

斯くて彼は曰ふ、「汝の我に言ひ現はさずとも、わが汝の願ひを見てとれるは、おほよそ汝にいと定かなることを、汝の知れるにもまさりたり。

そは、我はこれをかの眞實なる鏡[二三]――この鏡はそれ自らに他なる諸

ありや、四、アダモは神より如何なる言語を受けしや、又如何にしてそを造り成しや。

二五、この一節、――第三問の答。――原罪の眞因は專ら傲慢に在りしとなり（煉、三二六頁一六行以下、天、三八六頁七―九行、同、七の註一七等參照）。

二六、以下二節、――第一問の答。――地上、九百三十年。リムボ、四千三百〇二年。天國（神曲示現の時までに）。千二百六十六年。都合、六千四百九十八年なり（地、二一の註一六、三三の註一七參照）。

二七、以下次頁三行迄――第四問の答。――アダモの用ゐし言葉はネムブロットの民のバベルの塔建築（「成し遂げがたき業」、地、三一の註一八、煉、一二の註一二―一五參照）以前に亡び、其後は言語も亦理性の產物なるため諸天の影響を受けて絕えず變化し各種各樣のものと成りしも亦止むを得ずとなり（とは「俗語論」一の六に見ゆるダンテ自身の說と異れり）――「IとEI」の二者に關しては古來種種の解釋あれども「共に神の義なり。「I」は出所不明にしてダンテの創意にかかるといひ、或は此處にては jah と唱へらるべきにて、原始希伯來民族の神（Jah）の頭文字を表せるなりと（詩篇、六八の四に曰く、「神のみま

の物を映すなれど、何物もそれ自らにかの鏡を映すはなし――の中に見ればなり。

汝の聞かむとねがへるは、この淑女によりて汝が、かくも長き階を昇り得るものとなりし處なる、此高き園の内に神の我を置きたまひし後、いかに久しきを經たるやといふことなり。そがいつまでわが目の悅びなりしやといふことなり。大なる憤のまことの原因、また我が用ひしところの、わが作りしところの言葉のもと如何にといふことなり。

さて、わが子よ、かの大なる流罪の原因は木實を味へるその事ならで、ひとへにただ分を超えたることなりき。

汝の淑女のギルジリオを勸かしし處にて、四千三百二年の間我はこの集會をあこがれき。

また、わが地上にありし間に、我は太陽が其軌道のあらゆる光にめぐりあふこと九百三十回なるを見き。

わが語りし言葉はネムブロットの民が彼等の成し遂げがたき業を企てしより、久しき前に悉く絶えにき。

そは、天體に伴ひて人間の好みの推し移るにより、理性より生れて永遠につづくべきもの未だ曾つてあらざりしなればなり。

人の物いふは自然の業なり。されど次ぎに、兎言ひ角いはむは、自然のこれを汝等に委ねて、汝等の意のままになさしむるところなり。

わが地獄の苦みに降りゆきしより前には、我を包める悅びの源なる至上の善は、地上にてIと呼ばれしが、その後Elと呼ばれき。

へにうたへ、……かれの名をヤハとよぶ、……」）。――「El」は希伯來語にて「强き」又は「力ある」の如き意味あるに據れりといひ、或はそのまゝ希伯來語の神の義にて、馬太傳二七の四六に見ゆる「エリエリラマサバクタニ」のエリ（「我が神」）と同一なりといふ。

二六、以下終り迄。――第二問の答――アダモの地上樂園に在りしは午前六時頃より午後一時頃までの僅々數時間のことなり。――「第一の刻」は日出時。――「象限」は四分一圓（六時間行程）。それを「變ふる」とは次の四分一圓にさしかゝるの意。（アダモの地上樂園に在りし期間に就きては各種の想像說行はれしもダンテは玆に六時間說を採りし也）

第二十七歌

（第八天（恒星天）。凱旋の諸聖、その六。翌馬法王の罪惡。第九天（原動天）。第九天の特性。諸天使。）

一、「四の炬火」――三使徒（彼得、雅各、約翰）とアダモ。――「初めに來れりしもの」とは彼得なり（天、四七四頁七行以下）――「木星の若し」云々とは、木星がその白光（天、四四五頁一一行をば火星の赤光（天、四二五頁四行）と取り換はしたらむにはの意。

二、「これらの者」云々――諸聖徒の情は共通な

さて、これもまた免れがたき事ぞ。そは人間の慣習は、さながら樹の枝に、これなる葉の去りゆきて、かれなる葉の來るにも似たればなり。

波の上にいと高く赶ちたるかの山に、潔らかに又穩れて我がありしは、第一の刻より、太陽の象限を變ふるなる、第六の刻につづく刻までなりき。」

第二十七歌

「父に、子に、また聖靈に榮光あれ。」天國を擧りて斯く唱へ出で、そのめでたき歌は我を醉はしめたり。

我が見し物は、天地の一になりて微笑めるかと我に思はれき。そは我が醉心地の、耳よりも目よりも入りたればなり。

嗚呼歡びよ。嗚呼、言ひがたき悅ばしさよ。嗚呼、ただ愛と平和とのみなる生よ。嗚呼、この上の願ひもなき泰らかなる富よ。

わが目の前には四の炬火は燃えゐたりき。しかして初めに來れりしもの、いやあざやかになりまさり、そのさま宛も、木星の若し、火星とともに鳥にして、互に羽ををり換はしたらむには、かくもあるべきかと思はれたり。

順番と役々とを割りあつる攝理の、あまねく聖徒等の合唱をやめしれば（天、一九の註一參照）彼得と同じく義憤の情に驅られてその色を變ずる也。

三、「我が座席」――法王の地位（彼得は最初の法王なりしを以て斯く）。――之を「地上に墓ふものの」とは就中法王ボニファチオ八世を指せる也（地、三の註一四、同、一九の註一二、一四參照）。

四、「わが墓地」――羅馬。彼得は此地に葬られしと傳ふ（天、九の註三參照）。――「血と汚物との下水になせり」とは彼（ボニファチオ八世）の惡虐横暴のために也（地、一三四頁一六行以下並註二二、二三參照）。「天より墮ちし邪なる者」は魔王ルチイフェロ（地、七の註、三、四等參照）

五、「かの色」――赤色。

六、「いと高き力」――基督。その十字架にかゝりし時「晝の十二時より三時に至るまで其地あまねく黑暗となりし」こと聖書に見ゆ（馬太傳、二七の四五）。

七、「基督の新婦」――教會。――以下四行の間に擧げらるる人名は初代基督教に於ける法王及殉教者達なり（リイノ、クレエトの兩人は彼得の後繼者、前者は七九年、後者は九一年に共に殉教者として死せり。――シスト第一世、一二七年死（或は一三二年といふ）。ピ

めしとき、わが聞きしところの言に曰ふ。

「よし我が色を變へむとも巽むなかれ。そはわが語るをききて、これらの者悉く色を變ふるを汝は見るべければなり。

神の子の御前に空しくなれる我が座席[三]を、わが座席を、わが座席を、地上に纂ふものは、わが墓地[四]を血と汚物との下水になせり。かくてこの天上より墮ちし邪なる者も、かの下界にありて心安らかなり。」

この時我は、日と對ひゐて、朝に夕に雲を染めなすかの色[五]の、あまねく大空に漲るを見ぬ。

しかして、つつましやかなる淑女、自らやましきにあらざれど、他の過を、ただ聞くのみにして羞らふごとく、ベアトゥリイチェも亦その顏色を變へたり。思ふにいと高き力の患みたまひしときにも、斯くは大空に光の消えたりしことならむ。

さてピエエトロは、その容貌の變れるにも劣らぬほど、打ち變れる聲をもて續けて曰ふ。

「基督の新婦[六]のわが血によりて、またリイノの血、クレエトの血によりて育てられしは、黃金を得るの手段として用ひられむ爲めならず。むしろ此樂しき生を得む爲めにこそ、シストも、ピオも、カアリストも、またウルバアノも、多くの嘆きの後にその血を注ぎしなれ。

基督徒なる人々の中、われらの後繼者の右に坐する者と、その左に坐する者とのあるべきを、われらは志ざししにあらざりき。

我に委ねられし鍵が、受洗者との戰に旗標[七]となさるることも亦然

第一世、一五四年死。カアリスト第一世、二二四年死。ウルバアノ第一世、二三一年死）

八、この一節、――同く基督教徒にてあり乍ら一方は法王の愛顧を受け（右に坐し）他はその憎惡を蒙る（左に坐する）が如きは我等の志にあらざりきとの意。――こは法王黨たるゲエルフ黨とその反對派にて皇帝黨たりしギベリン黨との軋轢を指せる也。

九、この一節、――主としてボニファチオ八世のコロンナ家を攻めしことを指せり（地、一三四頁一七行並註一四參照）。

一〇、この一節、――免罪符その他の不正手段によりて神を賣り民を惑はすことも亦我が志にあらざりき（天、四四七頁七行以下並に夫等の註參照）。

一一、「貪慾の狼」――惡辣なる僧侶等。馬太傳七の一五に曰く、「僞の預言者を謹めよ彼等は綿羊の委にて爾曹に來れども內はあらき狼なり」。

一二、「カオルサ人等とグァスコニア人等」――カオルサ出身の法王ジョヴンニ第二十二世（天、四四七頁一五行以下並註二五參照）とグァスコニア出身の法王クレメンテ第五世（地、一九の註二〇參照）及び彼等の一味徒黨を指せる也。――「我等の血を」云々とは、我等の血と殉教

り。

一〇我が像を印形にきざみて、利を營み人を欺く特典に用ひ、我をして屢々恥ぢ且つ憤らしむることも亦然り。

この高き處より見るに、牧者の衣をまとへる貪慾の狼[一一]はあらゆる牧場の上にあり。嗚呼神の御加護よ、いかなれば汝は尙ほも起たざるや。

カオルサ人等とグァスコニア人等[一二]とは、はやも我等の血を飲まむとす。嗚呼善き始めよ、汝のいかにあさましく成りはてざるを得ざるものぞ。

されど我が思ふに、スシピオネ[一三]によりて羅馬に世界の榮光を保たせたまひし高き攝理は、間もなく助けたまふべし。

さて子よ、汝はなんぢの人體の重きによりて、再び下界にかへりゆくなれば、汝の口を開きて、わが包まざる事を包まず語れよかし。」

あだかも、天の磨羯の角に太陽の觸るるとき、凍れる水氣の霏々[一四]として我等の空よりふり來るが如く、我はかの精氣のうるはしくせらるるを見、またかしこに我等と共にとどまれりし勝ちほこれる火氣の、その中を片々と騰りゆくを見き。

わが目は彼等の姿に從ひゆき、間の大なるによりて、つひにその上を進み得ざるにいたりて止みぬ。

ここに於てか、わが仰ぎ見ることをやめたるを見て、わが淑女は我に言ふ、「汝の目を垂れて、いかに汝のめぐり來れるやを見よ。」

とに依りて築き上げし教會（天、四四七頁八行以下參照）を橫領し、その財を私用せむとすとの意也。

一三、「スシピオネ」――彼のザマに於ける大捷は世界帝國たるべき羅馬のための天祐なりしとなり（天、六の註二二、地、三一の註二五參照）。

一四、「天の磨羯の角に太陽の觸るるとき」――太陽の磨羯宮に入るは眞冬（十二月より一月へかけて）なり。「霏々たる雪片に似て今や凱旋の諸靈は火の片の如く上天にのぼり行く也」

一五、「我は見き」云々――天、四六七頁終行以下にて下界を俯瞰せし以後ダンテは九〇度を西方に動きて正に六時間を經過せり。即ちその間に彼はゼルサレムメの子午線より西班牙の子午線までを廻轉せしなり。――「第一帶」とは、當時の地理學にて人の住める北半球を赤道に並行して七帶に分ちしものの第一にして赤道の北方凡そ二〇度までを幅とし（但し各帶の幅は同一ならず）、ゼルサレムメの子午線を以て中央とせる部分也。――今ダンテの居る双兒宮は此の地球の第一帶に相應せる天上の一部也。

一六、「ガアデ」――現今のカディス、西班牙西南岸の海港――「ウリッセの物狂はしき航路」に

我は見き、[一五]はじめ我が見たりし時より、第一帶の中程とその端との弧線悉くをめぐり終へゐたりしことを。

すなはち、ガアデ[一六]のかなたにはウリッセの物狂はしき航路を見、こなたにはエウロパ[一七]がなづかしき荷となりし、かの岸のあたりを見き。

太陽にして若し、我が足の下に一天宮の餘[一八]を進みたりしにあらずば、この小さき打穀場[一九]は、更に廣くまでわが目に見えしなるべし。

絶えずわが淑女にまつはり寄るわが愛着の火は、常にもまさりて燃えさかりつつ、復び彼女のかたに目をむけしめつ。

自然または人工のよし、心を囚にせむ爲め目をひく餌をば、人間にまたはその繪に置きたるを一になさむとも、彼女の微笑めろ面にわが向へるとき、われを照らしし神聖の喜びにくらぶれば、げに何程の物とも見えざるべし。

さて彼女の面持の我に與へし能は、我をレエダの麗しき巣より引きはなし、かのいと速き天に推しすすめき。

そのいづれの部分も、いとけざやかに氣高く、しかも互に相似たる情態なれば、我はペアトゥリイチェがいづれを撰びて我が居る處になしやを云ふこと能はず。

されど彼女は我が願を見、その顏に神の悅びのかがやけるかと思ふほど、甚くよろこばしげに微笑みながらいふ。

中心なる地球を不動のままにし、ほかの總てを其周圍に動かすなる宇宙の性は、この處を源として流れいづ。

つきては地、一三〇頁二行以下並註二二參照。

一七、「エウロパ」――フェニチア王アジェノオルの娘、カドゥモスの姉妹。ジョオヹ神彼女を戀ひし牡牛の委となりて行きて彼女を誘ひ乘せクレタ島に渡りぬ。此處にて彼女はミノス（地、五の註二參照）他二人の子供の母となれり（オギディオ、「メタモルフォオシ」二の八三三―七五）。――「かの岸」はフェニチアの海岸。而してそは殆どゼルサレムメと子午線を一にせるを以て、此處は結局ゼルサレムメを見たりとの意なり。

一八、「一天宮の餘を」云々――白羊宮中に在る太陽と双兒宮中にありしダンテとの間には金牛宮の一天宮介在せしを以て太陽の方が凡そ三時間ばかり先に進めり。そのためにフェニチア海岸以東の半球は既に夜の影に蔽はれて生憎と見るべくもなかりしと也。――「小さき打穀場」につきては天、二二の註二五參照

一九、「レエダの麗はしき巣」――双兒宮（煉、四の註一〇參照）。――「いと速き天」とは原動天。

二〇、「中心」――地球（地、三二の註二參照）。

二一、「一の環」――神の自ら支配し給ふ至高天。

二二、この一節、――原動天に包まれたる諸天の運動は原動天を元として測定せらる。此の標準は一日なり。故に時間の概念は原動天に發

又この天には、神意をほかにして、これをめぐらしむる愛の、またこれを雨り下らしむる力の燃ゆる處はなし。

光と愛とのこれを包むに一の環[二一]をもてすること、あだかも此環の他なる諸の環を包むが如し。しかして此環をとりまけるもの、唯だ彼のみぞこれを司りたまふなる。

この天の運行は他の運行によりて測らるることなけれど、他の運行は皆これによりて測らるること、あだかも十なる數の、その半ばによりて、またその五分一によりて測らるるが如し。

さて、時なるものの斯かる植木の鉢[二二]に根をかくされ、他なる諸の鉢に葉をあらはせる次第は、今や汝に明らかなるを得む。

嗚呼、貪[二三]の心よ、汝が人間を汝の下に壓し沈むるにより、何者も汝の波よりその目をあぐる力なし。

意志は人々の中に良き花を咲くなれど、絶間なき雨は眞の李を蝕まれたる實になすなり。

信仰と純一とはただ幼兒等の中にのみ見出さる。さて頰鬚の生ふるに先きだちていづれも逃れ去る。

片言をいふ間は斷食を守れる者も、やがて舌の弛むにつれて、いかなる月の下に、いかなる食物をも食ふにいたる。

また、片言をいふ間はその母を愛し、その母に聽き從へる者も、やがて其言葉の整ひ來るや、その母の葬らるるを見むことをねがふ。

かくの如く朝を齎らし來り、夕をのこしゆく者の麗しき女の肌は、

したりといふべし。――「十なる數の」云々とはたゞ完全なる測定の可能なることを示せるに過ぎざるべしといふ。

二二、「植木の鉢」――第九天。その運行は見えず且つ知り難し、恰も木の根のかくれて知られざるに似たり。――「他なる諸の鉢」とは爾餘の諸天なり。その運行によりて時間を測定し得ること恰も葉のあらはにて人に知らるるが如し。

二四、以下次頁三行目迄、――ペアトゥリイチェ、人間の私慾を非難す。「人間は眼眸を上に向くることはせずして却つて之を地上の財に向はしむ。即ち世俗的墮落の雨が善行の果實を害する也」

二五、この一節、――アリストテレエスの說に從へば「人は人と太陽とより生るる」也。かくて太陽の娘たる人類は初めの程は年少期に於ける無邪氣のための白き皮膚をもてるも、生活苦の嵐や日燒を經るに及べばその美しさも次第に黝みて來るとなり。

二六、以下終り迄、――やがては地上に救濟の偉人現はれて世の不正を一掃し盡して人々を惡より善に向はしむべしとの意。――「百分の一」とは、當時行はれしジュリアアノ曆の計算による誤差なり、即ち、それによれば一年は

その初めに白く見ゆるも後黑し。
汝がこれを異しまざらむ爲め、思ひ見よ、地上には如何なる治むる者もなきことを。人間の屬のかく迷へるも亦この故なり。
されど、下界にて等閑にさるるかの百分の一により、一月のまたく冬期をはなれ去る前に、これらの天體は鳴り轟き、待ちに待たれし嵐は、舳のありし處に艫をめぐらし、船みなを直く走らしむべく、かくして花のあとに眞の實の來るべし。」

第二十八歌

わが心を天國にひきあぐる彼女が、あさましき人間の現前なる情態と相容れざる眞實を顯はし示したりし後、我はあだかも、未だ見ず思はざるうちに、己が背後にともされたる燈火を鏡の中に見、さて玻璃の眞實を語るや否やを見むとてふりかへり、ふたつの物の相合ふこと曲譜の歌詞に於けると異らざるを見る人の如くなりき。
思ひ出づれば、その如く私はかの美しき目、卽ち『愛』の我を捕ふる索になししところの目に見入りしが、やがて我がふりかへり、かの天球のめぐるを凝視するとき常に彼處にあらはるるものの我が目にふれし時、我は鋭き光を放てる一點を見き。
げに斯かる光に照らさるる目は、その甚だしく鋭きによりて閉ぢらるるを得ざるべし。
又この地上よりいと小さく見ゆるいかなる星にてもあれ、星の星とならぶ如くかの一點と並びなば、一の月ほどにも見えたるべし。
日月の暈の、これを荷へる水氣のいと濃きとき、これを彩れる光をとりまきて見ゆる、恐らくはそれほどにも近く、一の火の輪はかの一點の周圍をまはり、その速きこと、いと疾く世界を卷くなる、かの運行にさへ勝るかと思はるるほどなりき。
さてこの輪は今一つの輪に卷かれ、第二の輪は第三の輪に、第三は第四に、第四は第五に、第五は第六の輪に卷かれたり。
これにつづける第七の輪は、今や甚くひろごり來りたれば、ジュノネの使者の全きも、これを容るるに足らざるべし。
第八第九の輪もまた以上の如し。しかして何れも、一より數のすすむにつれて、めぐり動くこと愈々遲し。
また、かの純潔なる火花にいと近きものは、いと明けき焰をあげたり。わが思ふには、かの火花より眞實をわかたることの、まさりて多きが爲めなるべし。
わが淑女は、深くも思ひまどへる我を見ていふ、「天もあらゆる自然も、かの『一點』によりていかにともなるものぞ。
かれにいと近く隣れるかの輪を視よ。また知れ、その動くことのあれほどにも速きは、それを驅りたつる愛の焰の爲めなることを。」
さて我は彼女にいふ、「宇宙にして若し、それらの輪にわが見る如き

三百六十五日四分の一とせられしもそは實際よりは十一分十二秒（卽ち凡そ一日の百分の一）だけ超過せり。故に約百年を以て一日の誤差となり、更に數千年の後には移り移つて一月は冬にあらずして春となるに至らむ。故に、それより「前に」とは、結局、久しからずしてとの意なり。——「眞の實の」云々とは四九三頁一三—一四行のことに照應して述べられしなるべし。

第二十八歌＝（第九天（原動天）。諸天使、その二。天使の階級。）

一、「我はあだかも」——以下次頁三行目迄、ベアトゥリイチェの眼に鋭き一點の光の輝けるを見てダンテが其何物なるかを確めむとて其光の本體の方へ身をめぐらし次第を述ぶ。（神の榮光は啓示せられたる天の眞理の象徵たる（煉、三〇の註八參照）ベアトゥリイチェの眼に先づ映じ次にかゝる觀想に眞面目に沈潛する凡ての人の眼に於けると同樣に、ダンテの眼にも直接映ずるに至る也（バッセルマン註）。）
二、「常に彼處にあらはるるもの」——原動天をつゝめる光と愛。
三、「一點」——神の榮光。その絕對不可分なることに於て神性の單一の表象たり（天、四一八頁二〇行以下並註六參照）。
四、「水氣のいと濃きとき」——水氣の濃きに從ひて日月の暈は愈〻狹し。
五、「一の火の輪」——天使セラフィイニの一群（天、三七〇頁五行以下並註四參照）。
六、「第二の輪」——天使ケルビイニの一群。—以下第九に至るまでの九個の輪は天使の九階級を表はせり（四九七頁一六行以下並夫等の註參照）。
七、「第七の輪」——こは既に甚だ大にして虹も之を容るる能はざる程なり。—「ジュノネの使者」とは虹の女神イリイデにして虹の事也（天、一二の註二、煉、二一の註一一參照）。
八、「純潔なる火花」——「一點」と同く神の榮光
九、「天もあらゆる自然も」云々——殆ど文字通りアリストテレエスの「形而上學」（天、二四の註二二參照）より引用せり、曰く、「天および自然の一切は此の根源（第一原因）に依存せり。」（天、二六の註八參照）——「かの『一點』は此の「第一原因」に當れり。
一〇、「宇宙にして若し」云々——諸天は宇宙の中心たる地球を遠ざかるに從ひてその廻轉愈〻速かなるに、至高天の九個の輪にありては之に反してかの「一點」より遠ざかるに從ひてその廻轉愈〻緩かなり。此の矛盾は如何との疑

秩序にあらば、わが前に置かるるものも我を滿ち足らはしたるべし。

されど、官能の世界に於ける廻轉は、その中心を遠ざかるにつれて、愈々神々しく見らるるを得るなり。

この故に、ただ愛と光とをのみその境界にもてる、この奇しき天使の殿堂にて、わが願の全うさるることを得べくば、更に我は、何故原の型とその寫しとの一樣ならざるやを聞かざるを得ず。我ひとりにてこれを考ふるも益なければなり。

「汝の指のよし、斯かる結目を解くに足らざらむとも、そは聊かも異しむべき事ならず。この結目は解き試みられざるによりて、それほどにも緊くなれるものぞ。」

斯く我が淑女は言ひしが、やがてまたいふ、「汝若し、心の滿ち足らふことをねがはば、わが汝に告ぐるところを聽き取り、それにつきて汝の理解を鋭くせよかし。

形而の諸の球體は、その各部にゆきわたれる能の或は多く或は少きにつれて、或は廣く或は狹し。

善きことの大なれば、福祉の生ずることも大ならざるを得ず。物體の大なるは、その各部にして等しく完からむには、福祉の大なるを包容す。

乃ち、己自らと共に宇宙の爾餘一切を進轉せしむる此天球は、いと善く愛し、いと善く知るなるかの輪に相應せり。

この故に汝の尺度を、汝に聞く見ゆる物の外見に置くことなくして、その能に置きなば、汝はいづれの天もその天使と、即ち、大なるは神に近きと、小なるは神に遠きと、奇しくも相適へるを見るならむ。」

ボオレアが、そのいと柔和なるを示すところの頰より吹くとき、半球をなす空氣は見事に晴れ渡り、さきに立てこめたりし霧のあとかたもなくして、蒼天はあまねくその美しさをもて我等に笑みかくるなり。

我が淑女がその明らかなる答を我に與へたりしとき、我も亦その如くになり、眞實は天の星を見るごとくに見られき。

さて彼女の言葉のとどまりし後、諸の輪は火花をはなち、そのさま融けたる鐵の火花を散らすに異るところなかりき。

火花はいづれもその焰に伴ひ動き、しかもその數の夥しき、將棊の倍加にまさること幾千といふほどなりき。

我は、彼等をその常にありし處にとどめ置くべき、かの動かざる一點にむかひて、彼等が組より組へとオザンナを歌ひつづくるをききぬ。

さて彼女は、我が心の衷なる疑ひを見ていふ、「初めの輪はセラフィイニとケルビイニを汝に示したり。

斯くも速かに彼等が彼等自らの絆に遵ふは、力の限りかの一點に彼等自らをひとしうせむ爲めなり。しかしてその見る處の高きに比例して、よくこの事をなし得るなり。

彼等の周圍をめぐる他なる愛は神の御前の寶座と呼ばる。そが第一

問をダンテは今抱きし也。

二、「原の型とその寫し」――原の型とは今ダンテの目堵せる神を中心とせる諸靈智（諸天使）の廻轉にして、その寫しとは之等の諸天使が影響を及ぼし且つ地球を中心とせる諸天の廻轉なり。

三、この一節、――官能界に於ける最大の天は天使の殿堂に於ける最小の圈に相當せり。その理由は次の如し、全宇宙の究極たる神を中心として之に最も近く、從ひて最も狹き圈を描きて廻轉せる天使の群は、天使の群の中にて最大の力を有せる也。既に最大の力を有するからにはそれに相應して最大の天を支配せざるを得ず。かく天使等の力に應じてそれ相當の天を支配するにより、天使の殿堂に於ける圈の大小と官能界に於ける天界の大小とは反比例する次第なり。

三、「かの輪」――天使セラフィイニの圈。

四、この二節、――註一二參照。

五、「ボオレア」――北風。――「そのいと柔和なるを示すところの頰より吹く」とはブルネット・ラティイニの「寶庫」（地、一五の註六參照）に說ける如く「ボオレアが左の頰より吹く」との意にて北東の風を指せる也。此の北東の風はよく空の雲を拂ふものと傳へられし也。

六、「將棊の倍加」――將棊を發明せし男或る時波斯王に謁しその大いに喜びて何にてもあれ望みの物を取らせむと言ひし時、麥の粒をば第一目に一、第二目に二、第三目に四、第四目に八の順序に即ち幾何級數的に增加して最後の第六十四目に及べるものの總量を求めたり。王その望みの小なるを笑ひて言下に快諾せしに計算の結果は實に二十桁の莫大なる數となり（ベッセルマン註に據れば、18 Trillion-en――1 Trillion は百萬の三乘數――446774兆にて、海をもこめし地球全面の穀物總收穫の八倍なりといふ）その到底應じ難きを知りて謝れりとの名高き傳說之なり。――ダンテは此の引例によりて天使の數の夥しきを示さむとせし也。

七、「初めの輪は」云々――註五、六參照。――「セラフィイニ」は原動天を司り、「ケルビイニ」は恒星天を司れり。〔前者は「以賽亞書」六の二其他に、後者は「詩篇」八〇の一其他に見ゆ〕

八、「他なる愛」――第三の天使群にして「寶座」と呼ばる（哥羅西書、一の一六其他に見ゆ。天、九の註一三參照）。土星天を司れり。

〔以上三つの天使の群は天使の第一階級をなすもの（「そが第一の三重に終りをなすもの」）

の三重に終りをなすものなればなり。

さて汝は知るべし、あらゆる理智の休らふところなる眞實[一九]へ、彼等の靈覺の入りこむことの深きに比例して、いづれも其悅びを享くるものなるを。

乃ち、福祉[二〇]が見るといふ働きにもとづき、愛するといふ、後に來るところの働きにもとづくにあらざる次第は、これによりて明らかにされたるならむ。

又、この見るといふことの尺度となるは、恩寵と善意との生むところの功德なり。次第を追うて事物の進行することかくのごとし。

夜の白羊宮の荒らすことなき、この永劫の春にして同じく萠えいづる次ぎなる三重[二一]は、その三重をつくり成す、三品[二二]の悅びとして聞ゆるなる、三通りの諧調[二三]をもて絕えずオザンナを歌へり。

この神々しき一組の中に三の位あり。第一は統治[二四]、第二は德能[二五]、第三は威力[二六]なり。

次ぎに、最終[二七]なるに近く舞ひめぐれる二人は、君權[二五]と大天使[二六]とにして、いやはてなるは總じて樂しき天使[二七]なり。

これらの位にあるもの皆上を仰ぎ見、また下方へ働きかくるにより、いづれも神のかたへ引かれつつ自ら引く。

さて、ディオニイジ[二八]は大なる憧憬をもてこれらの位を考察し、わがなせる如く、これに名づけこれを分ちたりき。

されど其後グレゴオリオ[二九]は彼より離れき。さればその目を此天にて

にして、神に向ふこと、神を見ることを表はせり。而して、セラフィイニは愛せられたる者に於ける愛する者の燃ゆる昇騰を、ケルビイニは愛せられたる者および彼の愛すべき價値ある特質の明かなる認識を、寶座は萬物の上に君臨して之を裁きたまふ神のために御座として自己を提供することを、夫々に表はせる也（バッセルマン註）〕

一九、「眞實」――神。天、四の註二〇參照。

二〇、「福祉が」云々――福祉は神を正覺する（見る）こと、知ることに基きその後之を愛するに至ること也。故に正覺する（見る）ことは愛することに先立てり（天、四二三頁一四―一六行參照）。但しダンテの眞意は神に關する知識（冥想）が直ちに神に關する愛（善行）に優れりとなすにあらずして、たゞそれを眞に正しき善行の根源として重じたるに過ぎざる也。（尙、煉、二七の註一三、一四、一五、同、二八の註八等參照）。

二一、「夜の白羊宮の」云々――白羊宮は秋分以後翌年の春分までは夜の空に在り。――秋や冬の凋落荒涼を知らずして常春なる天國の意。

〔以下五行、天使の第二階級に就きて述べられたり（次なる三重は」云々）。此の階級は全世界を指導するための有力なる支配を表はせ

開くに及び、自ら顧みて微笑みき。

又、人間のよし、祕密なる眞實をこれほどまで地上に宣べたりしとも、我は汝の異しとすることをねがはず。

そは、この高き處にこれを見し者、これらの輪につきての他なる多くの眞實と共に、これを彼に顯はし示ししなればなり。」

第二十九歌

ラアトナの二人[一]の兒等が、『白羊』によりて、又『天秤』によりて蔽はれ、同じ一刹那に地平を帶になすころほひ、天心の彼等に平衡を保たしむるときより、かれとこれと互に半球を取り換はし、かの帶を離れて平衡を破るにいたるまで、ベアトゥリイチェは其面に微笑をうかべて、かの我に打ち克ちたりし『一點』をつくづくと見守りつつ默したりき。

やがて彼女は口を開きていふ、「我は汝がきかむと願へるものを、問ひ尋ぬるにはあらで告げ知らさむ。そは、我はそれを、あらゆる『何處』とあらゆる『何時』との集中したるところに見たればなり。

『永遠なる愛』は彼自らに福祉を獲ること（そはあり得ざる事なり）の爲めならで、寧ろ、彼の榮光の照りかがやきつつ、『我あり』を言ひ得むことの爲め、その意のままに、時のそとにいで、あらゆる他の限界

り。その各々に關しては註二二、二三、二四に於て述ぶべし」

三、「統治」――木星天を司れる天使（哥羅西書一の一六）。――限りなく自由なる命令の思想を表はせり。

三、「德能」――火星天を司れる天使（以弗所書、一の二一）。――此の命令遂行のための男性的能力を表はせり。

三四、「威力」――太陽天を司れる天使（以弗所書、一の二一）。――あらゆる敵對的妨害を遠ざくることをもこめて此の命令の遂行を表はせり。

〔次の一節（四九八頁一五―一六行）に於て天使の第三階級に關して述べられたり。此の階級は人間の個々の運命の指導、從ひて天使本來の任務たる神の使ひを司れり。その各々につきては註二五、二六、二七に於て述ぶべし〕

三、「君權」――金星天を司れる天使（哥羅西書、一の一六）。――個々の人間への影響に關する指導的監督を表はせり。

三、「大天使」――水星天を司れり（テサロニケ前書、四の一六）。――個々の人間に對する重要なる祝福の普信その他一般的なる事柄の使ひをなす。

三、「天使」――月天を司れり。――個々の人間

の外にいでて、彼自らの永遠性の内にして、新なる愛に彼自らを顯はし示せり。

それより前にも彼は、働らかざるが如くにして休らふことなかりき。そは、これらの水の上に神[五]の動きたまひしは、前に起りし事にもあらず、後に起りし事にもあらざればなり。

形[六]式と物質と、或は結合して或は單獨に、何等の缺ぐるところなき存在となりしは、三の弦を張れる弓より三の箭の走りいづるが如し。

しかして玻璃に於て、琥珀に於て、また水晶に於て、これを照らす光の、入りはじむるより入り終るまでの間に、些かの隙もなきごとく、かの三樣なる成果は、みな立處に其『主』より輝き出でしものにして、いづれを初めとも別きがたし。

これらの三の物の造られしとき、その間なる秩序もまた立てられき。しかして純粹なる働きをなす者等は宇宙の頂きにありき。

純粹なる潛勢はいと低き處を占めき。中程には一の紐ありて潛勢と働きとを、つひに釋かるることのなきほどに緊く結び合せき。

ゼロニモ[八]は天使等が、宇宙のほかなる部分の造られしより、幾百年も久しき前に造られしといふことを汝等のために書きしるしき。

されど、わがいふ此眞實[九]は聖靈を受けたる記者達によりてあまた度しるされたり。汝もし意を留めて見なば、汝自らよくこれを辨へ知ることを得む。

しかして理性もまた聊かはこれを會得するならむ。そは動力者等[一〇]の祝福のための使者をなす也。

二八、「ディオニイジ」――天、一〇の註一六を見よ。ダンテは彼の「諸天使階級論」に從ひて此處の說をなせし也。

二九、「グレゴオリオ」――大法王グレゴオリオ第一世（五四〇―六〇四年）。初め法律を學びしも父の死後財產を公共事業に提出し又寺院を設立し、五九〇年には辭退せしにも拘らず法王に選ばれ其後異端異敎に對して戰へり（煉、一〇の註二）、天、二〇の註一四參照）。――

「彼より離れき」とは天使諸階級を分類するに當りディオニイジと異りしことを指せり。

三〇、「この高き處にこれを見し者」――使徒パオロ（地、二の註八參照）。――ディオニイジが、聖パウロ（地、二の註八參照）。――ディオニイジが、見聞せし使徒パオロより、天使の階級に關する說を傳へ聞きしといふことは、彼自身並びにその註釋者アルベルトゥス・マグヌスの特に强調して誌せるところ也といふ。

第二十九歌＝〔第九天（原動天）。諸天使、その三。天使創造論。說敎者の虛妄。〕

一、以下六行、――ベアトゥリイチェの默したりし時間の甚だ短きを喩へしなり。――「ラアトナの二人の兒等」とは日と月（煉、二〇の註

の、その如く久しく完きを得ざりしとは、理性の認むるを欲せざるところなればなり。

今や汝は、何處[一]に、何時[二]、また如何にして此等の『愛』の造られしやを知れり。乃ち汝の願望の三の焰は既に鎭められたり。

數[三]をかぞへて二十にも到らざるうちに、はやくも天使のあるものは汝等の四大のいと下なるを擾しき。

その餘の天使等は其儘にありて、汝の視るなる此技を始めしが、その悅びの大なるによりて、舞ひめぐるを休むることなし。

墮落の起因は、世界のあらゆる重みに壓しつけられたる汝の見し、かの者の詛はしき慢心[三]なりき。

ここに汝の見る天使等は、謙遜にして、斯くも大なる智慧を彼等に與へたる至善より、彼等自らの出でたることを認めき。

この故に、彼等の靈覺は恩寵の光と彼等の功德[一四]とによりて高められ、彼等に一のかたき意志は備はりたり。

ねがはくは疑ふことなくして信ぜよかし、恩寵をうくるは功德にして、しかも恩寵を迎へいれむとねがふ情の强き弱きに比例するものなることを。

乃ち、わが言葉にして若し取りいれられたらむには、汝はよく他の助をからずとも、この會衆につきて多くの事を想見するを得む。

されど[一五]地上なる汝等の學堂にては、天使に理解し、記憶し、意欲するの性[一六]ありと敎へらるるなれば、我は更に語りて、かかる敎說[一七]の曖昧

四九參照）。「白羊」宮と「天秤」宮とは正反對の位置にあり。故に、晝夜平分時に於て日月の一つ前者の中にあり、他の一つ後者の中にありて同時に地平線にかゝる時は天心より離るること兩者相等しくこゝに平衡を保つ也。されど、そは僅かに一瞬間のことにて忽ち一方は地平線上に昇り、他方は地平線下に沒し去る也。

二、「あらゆる『何處』とあらゆる『何時』との集中したるところ」――神。

三、「永遠なる愛」――神。――天使の創造せられし動機は神の愛なり。〔以下五〇一頁四行目まで、――天使創造の理由、時、處に關して論ぜらる〕

四、「その意のままに」云々――心的自然および物的自然は時間と同時に創られたり。換言すれば天地創造の後はじめて時間（並びに空間）はあり。それ以前にはたゞ際限なき現在が在りしのみ。――「新なる愛」とは「永遠なる愛」（神）に對して被造物を表せる也。

五、「これらの水の上に」云々――創世記、一の二に曰く、「地は定形なく曠空くして黑暗淵の面にあり神の靈水の面を覆たりき」――天地創造の大業は時間を超越したれば之に前後するものあることなし。

なるにより、下界にてかきみだされたる、純一なる眞實を汝に見しむべし。

これらの實體は、はじめ神の聖顏を見て悅びしよりこのかた、彼等の目をそれより背けたることなく、しかも神の聖顏にかくさるる物はあることなし。

されば彼等はその靈覺を新しき事物によりて阻まらることなく、從つて抽象されたる概念によりて記憶することを要せざるなり。

すなはち下界にては、眠らざるに見し夢を、或は眞と思ひて、或は眞と思はずして口にす。しかも遲と恥と、後の場合に於て勝りたり。

汝等地上の人々は理を談ずるにあたりて一の路を行くことなし。外見に愛着し拘泥するの情は、かくまで汝等をまどはすなり。

しかも尙ほこの事は、聖典のすて去られ、またはねぢまげらるるに比ぶれば、この高き處に憤りをまねくこと寧ろ少し。

聖典の種を世に播かむため、いかに多くの血の流されしや、つつましくこれに服へる者のいかばかり好ばるるやを人々は思はず。

各外見のよきことを追ひ求めて、それぞれに新しき說を立つれば、それらのものは說教者達によりて論らはれ、福音は聞かるることなし。

一人はいふ、基督の受難のとき、月の引きかへして間を隔てしにより、太陽の光は地にとどかざりきと。

また一人はいふ、光自らのかくれしなれば、この蝕は猶太人のみな

六、この一節、――單獨（或は純粹）なる形式は天使（天、五〇〇頁一二―一三行參照）、單獨（純粹）なる物質は精神なき物體界、形式と物質と相結合せるは人間なり。而して之等三者の創造せられしは全く同時なりき（一三の弦を張れる弓より」云々）。

七、以下二節、――以上の三者が創造せられしと同時に天使の三階級（天、二八の註一八、二一、二四別言參照）も亦創造せられきとなり。――「純粹なる働きをなす者等」とは純粹形式たる諸天使（註六）にしてエムピレオの天（「宇宙の頂き」）に置かれき。――「純粹なる潛勢」とは純粹なる物質（註六）の意にして地上（「いと低き處」）に置かれき。――「中程」には「緊く結び合」されしもの卽ち形式と物質との相結合して他より働きを受けつゝ而も他に働きを及ぼす諸天（天、三六二頁終二行參照）が置かれき。

八、「ゼロニモ」――羅甸教會の名高き教父にして後ベツレヘムに赴き四つの修道院を起し自らもその一つに居りて世を終へたり（三四〇―四二〇年）。――ベツレヘムに在りし時彼は希伯來語より舊約聖書の羅甸語譯を成し後の羅甸語譯聖書の基礎をつくれり。――天使創造の時に關する聖ゼロニモの說は提多書の註

らず、西班牙人にも印度人にも見られたりきと。

フィレンチェに多きラアポもビンドも、年毎にここかしこの敎壇より叫びいださるる如き浮說の數多きにはしかず。

乃ち、何をも知らぬあはれなる羊の群は、ただ風をのみ食らひて牧より歸る。しかもその害あることを知らざるは、彼等を責なしとするに足らざるなり。

基督は彼の初めの仲間に、『ゆきて閑話を世に宣べつたへよ』と言ひたまひしにあらず。彼は眞の礎を彼等に與へたまひき。

しかして此礎のみ彼等の口より出でたれば、信仰を燃え立たす戰に、彼等は福音をもてその楯とも槍ともなししなりき。

今や人々は諧謔と道化とをもて敎を說き、善き笑だにあらば、僧帽は自ら得たりとなして膨らむ。しかしてこの上に何物も求めらるることなし。

されど頭巾の端には一羽の鳥ありて巢へり。群衆にしてこれを見ば、彼等がいかなる赦罪に倚りたのめるやを知ることを得む。

乃ち、此のごとき大なる愚かさは地上に蔓りて、何等のたしかなる證もなきに、人々はあらゆる約束に寄りつどへり。

この事によりて聖アントニオの豚と、それよりも遙かに豚なる他の者等とは、贋造の貨幣をもて拂ひつつ肥え太れり。

されど、我等は少からず横に逸れたれば、今汝の目を正しき道にかへして、時をも道程をも短かくせよ。

釋中に見ゆといふ。但し、彼の說に對してトマス・アクヰナスはその「神學綱要」一の六四に於て反駁をなせり。

九、「此眞實」――天使等が宇宙の爾餘一切の部分と同時に創造せられしこと。――「聖靈を受けたる記者達」とは諸々の聖書の記述者達也。

一〇、「動力者等」――諸天の運行を司る天使達。――「完きを得ざりし」とは天使に對して諸天の創造せられしは遙かに後なりきとの說に於ては久しく天使が無用なりしわけにてかくの如きは完全なる神の御業（兩者は同時に創造せられしを以て何等の不都合なかりき）を誤解する所以なるを以て、そは「理性の認むるを欲せざるところ」なりとの意。

二、この一節、――天使（「此等の『愛』」）の創造に關して「何處に」の答は「宇宙の頂きに」（五〇〇頁一二―一三行）、「何時」の答は宇宙の爾餘の部分と同時に（四九九頁自終三行目以下、又五〇〇頁八行以下）「如何にして」の答は「純粹なる働きをなす者」（五〇〇頁一二―一三行）として也。――之によりて汝の疑問は氷解したるなるべしとの意。

三、この一節、――此處は天使の創造とその一部の者の墮落とは殆ど同時なりきとの當時の神學說に據れる也（地、三四の註二三參照）。

そもそも天使の數[二六]は極めて多く、人間の思ひも言葉も追ひ及ぶこと能はじ。

汝若しダニエエレの顯はし示しし事を思ひはからば、彼の幾千語の中に定かなる數のかくされたるを知るならむ。

彼等はあまねく照らす大本の光は、それと合一する輝きのさまざまなるが如く、さまざまに受け取らる。

乃ち、情感は會得のはたらきに從ひ來るものなれば、彼等のうちなる愛慕は、各その溫熱の度を異にせり。

今見よ、永久なる至善の高きと廣きとを。そは、かの至善は己自らの爲めに斯くも夥しき鏡を造りて、それらの上に割き分たるれども、尙ほ且つもとの如く自らの一たることを失はざればなり。」

第三十歌

第六刻は思ふに我等を去ること六千哩の處に燃え、この世界は今や其陰影を傾けて殆んど水平をなすにいたるとき、我等の上に奧深き中天は漸く白みそめて、はやくも一の星をして下界なる我等の目に消えゆかしむ。

かくて太陽のいとけざやかなる侍女の愈々進み來るにつれて、天上の光はひとつびとつとささされゆきて、そのいと美しきものにさへ及べ

——「二十にも到らざるうちに」とは其の極めて早く反逆せしを喩へし也。——「四大のいと下」とは地底也。

一三、「詛はしき慢心」——煉、一二の註二—五參照。

一四、「功德」——一部の天使等が反逆せし時後に殘りて忠實を盡せしこと。それがため彼等は何時までも天國にありて恩寵の光に浴することを得る也。

一五、以下四行、——諸天使は神に於てあらゆる事物の本質および今後起るべき事柄若くば既に起りし事柄を見る、故に彼等には何等の記憶といふ如きものを要せず。——かゝる人間類似の屬性を天使に歸して得々たる地上の學者等は誤れりとなり。

一六、この一節、——眞理に基かざる事柄を空想し、未だ論爭中の不確定なる事柄を敎へ込む等、その遣り方一として「過と恥と」を招かざるは無しとなり。

一七、以下五〇三頁一九行迄、——ベアトゥリイチェは當時の過てる說敎者等を非難痛罵す。

一八、この一節、——基督受難の時天地晦冥となりし（天、二七の註六參照）を、日蝕の所爲に歸せむとする一說。——「月の引きかへして」とは、當時太陽は白羊宮中にあり（地、一の註

り。

己が包めるものに包まるると見えつつも、我が目に打ちかちしかの一點の周圍を、永劫に舞ひめぐるなる凱旋の行列も、またかくの如くして、次第次第に我が目より消え去りぬ。

乃ち、何物をも我が見ざることと我が愛とは、我を促してベアトゥリイチェに目をむけしめぬ。

よし、彼女につきてこれまでに言はれたる悉くを、ただ一の讃美にまとめたりしとも、この度の用を辨ずるには足らざるべし。

わが見し美しさは、ただに我等の尺度を超えたるのみならず。げに思ふに、その造主のほかに悉くこれを享樂し得むものなかるべし。

我は告白していはむ、喜劇悲劇のいかなる作者も、その主題の難關にあたりて、我が此箇所に於ける如く挫折したることはかつてあらじと。

そは、太陽のいとかよわき視力に於ける如く、恰かもそのごとくかの甘き微笑の思出は、我が記憶の力その物を奪ひ去ればなり。

この世にて彼女の面を見し初めの日より、斯くして見るにいたるまで、我が歌をもて絕えず我は伴ひ來りしなるに、今や我が詞章の中にして、此上彼女の美を追ひゆくことは休められざるを得ず。いかなる藝術家も、その力の及びがたき處にいたれば亦かくの如くなるべし。

斯くそのむづかしき主題をのがれ去らむとせる我が喇叭よりも、更に大なる鳴物の告ぐるに委かすべきほどの彼女は、老練なる導者の身

一一參照）、而して月は反對の天にあり（此歌註一參照）、故に、此の日蝕說が妥當ならむには、その時月が六天宮を逆轉せざるべからざりし筈也。

一九、この一節、——又一說には月の所爲にあらずして太陽自らが光をかくせしを以て此の時の暗黑は地球の西の涯、東の涯にまで及べりと言ふ。

二〇、「ラアボもビンドも」——當時フィレンツェにて最も好まれ多く用ゐられし人名。前者はヤアコボの、後者はイルデブランドの、夫々に略稱。

二一、「眞の礎」——福音の眞理。

二二、「一羽の鳥」——鬼（地、一〇八頁一四行、同、三四の註七參照）。——その言ふところ聖靈の導きによらずして惡鬼の吹き込みに依れり。若し此の事實を知るに及べば何人か赦罪のために此の如き破戒僧に就かむとするものぞ。

二三、「約束」——免罪の約束也。

二四、「聖アントニオ」——埃及の隱者（二五一—三五六年）。僧院生活を創めし高僧。此處にては彼の派に屬せし諸々の僧侶等を指せり。彼等が豚を飼養せしため（彼等は徽章にも豚の臥したる圖案を用ゐき）多くの人々之に施物をなし、又フィレンツェ市中にても豚のために

振と聲音とをもて復びいふ。

「我等はいと大なる形體[六]より出でて、純潔なる光の天に來れり。この光は智の光にして愛にみちたり。この愛は眞實なる幸[七]の愛にして悅にみちたり。この悅はいかなるめでたさにも超えたり。

この處にて汝は天國の二隊[八]の軍勢を見るべし。しかも其一隊[九]をば、最終[一〇]の審判[一一]のときに見るごとき姿に於て見るべし。」

忽ち閃く光の視力をかきみだし、いと強き事物の印象をも目より取り去る如く、潑剌たる光[一二]はわが身のまはりを照し、その輝きの面帕[一三]をもて我を包みたれば、何物も我に見えざりき。

「この天を泰らかにする愛は、斯かる會釋をもて迎へ容るるを常とす。こは燭[一四]をしてその焰を受くるに備へしめむ爲めぞ。」

これらの簡かなる言葉[一五]のわが衷に入り來るや否や、我はわが自らの力を超えゐたりしを覺りき。

しかして一の新しき視力のわがうちに燃え立ちたれば、いかなる光も我が目の堪へがたきほど煌々たるはなきにいたれり。

さて我は、めざましき春景色を畫かれたる二の岸の間に、川の形をなせる光の漲り流れたるを見ぬ。

この流れより活ける火花は出でて、かなたこなたの花の間にとどまり、さながら金に嵌めたる紅玉の如くなり。

かくて、佳き匂に醉へるかのごとく、奇しき大水に再び沈み入り、一の火花の入るとき他の火花は出でゆきたり。

迷惑せし者多かりしも人々敢て之を咎めざりきと。――ダンテは今この一事に依りて僞りの免罪符を以て善男善女を瞞かし以て私腹を肥せる教會其他惡辣宗教家等を諷刺、痛罵せし也。

二五、「贋造の貨幣」――虛僞の免罪符。

二六、「天使の數」――但以理書、七の一〇に曰く「彼に仕ふる者は千々彼の前に侍る者は萬々審判すなはち始りて書を開けり」――神は天使の全數を知りたまへる也。

二七、この一節、――愛は見神による知識に從ふものなれば也（天、二八の註二〇參照）。

第三十歌

（第十天（エムピレオ）。神、諸天使及び諸聖徒。光の河、天上の薔薇。）

一、以下五〇五頁四行まで、――諸天使の圈の次第に見えわかずなりしを曙光の中に空の星の次ぎ次ぎに消えゆく樣に譬へたり。――「第六刻」（sesta）は正午なり（地、三四の註一六參照）。ダンテはアルフラガヌス（中世亞剌比亞の天文學者）と同樣に地球の周圍を二〇四〇〇哩となせり、從ひてその四分圓の長さは五一〇〇哩、故に正午卽ち太陽が「六〇〇〇哩」の彼方にある時その地は日出前一時間ばかりも也。されば地球の圓錐狀の陰影は反對の側に

「汝が見るところの物につきて知らむとて、今汝を煽り動かすなる高き願は、そのたかまるにつれて愈々わが心に適はむ。

されど、汝の中なるかくも大なる渦の鎭めらるるにさきだちて、汝はまづ此水を飲まざるを得ず。」

わが目の太陽は斯く我に言ひしが、やがて言葉をつぎていふ、「川[二]と、入り出づる諸の黃玉と、ならびに草の微笑とは、その眞實の面影を示す前置なり。

そはこれらの物その物のむづかしきにあらで、汝に足らざるところありて、未だ尙ほさばかり高きを見得ざればなり。」

常よりも遙かにおそく目覺めし幼兒の、乳に向ひて跳びゆく急がはしさも、わが目をば更によき鏡にせむとて我の、我等を尙ほも善くするために流るるなるかの水に、身をかがめしときのいそがはしさには如かじ。

しかしてわが眼蓋[三]の緣の水を飲みしと共に、かの長き流は圓くなれり[四]と見えき。

かくて假面をつけたりし人々の、其眞の姿を包める假の姿を脫ぎ棄つれば、前と異れるものに見ゆるが如く、花も火花も我が眼前にして更に大なる祝祭に變り、我は天上の大宮人のふたくみながら明らかになれるを見き。

嗚呼、眞の國の高き凱旋を我にあらはしし神の輝きよ。わがそれを見し事の次第を、物語るべき力をわれに與へよかし。

殆ど水平に投射せられ滿天の星も一樣に白みて消え行く也。

二、「太陽のいとけざやかなる侍女」――アウロオラ（曙光。煉、二の註四參照）。

三、「己が包めるものに包まるる」――「一點」の神は恰も天使の群によりて取り圍まれし如く見ゆるも、その實は天使の群が神によりて包容せられたる也。

四、「その造主のほかに」云々――神の認識（見神）、天の眞理なるベアトゥリイチェ（煉、三〇の註八）の美しさは人間によりても又天使等によりても完全には觀て悅ぶ能はず、ただその造主たる神によりてのみ此の事が可能なりとの意。――此處にベアトゥリイチェが一段と美しくなりしは彼等が今やエムピレオ（至高天）に昇りしことの證左なり。

五、「むづかしき主題」――神曲。――此の至難なる詩作いまや漸く終りに近付かむとす（「のがれ去らむとせる我が喇叭」）。――「更に大なる鳴物の告ぐるに委かすべきほどの」とはベアトゥリイチェの美を遺憾なく表現するは我以上の大天才に俟たざるを得ずとの意。

六、「いと大なる形體」――第九天（原動天。天、二八の註一二、一七參照）。――「純潔なる光の天」は淸火天卽ち至高天。こは光（信仰）と、

一四 かの高き處に光あり。創造者を見ることにのみ泰きを得る者に、その創造者を見えしむる光なり。

その光は遠く圓くのび擴がりて、一五 その周圍を太陽の帶になさむとも大なるに過ぎたり。

その情態の見ゆるかぎりは、原動天の頂に映り、かの天にその命と力とを與ふるところの光の線よりなれり。

しかして、綠の草にも花にも富める一の丘の、己自らの飾られたるを見むとするかの如く、その麓の水に己自らの影をうつすが如く、我等のうちの天上に歸りたる者等悉く、かの光の上にありてこれを圍み繞りつつも、千餘の座席より己自らをうつせるを我は見ぬ。

いと低き階段さへその內に斯くも大なる光を集むるなれば、この薔薇のいと外側なる花片の處にてはいかに廣かるべきぞ。

わが視力は廣きためにも高き爲めにも失はれず、かの悅びの質量ことごとくを取り收めき。

一六 かしこにては近きも遠きも、加ふることなく減らすことなし。神の親しくしろしめしたまふ處にては自然の法則の行はるることなければなり。

階段の上に階段をなして延びひろごり、また不斷の春を作すなる太陽に讚美の香を立ち騰らしむるところの、不朽の薔薇の黃なるにまで、ベアトゥリイチェは、あだかも默しつつも物言はましと願へる人の如くなれりし我を連れゆきていふ。

愛と、悅び（希望）との天にして眞の天國なり。

――「この光は」云々に就きては次の如き說あり、卽ち、こは幸福の三段階を示せるものにて、一、智の光によりて神を見、二、神を見て之を愛し、三、之を愛して遂に法悅に入る也と。

七、「天國の二隊の軍勢」――諸天使と諸聖徒。――聖徒等は既に此處にて最終審判の後に取るべき聖化せられたる姿態を以て現はる、卽ち最早眩き光に包まれずして現はるる也。

八、「潑剌たる光」――かくダンテのまはりを包める光は神の特別なる思召による照明なり、そはダンテをして究極的事物を認識するの能力を得せしめんがため也。

九、「燭」――天國に入り來る聖靈。――新しき燭を燃え立たせむがために焰の中に差し入るるが如く、天國に入る聖靈も亦最高の啓示にあづからむとするに先立ちて之に堪へ得むがために神の强き照明に遇ふ也。――此處の迎へ火の說明はスコラ哲學の說くところに從へるなりといふ。

一〇、「光の漂り流れたる」――默示錄、二二の一に曰く、「天使生命の水の河を我に示せり其水澄徹りて水晶の如し神と羔との寶座より出づ。」又、詩篇、四六の四に曰く、「河あり、そ

「視よ、白きを纏へる群のいかに大なるかな。我等の市を見よ、その周圍のいかに廣きかな。

一八 我等の座席のふさがりて、この後ここに迎へらるべき者等のいかに數少きやを見よかし。

かの大なる座席、卽ち既にその上に置かれたる冠の故に、汝が目をとめて見るところの座席には、汝がこの婚筵につらなりて食ふにさきだち、高きアルリイゴ一九の魂の着くなるべし。

されど、地上にて皇帝となるべき彼は、その備の成るにさきだちて、伊太利を直ぐせむ爲め赴くならむ。

汝等をまどはす盲目の貪慾は、飢ゑて死につつも其乳人を逐ひ斥くるかの小兒の如くにも汝等をなしたり。

二〇 しかして、顯にもまた密にも、彼と共に一の道をゆかざらむ者は、その時神の官廳に首座たるべし。

されど、神の彼をゆるして聖職に置きたまふは其後少時が間のみ。そは、彼はシモン・マアゴがその報をうくる處なる彼處に投げ入れられ、かのアナアニ二三人をして更に深く沈ましむべければなり。」

第三十一歌

基督の己が血を流して新婦となしたまひし聖なる軍勢は、かく純白

のながれは神のみやこをよろこばしめ至上者のすみたまふ聖所をよろこばしむ。」――こは神の恩寵が光の源より流れ下りて一切の被造物に光被することの象徵なり（ケエリイ本、ガアドナア註）。

二、「川と、」云々――此の「眞實の面影を示す前置」は神の直觀（見神）に對する準備なり。卽ち、神の光明の流れと、その光を人間に傳ふる天使等に依る人間の祝福となり。

三、「わが目をば」云々――今やダンテはその目を恩寵の光の流れに浴せしめたり。於此、時の流れの光は擴がりて永遠の形なる圓形となり、花と火花とは諸々の聖靈および天使としての正體を現はせり（五〇七頁一六―一九行參照）。

一三、「圓くなれり」――時の進行が永遠の相に變ることを表象せり（註一二參照）。

一四、この一節、――恰も今述べられし（五〇七頁一四―一五行）光の圈卽ち天上の薔薇が水晶天（原動天）にその力を授くる事を意味せり。

一五 「圓くのび擴がりて」――無始無終なる永遠の象徵（註一二、一三參照）。――「その周圍を太陽の帶に」云々の太陽の大きさをダンテはその直徑三五七五〇哩なりとせり（「饗宴篇」四の八の五一以下）。――次の一節（五〇八頁

なる薔薇の形をなして我に現はれき。

されど、自らに愛の火を燃えたたす者の榮光と、自らをそれほどにも大ならしめたる至善とを、翔びかけりつつ見て歌ふなる今一隊の軍勢は、蜜蜂の一群が、ある時の間は花に入り、また或る時の間はその作業の味よくなる處に引きかへしゐる如く、いと多くの花片をもて飾られたる大なる花の中に降りゆき、再び彼處より、彼等の愛の常に住る處にのぼりゆきたり。

彼等の面はいづれも活ける焰の如く、その翼は金にて、そのほかはいかなる雪も及びがたきほどに白かりき。

彼等が座席より座席へと花に降りゆきし時、彼等はその脇腹を扇ぎながら得たりし、平安と溫熱とをわかちたり。

又斯くも大なる群の飛びかひつつ、上なる物と花との間に介まれたれども、見ることも輝くこともこれによりて妨げられざりき。

そは、神の光は宇宙のことごとくを其功德に準ひて貫き、何物もこれが障礙となること能はざればなり。

古き民新しき民の群れつどへる、此泰らかにして悅ばしき國は、その目をも愛をも悉く一の目標にむけたり。

嗚呼、單だ一の星によりて彼等の目にきらめきつつ、かくも彼等を滿ち足らはすなる三一の光よ、この下界の暴風雨を望み見よかし。

エリイチェが彼女の愛兒と共にめぐりつつ、日毎に覆へる如き地方より來る蠻人共にして若し、ラテラアノが人の世の頂にありし頃なる羅

五―六行）の大意、――かゝる大圓形の光明も元はたゞ神より出づる一條の光に過ぎず。今原動天は此の光を受けてその「命」（運行）と「力」（下界に及ぼす働き）とを得る也。

二六、この一節、――神の自ら支配したまふところには時間もなく空間もなし。

二七、「白きを纏へる群」――默示錄、三の五に曰く、「勝を得るものは白衣を着せられん我その名を生命の書より塗抹さず」云々。

二八、この一節、――蓋し世の終り近ければなり。尙亦、世の有樣のいたく腐敗墮落せるを以て天國に選ばるる民の極めて少しとの意もこもりたるべし。――世界の終り近しといふことは中世紀一般の信仰なりき（但し、天、三九七頁一七―一八行の計算に據ればダンテは尙五〇〇年の猶豫をおきたり。「バッセルマン」同、九の註七參照）。

一九、「高きアルリイゴ」――ルクセムブルクのアルリイゴ（獨、ハインリヒ、英ヘンリイ）第七世。一三〇八―一三年間羅馬皇帝たりき。――ダンテは追放中のギベリン黨員、グェルフ黨中の白黨員等と同樣、但し就中狂熱的に、此の信心深くして勇敢なる皇帝に對して、彼の理想とせし世界統一の帝業完成につきて多大の望みを囑したりき（煉、六の註二三、同、三三

馬を見、またその高き功業を仰ぎて驚愕したらむには、人間の物より神の物に、一時の物より永遠なる物に來れる我の、又フィレンツェより正しく健かなる民の處に來れる我の、いかなる驚きにか滿されずしてあるべきぞ。

げに、驚きと悅びとの中にありて、我は聞かずして、また物いはずしてあらむことをよしとせり。

しかして、巡禮者がその誓願をかけたりし神殿の內にして、四邊を見まはしながら疲を忘れ、いつかは其有樣を語りつげましと望む如く、我はかの活ける光の間をぬけて我が目を走らせ、或は上に、或は下に、或は周圍にこれをやりたり。

我は神の光により、また己自らの光によりて美しくされたる、愛の情を起さしむるところの顏を見、またあらゆる品位をめぐまれたる動作を見き。

我は今や天國を一にくるめて見渡すことはなしたりしかど、その中の何處にも未だ目を留めて見ざりき。

かくて我が思ひ惑へる事柄につきて、わが淑女に問はましとねがふ新しき願に燃え立ちつつふりかへりぬ。

しかもわが需めしものと、應へられしものとは同じからず。わが思ひしはベアトゥリイチェを見むことなりしかど、わが見しは榮光の中なる人々の如く衣をまとへる一人の翁なり。

彼の目と彼の頰とは慈ぶかき悅びに被はれ、彼の容態はやさしき父の註九參照）。

二〇、「盲目の貪慾」――天、二七の註二四參照。――「其乳人を逐ひ斥くる」云々とは皇帝（「乳人」）に反抗せしグェルフ黨及び多くの僧侶等を非難せし言葉なり。

二一、「者」――法王クレメンテ第五世（地、一九の註二〇、天、一七の註一三參照）。――「神の官廳」とは寺院、その「首座」とは法王なり。〔當時クレメンテは法王位に卽けるも「其後少時」にして（一三一四年四月）死せり〕

二二、「シモン・マアゴ」――地、一九の註一參照。――「その報をうくる處」は地獄の第八獄第三囊なり。

二三、「アナアニァ人」――ボニファチオ第八世（アナアニァの生れにして終に其地の人々に捕へらる。煉、二〇の註三二參照）。――「更に深く沈まむ」につきては、地、一九の註一八、一九參照。

第三十一歌

（第十天（エムピレオ）。神、諸天使、諸聖徒、その二。聖ベルナルド、聖母の榮光。）

一、「聖なる軍勢」――基督がその血をもて贖ひたまひし聖徒等の群。

二、「今一隊の軍勢」――諸天使の群。――聖アンセルモは神に奉仕せる天使等を、忙しげに

にもふさはしきほど思ひやりありげなるものなりき。

「彼女は何處にありや。」唐突にも我は斯く言へり。これに應へて彼はいふ、「汝の願ふところを成し遂げむため、ベアトゥリイチェは我をして我がありし處を離れしめき。

汝若し、かのいと高き列[一]より第三の環[二]にあたる處を仰ぎ見ば、彼女の功德によりて許されたる寶座の上に、再び彼女を見るならむ。」

答へをなすこともなくして、我はわが目をあげ、彼女が自ら一の冠を作りて、彼女自らより永遠なる光を反照[三]しつつあるを見き。

人間の目の、いかなる海のいと深きに沈められむとも、雷のいと高く鳴り轟く處より遠きこと、我が目のかしこにしてベアトゥリイチェより隔たりしには及ばじ。

されど、こは我にとりて何事にてもあらざりき。そは、彼女の像は中間なる何物にとりてもくもらさるることなく、我が處に下り來りたればなり。

「嗚呼、わが望を强うする者、また我が救の爲めに、汝の足迹を地獄にのこすことを忍びし者なる淑女よ。

我が見たる物悉くの恩寵と能と、なんぢの力により、なんぢの善德[四]によれることを我は承認せむ。

汝はなんぢの取るべきあらゆる道を盡し、方法をつくして、奴僕なりし我を自由になしたり。[五]

汝の健かになしたる我が魂が、汝の意に適ふやう肉體より離るるを

蜜を集むる蜜蜂になぞらへたり、即ち彼等は地上の諸々の花と天國の蜂の巣との間を飛び通ふなり。

三、この一節、――此處に擧げられし色彩に就きて、「活ける焰の如」き赤は愛を、「金」色は智を、「白」色は力を表はして神の三位一體の象徵なりといふ（地、三四の註六參照）。一說には白色は純を表はせりともいふ。

四、「その脇腹を扇ぎながら」――翼を打ちて。即ち、神の御許に飛び行きながら。

五、「古き民新しき民」――舊約聖書および新約聖書時代の諸聖徒。――「一の目標」は神。

六、「エリイチェ」――煉、二五の註三三參照。――此處は大熊星の意。――「彼女の愛兒」はアルカといふ。此處にては小熊星の意なり。――「日毎に覆へる如き地方」とは遙かなる北方の意。

七、「ラテラアノ」――皇帝ネロ以後羅馬の皇居たり。――「人の世の頂にありし頃」とはその全盛時代の意なり。

八、「フィレンツェ」――フィレンツェはあらゆる邪惡の巣なりき（地、二九頁一九―二〇行同、一二七頁始二行、煉、二〇四頁一三行以下參照）。――神曲中此の市の名の見ゆる最後なり。

九、「神の光により」云々――神の光と、眞の善

得むことの爲め、ねがはくは汝自らの惜みなき賜をわが衷に護れよかし。」

斯く我は請ひ求めき。かの如く遠く見えたる處に彼女は、微笑みて我を視しが、やがて永遠なる泉にむかひき。

かの聖なる翁は言へり、「願ひと聖なる愛との我を遣しし目的なる、汝が汝の旅を全きものになし得むことの爲め、汝の目を此園の間に翔び行かしめよ。

これを見るによりて汝の視力は、神聖なる輝を分けていや高く昇り行くことの力を得べければなり。

又、わが全身を火になして愛する『天の女王』[七]は、いかなる恩寵をも我等に與へむ。そは我は彼女の忠誠なるベルナルドなればなり。」

我等のエロニカ[八]を見むとてクロアティアあたりより來るものあらむに、そが古くより名の聞えたりしによりて、彼はつひに飽くことなく、その示さるる限り、いつまでも心の中に言ふならむ、「我が主なる耶蘇基督よ、眞の神よ、さては斯かる御姿にて君のありたまひしかや」と。

この世界にて、默想の中にかの平安を味ひし彼[九]の、活ける仁愛の姿を我が見しときも、亦げにかくの如くなりき。

彼はいふ、「恩寵の子よ、汝の目をただ此底にのみ注ぎたらむには、この悅ばしき存在は汝に知られざるべし。

されば諸の環を見やりていと遙かなるものにまで及べ。さらば、終に汝は此國の服ひまつらへる女王を、その座席の上にして見るなるべ

行に達せし已が自由意志とに依りて。

一〇、「一人の翁」――聖ベルナルド（一〇九一―一一五三年）。佛蘭西のボルゴオニアなるフォンタンに生れ巴里に學びし後、一一一三年（彼二十二歲の時）その鄕里より程遠からざるシトオの町に新設せられしベネディクト派の僧院に入れり。その後二年にして彼は一派の長に選ばれ敎勢擴張のために熱心なる一群の信者と共に出發してシャムパアニュに到り、猛獸と盜賊との跋扈を以て知られし荒蕪の地「苦惱の谿」に僧院を建て、やがて此地を穀物や葡萄に豐かなる地に一變し、地名もクレエルヴォオ（光の里）と呼ばるるに至りき。その後（一一四四年）第二十字軍の出征を提唱せしもその失敗後は彼の勢力も衰へ寂しき晩年を送りしものの如し。――彼には數多の著作あれども就中「瞑想論」（De Consideratione）最もあらはれ且つダンテに影響を與へしところ多し。尙彼は聖母マリアに歸依すること極めて篤くその熱誠なる說敎中には多くの雄辯麗句ありてダンテも此の曲中に屢々借用せりといふ。――此く彼が特に深く聖母を愛せしことと默想を以て名高かりしこととにより神曲の最後に於てベアトゥリイチェの代りにダンテに三位一體の神祕をうかがふを得しむるなりと。

し。」

我は目をあげぬ。しかして朝には地平に近き東の天の、日の沈む處に優るが如く、我はあだかも目をもて谷より山へのぼりゆくさまに、かの頂の端にして、そのほかの總てよりも光のまされる一の處を見き。

又、恰もフェトンテの驅りあやまてる車の輻の待たるる處はいと強く燃えさかり、その彼方にても此方にても光の衰ふるが如く、かの平和の金焔旗の、その中程はけざやかにかがやき、兩側はひとしく焔を弱めたり。

しかして、かの中程に我が見し千餘の天使は、輝きにも動作にもそれぞれに異りつつ、その寰をひろげて歡び舞へり。

その處に我は見き、總ての聖徒等の目に悅ばれたりし一の美しきものの、彼等の舞と彼等の歌とに微笑めるを。

我がよし、想像に富めるほど言語に富みたりしとも、我はその樂しさの聊かをも叙ぶることを敢てせざるべし。

ペルナルドは彼目らを燃え立たす物のあるところに、わが目のしきりに注がれたるを見し時、いと嘉はしげに彼自らの目をもそれに向け、我が目をして愈々切に見守らしめき。

——故に天國に於ける聖ベルナルドの任務は煉獄に於けるマテルダのそれに類似せり。

二、「第三の環」——最高の環には聖母マリア、第二の環にはエヱヴ、第三の環にはラケエレとベアトゥリイチェ（天、三二の冒頭三—六行以下を見よ）。

三、「永遠なる光」——神の光。それが聖畫に見ゆる後光の如くに反照したり。——聖靈の後光は神性の完全なる直觀、內的攝取および享受を意味するものにて、その悅びが彼等の身體より外へ反射せるなりとの說あり。

一三、以下三行、——天、五〇八頁一五—一七行參照。

一四、「足迹を地獄に」——地、八頁一一行以下。

一五、「自由になしたり」——煉、六頁一三—一四行、同、三〇の註八參照。

一六、「願ひと聖なる愛との」——ベノトゥリイチェのベルナルドに對する願ひと、彼女のダンテに對する愛との。

一七、「天の女王」——聖母マリア。

一八、「ゼロニカ」——眞の像の義。基督がゴルゴダの坂に十字架を擔ひし時一人の婦人ありて（其名がゼロニカと呼ばれしともいふ）主にその汗を拭ひ給はんがために手巾を差出せしに再び受取りて之を見れば聖貌さながらに之に

第三十二歌

その悅樂に尙ほ浸れるままにして、かの默想者は自らすすみて教導の任にあたり、聖なる言葉をもて語りていふ。

「マリアの寒ぎて胥をぬりし傷を、かの傷を開きたりし者、またそれを刺し貫きたりし者は、彼女の脚下にありていと美しき婦なり。

彼女の下に、第三の座席より成る列には、汝の見る如く、ラケエレ[一]とベアトゥリイチェと坐したり。

わがそれぞれの名を擧げながら、花片より花片へと薔薇の中を下り行くにつれ、汝は、サラ、レベカ、ユディッタ、並びに己自らの罪を悲み痛みて、我を憐みたまへと言ひし歌人の曾祖母なる嫗が、かくの如く列より列へと次第をなして坐するを見ることを得む。

又第七の列より下には、恰かもそれまでくだり來りし如く、希伯來人の婦等互に相續きて花のすべての瓣を別てり。

そは彼等は、信仰の基督をみし見方によりて、この聖なる階段をわかつところの壁なればなり。

花の花片悉くをみたされたる處なる此方には、來りたまふべき基督を信ぜし者等坐したり。

諸の半圓の空席によりて蝕まれたる處なる彼方には、既に來りたま

寫されたりしと。その後之が羅馬なる聖彼得教會に保存せられしため、四方の國々より此處に參集せし者甚だ多かりしといふ。——「クロアティア」は墺匈國南部の一地方。一般に遠國を指せるなり。

一九、「默想の中にかの平安を味ひし彼」——聖ベルナルド。彼は默想の象徵たり（註一〇參照）。

二〇、「恰もフェトンテの」云々——大意は、地平線上間もなく太陽の昇り出づべき地點にありては光最も强く、之より遠ざかるに從ひてその力次第に弱し。——「フェトンテ」につきては地一七の註二二參照。

二一、「平和の金焔旗」——天上の薔薇のうち聖母マリアの座を中心とせる一部分。——「金焔旗」とは黃金地に焔を描ける古代佛蘭西諸王の軍旗にして天使ガブリエエレより授かりしものにて此旗の下に戰ふ者は勝たざることなしと傳へらる。——今ダンテは光に因みて此の名稱を用ゐしも、その當勝の意は地上の戰ひに關せずして天國の平和に關したるを以て特に「平和の」と形容せし也。

三、「一の美しきもの」——聖母マリア。

第三十二歌

（第十天（エムピレオ）。神、天使、諸聖徒、その三。諸聖徒の區分。天上の薔薇。）

へる基督に顏を向けし者等あり。

又此方にては、天の淑女の榮光の座席とその下なる他の座席とが、さばかり大なる區分をなす如く、對側には、つねに聖にして、曠野を、殉教を、ついで二年にわたる地獄を堪へ忍びし、大なるジョヴンニの座席も亦同じ事をなしたり。

又、彼の下にフランチェスコ、ベネデット、アアゴスティイノ、及びその他の人々も割りあてられて斯く別ち、圓より圓にと下りて此處に及ぶ。

いざ、高き神の攝理を視よ。そは信仰の二態いづれも等しく此園を滿たすべければなり。

また知れ、二の齟線を中程にて截れる列より下なる者等は、彼等自らの功德の故ならで、寧ろある約定の下に、他人の功德によりてかしこに坐するなることを。

そは、これらの者は皆、善き惡しきを眞に撰び別くるの力を有つにさきだちて、體をはなれ去りし靈なればなり。

汝若しよく彼等を見、また彼等に耳を傾けなば、彼等の顏によりて、また彼等のあどけなき聲音によりてこれを知るを得む。

今汝は思ひ惑へり。しかも思ひ惑ひつつも默したり。されど我は、汝の細緻なる思索の汝に加へたる縛を汝の爲めに解かむ。

この國の大なる廣がりの內にも、哀みなく、渴きなく、飢なきが如く、偶然なるもの一だもあること能はず。

一、「その悅樂」――聖母マリアに見入ること。

二、「マリアの寒ぎて膏をぬりし傷」――聖母マリアが基督を產みしことによりて癒やし給ひし人類の罪の傷。

三、「いと美しき婦」――エエヴ。神の親しく造りたまひし者なれば最と美しき也。

四、「ラケエレ」――默想の生を表はす（煉、二七の註一三、一四、一五參照）。又、そのベアトゥリイチェと相並びて坐せることに就きては地、二の註一六參照。

五、「サラ」――アブラハム（地、四の註一六）の妻（初めサライと呼びしも後神の命によりサラと改めしといふ。創世記、一一の二九、同、一七の一五等）。

六、「レベッカ」――イザッコ（イサク。地、四の註一九）の妻リベカ。

七、「ジュディッタ」――ユウディット（煉、一二の註二二參照）。

八、「曾祖母なる婦」――ルッ（路得記、一の四以下）ダギイデ王の曾祖父ボアズの妻たり（路得記、四の二一―二、馬太傳、一の五―六）。――彼女は聖母マリアより數へて「第七の列」にあり。――上なる「我を憐みたまへと言ひし歌人」（ダギイデ王）に就ては煉、一〇の註一八參照。其歌は詩篇五一の冒頭に見ゆ。

そは、汝が見るほどのあらゆる物は、永遠なる律法によりて定められ、ここに指環はまさしく指と相適へばなり。

されば、眞の命に急ぎし此人々の、この處に秀づること相等しからざるも故なきにあらず。

敢へてこの上を願ふものなきほど、大なる愛と大なる悅との中に此國をやすらはせたまふ國王は、彼自らのよろこばしき御顏の前に總ての心を造りつつ、聖意のままにさまざまなる恩惠をわかちたまふ。ここには此事あるをもて足れりとせよ。

しかして、こは汝の爲めに强く明らかに聖書の中に記されたり。即ち、母の體內にありて怒を起しし双生兒等の場合なり。

乃ち、斯かる恩惠の髮の色に準ひて、いと高き光はそれにふさはしき冠とならざるをえじ。

されば彼等は、彼等自らの踐み行ふことの功德によらで、ただ最初の視力の銳さを異にするのみにして、異れる段階に置かるるなり。

げに、早き數世紀の間は、罪なきに加へて、兩親の信仰だにあらば、救ひを得るに足りたりき。

始めの時代の終りし後は、男子等は割禮によりて其罪なき翼に力を添へざるを得ざりき。

されど恩寵の時の來れりし後には、基督による全き洗禮なくば、かかる罪なきものもかの低き處に抑留められき。

「いざ、基督にいとよく似たる面を見よ。そは、ただ其輝かしさのみ

九、「そは彼等は」云々――彼等（希伯來人の婦等。五一五頁自終七―六行）は、基督の出現を豫め信ぜし人々と、その出現後に之を信ぜし人々と（卽ち、舊約時代の聖徒と新約時代の聖徒と、――兩者は「信仰の基督をみし見方」相異れる也）を分つ境目をなせる也。

〔聖母マリアより下方に薔薇の中央に至るまでは希伯來人の婦のみ垂直に相重りて並べり。彼女等の左側には基督の出現を豫め信ぜし舊約の人々、右側にはその出現後に之を信ぜし新約の人々着座し、各々の下層には祝福に入るべき幼兒等（未受洗は左、既受洗は右）の席あり。彼女等と相對する側には洗禮者約翰、聖フランチェスコ、ベネデット、アアゴスティィノ其他の聖者等一列をなしたり〕

一〇、「大なるジョヴンニ」――洗禮者約翰。――「曠野」につきては煉、二九二頁自終三行以下參照――「殉教」につきては天、四四七頁自終三行以下並註二七參照。――「二年」云々とは、基督のリムボに降りて諸靈を救ひ出せし時まで約翰も其處に止りし也。

一一、「フランチェスコ」――アッシイジの聖者（天、第十一歌參照）。

一二、「ベネデット」――ノルチアの聖者（天、一二二の註四參照）。

汝をして基督を見る者になし得ればなり。」

我、見き、かの高き處をわけて翔びゆく爲めに造られたりし、諸の聖なる心に運ばれたるいと大なる悅びの、彼女の上に雨りそそげるを。

わが目に見たりし何物も、かく大なる驚きをもてわが心を捕へしはなく、また斯くまで神に似たるものを我に示ししはなし。

さて、前に彼女に降りたりしかの愛は、「恩寵のゆたかなる者マリアよ幸なれ」と歌ひつつ、彼女の前に翼をひろげたり。

祇ゐる廷臣達はいづれの側よりも此聖歌に和し、いづれの面もこれによりて更にはればれしくなりぬ。

「嗚呼、汝が永遠なる定めによりて坐する愛でたき處を去りて、わが爲めに此低き處に下るをいとはざる聖なる父よ。

かの甚く悅びて我等の女王の目を見入り、自ら燃え立つかと見ゆるほどにも熟愛せる天使はそもそも誰ぞや。」

さながら太陽をむかへたる曉の星の如く、マリアによりて美しくなれる者の教示に我は斯く再び倚りたのみき。

さて彼は我にいふ、「天使に、また魂にあり得るほどの賴母しさと床しさとは、悉く彼のうちにあり。われらも亦その然るを好べり。

そは、神の御子の、我等の荷を負はむと思ひたまひし時、棕梠をマリアに齎らしくだりしは彼なればなり。

されどいざ、わが語り進むにつれて汝の目を馳せ、このいと正しき信心深き帝國の大なる顯官達を見よ。

かの高き處に坐し、皇后にいと近きによりていと幸なる二人の者は、すなはち此薔薇の二の根なり。

左の方にて彼の次ぎなるは、不敵に味ひみしことの故に、人類をしてかくも多くの苦さを知らしむにいたれるかの父ぞ。

右手には、この愛でたき花の鍵を基督より委ねられたる、聖教會の古の父を見よ。

又、彼の側に坐せるは、槍と釘とをもて獲られし麗しき新嫁の痛ましき時ことごとくを、己が死にさきだちて見し者ぞかし。

他の側には、忘恩の、移集にして頑なる民の、マンナを糧となしたりし頃、彼等を率ゐし者休らへり。

ピエエトゥロのむかひにアンナの坐せるを見よ。彼女はその女を見やりて太く心に滿ち足らひ、オザンナを歌ひつつも目を逸らすことなし。

また、いと古き家長のむかひには、汝が落ちゆかむとて願をたれたりしとき、汝の淑女を動かしルウチアぞ坐したる。

されど、汝を眠りにとどめ置く時の翔びゆくなれば、あだかも善き縫物師の持ち合せたる布地に合せて美物を作るが如く、ここに我等は言を止めて、かの第一の愛に我等の目を向けむ。さらば汝は彼の方を見やりつつ、彼の輝きに突き入る限りを深く突き入ることを得む。

さあれ、或は汝の翼を動かして、進むと思ひつつも退くことのなからむ爲め、汝はすべからく祈によりて恩寵を享くべきなり。よく汝を

一三、「アアゴスティイノ」――名高き聖アウレリウス・アウグスティヌス。羅甸教會の教父にして、三五四年一一月一三日にヌミディアなるタガスタに生れ、四三〇年八月二日イッポにて其町のヴンダル族のために攻圍中死せり。――彼の父は異教徒なりしもその母の基督教信仰の感化をうけて生長し後にミラノの僧正聖アムブロシウス（三三四―三九七年）の教化を受け三八六年改宗し且つ洗禮を受け、再度の羅馬訪問の後イッポに赴きて長老に任ぜられ、後三九六年に僧正となれり。――彼の著書のうち世に名高きは「懺悔錄」と「神の都」となり。前者は彼が僧正となりし後その前半生を懺悔せし熱烈なる信仰告白書、後者は基督教および基督教會のための擁護論なり（天、一〇の註一七參照）。

一四、この一節、――天上の薔薇に於ける舊約時代の聖徒等と新約時代のそれとが略々同數なる事に驚異せし意。――此の兩者同數なることに就きては種々の說ありて、或は基督以前は準備時代にてそれ以後と同じまでに多數の聖靈の救はれし筈なきを以て、こは專ら詩的調和のためなりといひ、或はまた世界の終り近しとの中世的信仰に基けるならむ等と言へども、基督はその出現後と同樣その以前にも

はたらきを與へたりきとの考へに基ける也といふフィラレテスの說に對しバッセルマンは例の今後五〇〇年說（天、九の註七）に據りて基督以降が一八〇〇年なるに對し、以前は五二〇〇年の久しきに亘れるを以て、その割合よりすれば新約時代の人々は比較的に多數なりとの說を立てて左祖せり。

一五、以下三行、――天上の薔薇の最底部には幼兒等の座席あり。彼等は「ある約定の下に」（五一七頁一五―一六行以下）および彼等の兩親の信仰（「他人の功德」）によりて此の祝福にあづかる也（註九別言參照）。

一六、「ここにも此事あるをもて足れりとせよ」――幼兒受福の程度が種々樣々なることに關するダンテの疑問（五一六頁一八―一九行）に對して、かく人間にとりては說明し得べからざる神の豫定なりとの回答を得しなり（煉、一八五頁五―七行參照）。

一七、以下三節、――右（註一六）につき聖書中の實例を擧げて說明せし也。――「双生兒等」とはエサウとジャコッペとの事（天、八の註二八參照）――「場合なり」とは、胎內にて既に神意定りゐて兄が弟に仕うべかりしことを指せる也。創世記、二五の二三參照。

一八、「早き數世紀の間」――アダムよりアブラハ

扶くべき彼女[三]よりの恩寵ぞ。
また汝は、汝の情の我が言葉より離れざるやう、汝の愛膏をもて我に伴へよかし。」
かくて彼はこの聖なる祈を唱へはじめき。

第三十三歌

「處女なる母、汝自らの子の女、いづれの造られし物よりも謙りて尊き者、永遠なる御量らひの定まれる標的よ。
汝こそは、人性を氣高くし、その造主をして自ら造られし者になることをさへ厭はざらしめしなれ。
汝の胎内にして『愛』はあらたに燃え立ち、その溫熱によりて此花は永遠なる平安の中に斯く咲き出でたり。
ここにては汝は我等にとりて仁愛の正午の炬火、また下界なる人間の間にありては望の活ける泉なり。
淑女よ、汝はまことに大なる、まことに能あるものなれば、苟くも恩寵をもとめつつも汝に倚りたのまざらむは、翼なくして翔ばむとねがふに異らじ。
汝の慈みは單だ請ひ求むる者を扶くるのみならで、自らすすみて求に先んずること屢々なり。

ムに至る間（これ割禮はアブラハムに始まりしがためなり。創世記、一七の一〇以下）。
一九、「始めの時代の終りし後」――アブラハム以後基督出現に至るまで（割禮を以て救濟の契約となせし時代なり）。
二〇、「恩寵の時の來れりし後」――基督の降世後――「全き洗禮」とは割禮の不完全なるに對して云ひし也。――「かの低き處に」云々につきては地、一七頁一八行及煉、二〇六頁一九―二〇行參照。
二一、「基督にいとよく似たる面」――聖母の。
二二、「聖なる心」――天使。
二三、「前に」――恒星天に於て（天、四七二頁二行以下を見よ）。――「彼女に降りたりしかの愛」は首天使ガブリエエレ（煉、一〇の註九、一〇參照）。――その歌ひし歌につきては、天、三の註一〇及煉、一〇の註一〇參照。
二四、「聖なる父」――聖ベルナルド。――一〇六―八の「マリアによりて美しくなれる者」も亦之に同じ。
二五、「大なる顯官達」――羅馬の官名（patri.――選出されし古羅馬の貴族）を借りて諸聖徒中の優れたる者達を示せり。――同じく羅馬に因みて天國を「帝國」といひ、マリアを「皇后」といへり。

汝には慈悲あり、汝には憐憫あり、汝には恩惠あり、造られし物のうちにあるほどの、いかなる善きものも皆汝の中にて一になりたり。
今ここに、宇宙のいと低き深潭より此處にまでも、靈界の情態をつぎつぎに見て來れる者、汝の恩寵を請ひもとめて、彼自ら終極の救の方へその目を更に高く擧げ得べきほどの力を享けむとす。
また、彼の靈覺の爲めに我が燃え立てるより上にいでて、我自らの靈覺の爲めに燃え立ちしことなき我は、わが祈の悉くを汝にささげ、しかもその足らざらむことを祈る。
ねがはくは、汝の祈をもて人界のあらゆる曇を彼より拂ひたまひ、こよなき歡喜の彼に示さるるを得むことを。
更に我は汝に祈る、苟くも思召す限りを悉く成しとげたまふ女王よ、かくも大なるものを靈覺したる後、御力によりて彼の情操の健かなるがままにしてあるを得むことを。
願はくは汝かれを護りて、人間のひくき慾情に打ち克たしめたまへ。
見よ、ベアトゥリイチェが總ての聖徒等と我が祈に伴ひて、汝にむかひて合掌したるを。」
神に愛で敬はれたるかの目は、祈れる者の上に注ぎて、信心ぶかき祈のいかに彼女の意にかなへるやを我等に示しぬ。
やがてかの目は永遠なる光のかたへ向けられしが、苟くも造られし物の目にして、かくも明らかにその中を見入らむは、世にあるべしとも思はれじ。

二六、「二の根」――アダモ（基督の降世を信ぜし最初の人。五一九頁四―五行）とビエエトロ（降世せし基督を信ぜし第一の人。六―七行）
二七、「この一節」――福音書の著者約翰（默示によりて數多の迫害に遇ふべき教會――新婦――の全歷史を豫見せり）。
二八、「この一節」――神恩を忘れて屢々神の怒に觸れしイスラエルの民を正しきに導きし者モオセ（出埃及記、一六、三二、及申命記、三二等）。――彼はアダモと並びて着席せり。
二九、「アンナ」――聖母マリアの母。
三〇、「ルウチア」――聖ルウチア（地、二の註一五、煉、九の註一四參照）。
三一、「汝を眠りにとどめ置く時」――ダンテはその昇天の初めにあたりて彼が肉體のまゝなりしか或はたゞ靈魂のみなりしか知らずと告げたり（天、三五五頁二〇行以下參照）。圖らずも此處に與へられし此の假睡の暗示は或は眞の着想の端緒を語るものの如し。肉體は現に眠りに就きて横はれる時靈魂は肉體を離れて活動し靈界に訪れてあるなり。天國の歷程は罪障界の俘囚および此の死すべき肉體よりの靈魂の救濟を表象せり（ノオトン註）。
三二、「聖なる愛」――神。
三三、「彼女」――聖母マリア。

又我は、あらゆる願の滿さるる處に近づきたりし故、自からわが熱望の火の衷に靜まれるを覺えき。

ベルナルドは我が仰ぎ見む爲め、微笑みつつ我に合圖をなしぬ。されど、我ははやわれ自ら、彼の願へるごとくなしみたりき。

そは、我が視力は澄みわたりて、それ自ら直實なる高き光の輝きの中へ、いよいよ深く入りゆきたればなり。

その後わが見しものは、我舌の言葉より大なりき。斯かる靈覺には言葉も及ばじ。斯くも過度なるものには記憶も及ばじ。

我はあだかも、夢を見たる人の、さめての後その感動をのみとどむれども、そのほかの物を想ひ浮ばざる如し。

そは、我が見しもの殆んどみな消え去りたれど、それより生れし嬉しさのみ尙はわが胸の內に滴ればなり。

雪の日に融くるも斯くこそあらめ。輕き木葉の上にして、シビルラの託宣の風に散りうせしもかくこそあらめ。

嗚呼、至上の光、これほどに高く人間の思想を超越する者よ、汝の見えしところの物いささかを我が心に返し、また我が舌を强くして、汝の榮光の閃き一をなりとも、來るべき人々の爲めに遺すを得しめよ。

そは、聊かなりとも我が記憶にかへり、又僅かなりとも此等の詞章のうちに響き渡ることにより、汝の勝利はいやまさりてさとらるべければなり。

第三十三歌

（第十天（エムピレオ）。神、諸天使、諸聖徒。聖なる祈。最後の天啓。その四。神。）

一、以下五二一頁一六行目迄――ダンテのために聖ベルナルドが聖母マリアに捧げし祈りの詞。――「處女なる母」は煉、二五の註三〇參照。――「汝自らの子の女」とは其生みし耶蘇基督が神としては父なる意。――「謙りて尊き者」とは路加傳一の四六以下に據れる也。――「永遠なる御量らひの」云々とは神に選ばれて救世主の母とせられしこと。

二、「宇宙のいと低き深潭」――地獄。――「見て來れる者」はダンテ。――「終極の救」は見神（天、三七三頁一六行以下、同、四二三頁一四行以下）。

三、「かの目」――聖母マリアの。

四、「自らわが熱望の」云々――ダンテの大願今や正に成就せむとするに至りたればなり。

五、「見しもの」――幻覺（若くば天啓）。

六、この一節、――記憶の去りゆく樣を更に二つの比喩を以つて示せる也。――「シビルラ」はカムパニアなるクウマ（ナポリ西方の町）の洞窟に住めりし巫女にてエエネアの冥府行に伴ひき。彼女の神託を誌せし木の葉が風に吹かれて舞ひ去るも些か意に介せざること

思ふに、我が堪へし活くる光の銳さより、若し我が目の逸らされざりしならむには、我はために眩惑きたりしなるべし。

しかも我は忘れじ、この爲めに我が愈々堪へ忍ぶ力を得て、つひにわが觀照を限りなき善德と合一せしむるにいたりしことを。

嗚呼、かしこに我が視力を用ひ盡ししまで、我をして永遠なる光の中に目を注ぐことを敢てせしめたるかの恩寵の廣大なるかな。

かの光の深みには、遍く宇宙にちらばれる物の寄せあつめられ、愛をもて一卷に綴られたるを見き。

實體も偶然なる存在も、その情態も融け合ひて、さながら、我が言へるもの單だ一の光にすぎざるが如くなりき。

思ふに、この結目の普遍なる形式を我は見き。そは、これを言ふによりて、我はわが歡喜のひろがりゆくを覺ゆればなり。

單だ一瞬の間さへ我にとりては、ネプトゥウノをしてアルゴの影を異ましめしかの企圖にさかのぼる、二千五百年より久しき昏睡なり。

さて斯く我が心はまたく奪はれたるままに、擯がず、うつろはず、また餘念なく見入りたり。しかも見入るにつれていよいよ燃えさかりたり。

かの光に對ひては、人は他の物を見むとてそれより身をそむけむことを思ふべくもなし。

そは、意志の對ふところなる善は、悉くその中に集められてあり、かしこにて完きものもその外にては完からざればなり。

「エエネアの歌」三の四四一――五二に見ゆ。

七、「汝の榮利」――汝の全能（父、汝の榮光）。

八、この一節、――全存在の本源たる神よりして一切の事物、一切の特質、一切の關係は流れ出づる也。故に見神の祝福にあづかれる聖徒等にとりては、神自身およびその遍在の中に於て之等世界を組立つる一切のものが渾然たる一體となりて一眸の中に入り來り且つ彼等を悅ばす也（天、一三の註六、同、四二八頁一九行以下、四三八頁一一行以下、二八の註三、三〇の註一六參照）。

九、この一節、――示現の後一瞬間に於ける我記憶が、二千五百年の太古に行はれしかのアルゴ遠征の物語の記憶ほどにも明かならざりし（忽ちにして忘れ果てし）との意。――「ネプトゥウノ」は海神。――「アルゴ」につきては地、一八の註二一參照。これ海を渡りし最初の船なりしを以て海神を「異ましめし」也。――「二千五百年」は基督以後一三〇〇年に、傳說上アルゴ遠征のことありしといはるる紀元前一二〇〇年餘を加へしもの也。

一〇、以下一六行目迄――三位一體の示現を述べたり（ダンテの觀想の愈〻深く誘徹しゆく也）

二、この一節、――父と子と聖靈との象徵。

三、「イリイデ」――虹の女神（天、一二の註二

今や、わが思ひ浮ぶる事につきてさへ、我が言の葉の足らざるは、尚ほ舌を乳房に濡らすなる幼兒よりも甚だし。

我が見守れりし活ける光は、いつも前にありし如くにて、その内に單だ一より多くの像のありしにはあらで、むしろ、わが視力の見るにつれて強まれるにより、唯だ一の姿はわれ自らの變るに從ひ、さまざまに變りて我に見えたるなりき。

高き光の奥深く清きが中に、同じ大きさの、三色の三の環は我に現れぬ。

イリイデのイリイデに於ける如く、一の環は今一の環によりて反照され、第三の環はかの二より等しく吐き出さるる火に似たり。

嗚呼、わが想に比べては、言語のいかに足らはざるかな、いかに力弱きかな。しかもその我が想さへわが見し物に比ぶれば、僅かにといふにも足らざるほどぞかし。

嗚呼、永遠なる光よ、汝自らのうちにのみ在し、汝自らのみ自らを知り、又汝自ら知りつつ知られつつ、汝自らを愛でて微笑みたまふ者よ。

汝の生める反照かとも思はれたるかの環は、わが目の少時見守れる間に、その内に人間の肖像を、それ自らと同じ色もて描けりと我に見えし故、わが目は悉くその上に注がれぬ。

かの、一心に圓を測らむと務めつつも、己が要むる原理に想ひ到らざる幾何學者こそは、さながら、かの新しき物を見しときの我なりけれ。

三の初め參照）。――二重の虹のうち外なるは内なるものの反映なる如く、「一の環」（父）は「今一の環」（子）によりて反照せられ、「第三の環」は父と子との「二より等しく吐き出さる火」にして聖靈を表せり。

一三、この一節、――「永遠なる光よ、汝の自らうちにのみ在し、汝自らのみ自らを知り」こは三位一體の神なり。――「汝自ら知りつつ」こは父なり。――「知られつつ」こは子なり。――「汝自らを愛でて微笑みたまふ」は、以上兩者の互ひに認め合ふ愛より生ぜし聖靈也。

一四、この三行、――人間は神の像に倣ひて造られたり。故に神の完全なる直觀は人間の姿を再認識せしめざるべからず。――それと同時に此處にては基督に於ける神人兩性の完全なる一致が指示せられたるものと見るべし。

一五、この一節、――見神の神祕を語らむは到底不可能なりとの意。――「圓を測らむと」云々とは、圓を同じ容積の方形に變じて測らむとすること、即ち圓の求平積法の試み（天、一三の註一七「プリソン」の項參照）。こは未解決のままなりき。

一六、この一節、――人の像の「いかにして」神の「環」と斯くも相適合せるや、「また如何にし

我は、かの像のいかにして環と相適へるや、また如何にして彼處にあるやを知らむとねがひぬ。

されど、われ自らの翼は、此事をなすにふさはしからざりしに、此時忽ち、一の閃くものありて我が心を擊ち、わが心の願ふところを滿たしき。

偖て、ここにいたりて高き想像はその力を失ひたり。されど我が願ひとわが意志とは、太陽をも他の諸の星をも動かす『愛』によりて、むらなく廻りうごく車輪のごとくにもめぐりたりき。

て」其中に「あるやを知らむとねがひ」し也。即ち神人兩性合一の祕義に徹せむと願ひし也。

一七、「此時忽ち」云々――神の恩寵の最後の照明（頓悟）なり。

一八、「我が願ひとわが意志と」――ダンテの願ひと意志とは今や全く神のそれと同一のものになれり。――「諸の星」につきては地、三四の註二九、煉、三三の註三一參照。

——「神曲」了——

世界文學全集(一)

神曲

第三十回配本

非賣品

昭和四年八月二十日印刷
昭和四年八月三十日發行

飜譯者　生田長江

發行者　佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所　新潮社

電話牛込
(代)
八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

振替東京　二三、四五〇番

植木製本所(廣橋納)

東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

終